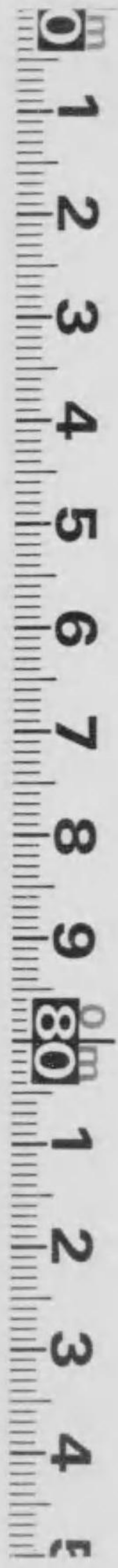


190  
MA82



始





3580

190  
MA82



農理  
學  
抄  
博士

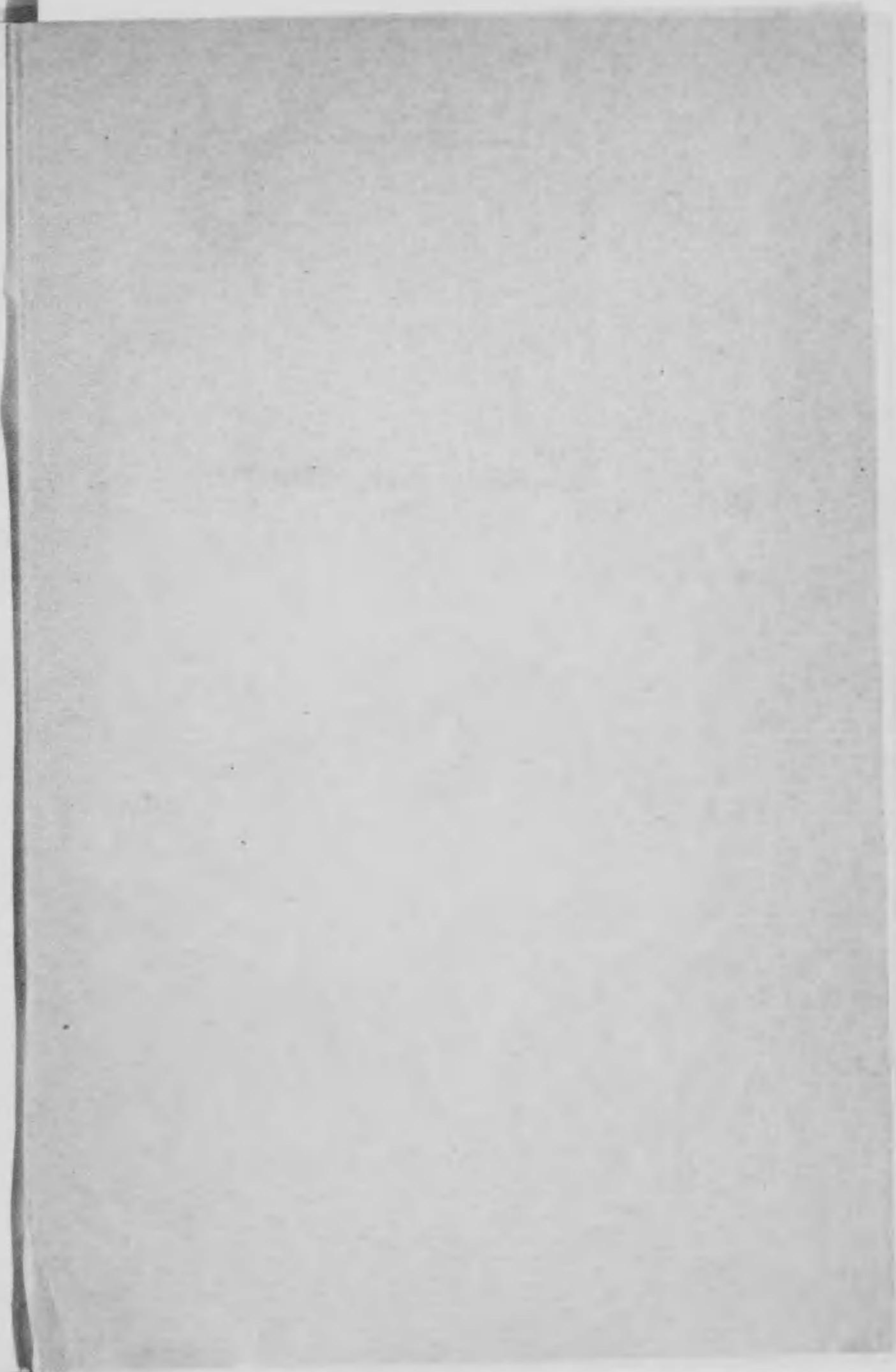
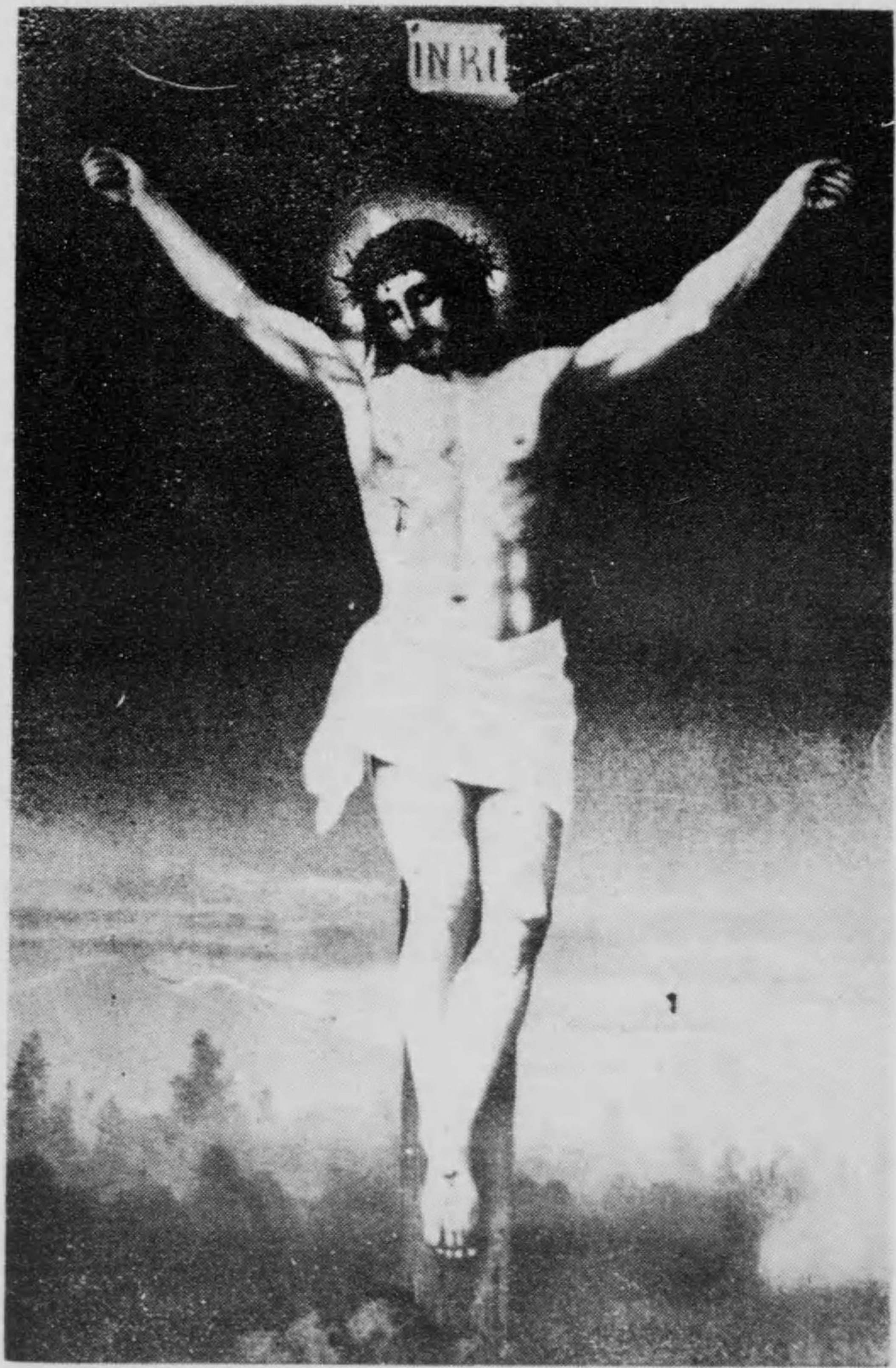
松村松年著

キリストの本體

東京明治圖書株式會社

大正  
14. 11. 7  
内交







533-116

キリストと  
イエスは本  
3. 巻には  
3.

### 自序

嘗て此の論文の一部を昨年小樽新聞に連載せしところ、その當時多くの讀者より單行本として刊行せよとの勧告を受け、また多くの迷信家より今日も猶ほ脅迫状を受けて居る。敢然爰に加筆し章節を設けて出版することにした。

基督が假作の人であり、小説的の人間であると言ふ事は、既に色々な書物で見居つたが、英人ゼー・ビー・ハンネーの『宗教に於ける性的表象』(J. B. Hannay; Sex Symbolism in Religion. 1922)と稱する尠大なる二巻を繙くに及んで、具體的に其の擬人なることが明かになつた。

本書は其の赤裸々の材料に立脚して、赤裸々に執筆した論文である。



猶ほ此の論文を上梓するに當り『歴史大系』の著者ウエルス、『基督教の罪惡史』の著者ゴラーム、其の他ニーチエ、ベツク、ジエムス、メチニコフ等諸先輩の論文に負ふ所が少くない。

敵なきの羅馬は亡んだが、現代の法律に羅馬法がある如く、羅馬人の嘗て創造せる基督教は、實に巧妙なるものであつた。吾人は此の假作の基督に欺さるゝこと茲に二千年。その言語の餘り人間らしくないので、嘗て眞實神の子と思ふた。その行動の餘り人間らしくないので、嘗て超人として之れを信仰した。その言語や行動の非凡なるが爲め、眞實神の子と思うた祖先も亦無理はなかつた。其の詐欺が餘り尠大なれば事實の區別が付かなくなる。巨大の魚は俎上に登らず、非凡の詐欺は其の眞偽が確然し難い。

されど基督教は、羅馬帝國の爲政者が、他國を征服し、侵略し、人類を無抵抗無争闘に平治せんが爲めに作られたる、敵本主義の宗教なることは、今や疑ふの餘地がない。星移り、時變りて、二千年前の假作の小説的傳記が、現代に猶ほ容れらるべきものでない。

余は此の點を明かに世に公表し、併せて其の言語や行動を科學的に批判して見る。

大正拾四年十月

於札幌 松村松年



# 目次

## 第一章 總論

- 一、基督の詐術二千年……………(一)
- 二、智識は欺かれず……………(六)
- 三、原始人の生殖器械……………(九)
- 四、恐怖心と宗教の製作……………(一四)
- 五、聖書は小説的歴史なり……………(一七)

## 第二章 本論

- 一、羅馬政府の太陽神輸入……………(二三)
- 二、基督とクリストナとの共通點……………(二五)

目次



三、基督教初期の魚の崇拜……………(三一)

四、埃及よりの平民的宗教……………(三五)

五、十字架は性的表象なり……………(三九)

六、神の子の残忍なる行爲……………(四四)

七、冬至と基督の復活……………(四八)

八、新約に含まれたる作爲……………(五二)

九、太陽神メルキゼデクと基督……………(五五)

一〇、酒神バツカスと基督……………(五八)

一一、醫神アスクラピオスと基督……………(六二)

一二、アレキサンドリアにて新約編纂……………(六六)

一三、太陽崇拜の性的祭祀……………(六九)

一四、太陽崇拜の性的表象……………(七二)

一五、人類愛の釋迦の教義……………(七六)

一六、釋迦及び孔子と基督……………(八一)

一七、バイブルに於ける想像的記述……………(八六)

一八、羅馬に於けるバイブル改造……………(九〇)

一九、バイブルは現代的改造を要す……………(九四)

二〇、侵略手段としての基督教……………(九八)

二一、無智の信仰は精神病なり……………(一〇四)

二二、富の獲得を忌める神の言葉……………(一〇八)

二三、正義の主張を忌める神の言葉……………(一一五)

二四、骨肉の觀念を忌める神の言葉……………(一二八)

二五、基督教徒は敵を愛せず……………(一三四)

二六、宗教信條には眞理の存在なし……………(一二九)

二七、眞の宗教は人を束縛せず……………(一三四)

二八、恐るべき宗教中毒者の迷誤……………(一三七)



二九、利慾に墮落せる崇拜心……………(一四)

三〇、崇拜は人格の陶冶なり……………(一四六)

三一、新宗教と永遠なる社會道德……………(一五二)

三二、無抵抗的基督教は破産せり……………(一五八)

三三、知識に立脚して迷誤を去れ……………(一六四)

三四、現代人の新しき宗教及び神……………(一七)

第三章 結 論

一、常に新しき神への同化……………(一八四)

二、偏狭なる基督教の愛……………(一八六)

三、將來の宗教と科學……………(一九〇)

四、基督教は既に腐敗せり……………(一九二)

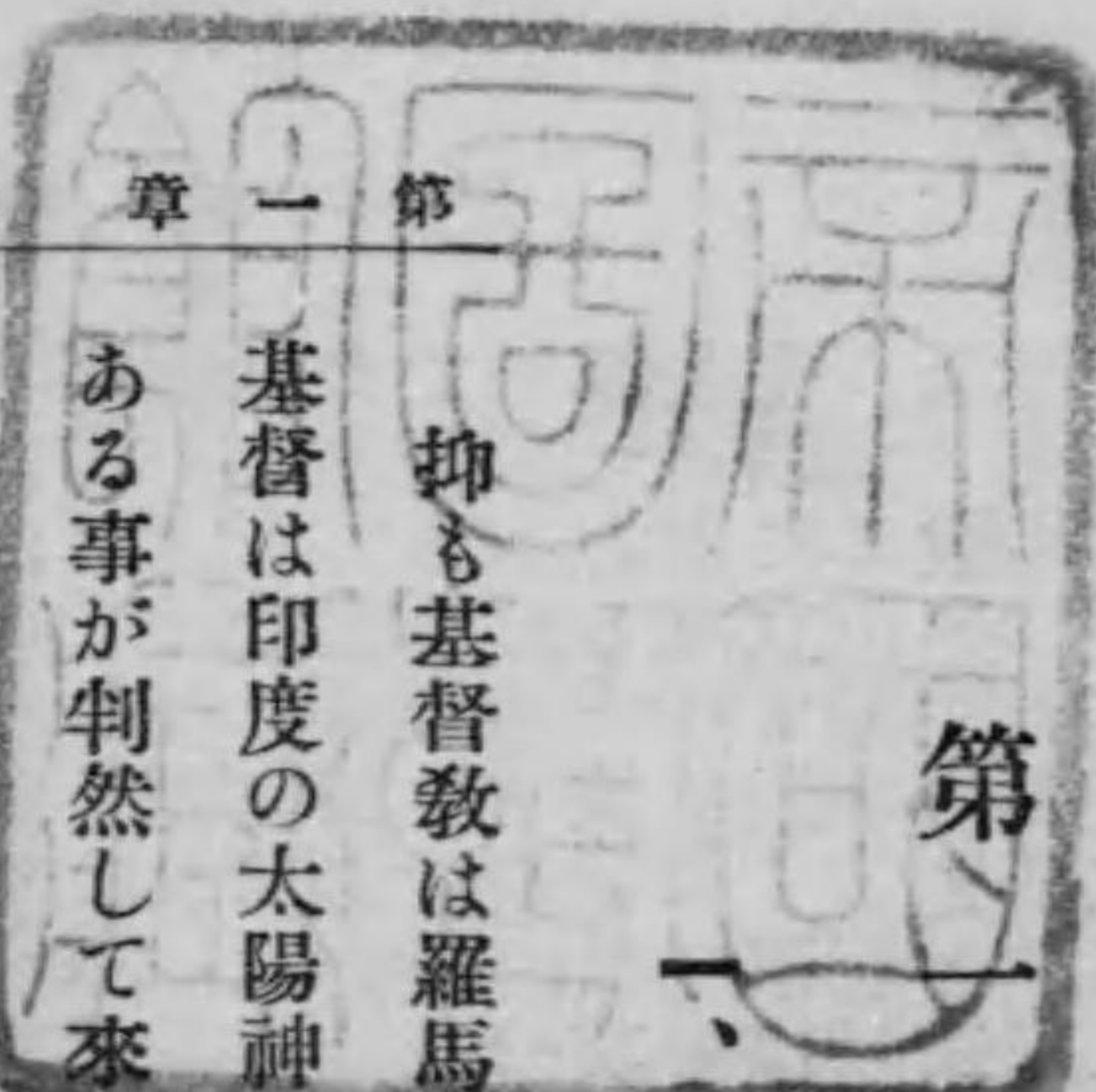
五、眞理に立脚せる努力へ……………(一九五)

基督の本體

— 基督は太陽神なり —

第一章 總 論

— 基督の詐術二千年 —



抑も基督教は羅馬帝國爲政者の何にか爲めにせんが爲めの製造物である。又基督は印度の太陽神クリストナや釋迦の傳記より製造せる小説的假作の人間である事が判然して來た。基督教の教義は、羅馬帝國爲政者が他國を奪ひ、またこれを無抵抗に統御する爲の方便教で、畢竟敵本主義の教義であつたのだ。故に歐米の強國は其の教義宣傳の美名の下に宣教師を東洋や南洋に送り、遂に今日の如く劣國を占領したのである。宣教師の有するバイブルは、鋼鐵の大砲よ



りも恐ろしき武器である。其の祈禱は、敵を攪亂するの恐るべき一種の催眠術である。宣教師は身に寸鐵も帯びないが、然かも最も精銳なる兵士である。昔時印度を征服した英國が東印度會社と其の商人によつて侵略を行つたのは寧ろ舊式だ。今日は算盤よりも先づバイブルの方が、侵略の武器としてより重寶である。故に支那を掠め、南洋を占領するに當つても、常に宣教師が先頭に立つて居る。身に寸鐵を帯びずして、最も祖國に大効を奏するものは則ち此の宣教師である。彼等は其の祖國にとりて正に金鷄勳章に價すべきものである。神を先頭に立て置く事は、惡魔の最も巧妙なる兵法である。彼等は神は愛すると云ふ。敵を愛せよと云ふ。デモクラシーを説き、博愛を叫ぶ。世界同胞主義を宣傳する。其の他相互扶助と云ひ、或は無抵抗主義と云ふ。これ等は何れもが基督教の主なる教條である。然り、それは他國を占領せんが爲めの方便であつた。見よ吾が同胞の加洲に贏ち得たる農士は、今や全部掠奪せられて仕舞つた。嘗て吾が十五萬の同胞を加洲より放逐せよと絶叫した最初の一人は、フレヌノ教

會の牧師モーリスでないか。これが『敵を愛せよ』を以てモットとせる牧師の宣傳であつたのだ。基督教では己れの仇を愛せよと云ふ。然れど基督すら一人のユダさへも愛し得なかつたではないか。羅馬法皇はガレリオやフスを火刑に處し、ルーテルを破門した。何處に敵を愛せし例があるか。蓋し、何れもが敵本主義の教義であつたからだ。

數年前朝鮮に暴動が起つた。之れを煽動したものは宣教師であつた。之れが爲め米國のミツシヨナリーが、二百萬弗の贖金をなして朝鮮に送つて居る。見よバイブルや祈禱にて追付かない場合に、彼等は幾多の美名の下に慈善病院を建て、民心を收攬する。青島で二人の婦人を犯したものは獨逸の宣教師であつた。之れが爲めに宣教師は支那人に殺された。之れが爲めに青島は獨逸に掠奪せられた。三百年前ゼスイトが日本に來り傳道しつゝあつた時、偶然にも其の一人によりて日本を占領せんが爲めの先驅者として宣教師が送られある事が秀吉に知れるや、彼は全部の宣教師を撲滅したと云はれて居る。若し其の當時日



本が弱國であれば、今や疑もなく西班牙の屬國となつて居つたかも知れない。或は安南や香港や比律賓が歐米の大國に掠奪せられ居る様に、日本も亦其の運命に奔弄せられて居つたかも知れない。幸に吾が民族は相當の兵備を有せしが爲め、何れの大國にも掠奪せられないで、今日獨立し居るものの、若し海に戰艦なく、陸に干城なきに於ては、或は比律賓や玖瑪等の如く遠き昔に歐米の何れかの屬國となつて居つたかも知れない。彼等は文明の爲めに占領するの必要がある云ふ。基督教を宣傳せんが爲めにも亦必要があると云ふ。從來吾が帝國は實に累卵の危き地位にあつた。然り今となつて思へば、彼等は其の時期の到來を待ちつゝあつたのだ。然かも今日迄彼等に其の機會を與へなかつた事は吾れ人共に我が祖先に感謝せざるを得ない。嘗て我が帝國は支那に勝ち、其の戰利品は獨露佛の三國干涉によつて剝奪せられた。之れは東洋の平和の爲めである云ふ。今又吾が同胞の血と涙で獲得したる農土を剝奪せられた。之れが抑も基督教を以て誇り得る米國人の、我が同胞に對する行動であつた。彼等は

資本主義的國家を携へて、米國と云ふ國民的色彩の極めて濃厚なる宣教師が、其の米臭紛々たる基督教を提げて、朝鮮や支那に於て何事をなして居るのか。彼等は後より來るべき自國の資本家の爲めに先づ道を拓くのである。其の民族的勢力扶殖の爲めに、バイブルと祈禱によつて砲彈や潜航艇以上の目ざましき惡魔的侵畧力を發揮しつゝある事實を見よ。是れ敵本主義でなくして何であらう。若しそれ羅馬政府の基督を造り、之れによつて基督教を案出せる動機的那邊にあるかを知得せんか、從來不可解とせられて居つたバイブルの記事も亦忽焉として氷解するのである。

著者は今日基督教を以て誇り居る米國人が、加洲の吾が同胞を排斥し、死地に落した事を見るに及んで、ハンネーの議論の益々決定的にして然かも其適切なるを知るのである。バイブルにあるの記事は、大部人間性を脱却し、其の死せる人情も道德も常識も何れもが地球上に見られない不思議のそれである。ハンネーはバイブルに人間らしき人間が一人も居らない、其の舞臺に登るの役者



は何れも幻妖的のものであると云ふてゐる。然り大なる欺作、假作の基督、即ちそれが印度の太陽神クリストナや、釋迦の傳記より製造せる小説的の基督であつたからだ。

## 二、智識は欺かれず

智識は征服であり、豫言であり、豫言は力であるの意味に於て、吾人は極力智識を普及し宣傳するの使命を有するものである。臭き物に蓋して事實を公表しない事は一種の罪惡である。建設は破壊に始まる。故に人は、破壊を恐れなくてはならない。恰も風雨あつて後初めて道固まるの古諺に漏れず、夫れが必要であり、又斯くする事によつて吾人は學術に忠實なるものと思ふ。吾人は如何なる思想も科學の爲に尊重して聞くべきものと思ふ。之れを實行すると否などは無論別問題である。議論には詐欺があつてはならない。又事實を犯罪的に隠蔽してはならない。事實は事實として千古變る事はない。科學は此の事實に立脚してゐる。

『見ずして信する者は幸なり』の本來の意味を知らないで若し信する者があるとするれば、夫れこそ科學を無視するものである。如何なる人格者が宗教家にあると云つても、如何なる偉人が信者であると云つても、何等の自覺なくしてそれに模倣雷同するが如きは、實に悲惨なる落伍者の行爲である。吾人のモットーは眼之れを觀、耳之れを聽き、手之れに觸るるにあらざれば信せずと云ふ夫れであらねばならぬ。之れなきが爲めに吾人は歴史にもなき基督を眞實世の中に生存せし者として二千年間欺され來つたのである。彼の千古の英雄ナポレオンは、當時の哲人ヘルダーに、基督は果して此の世に生存せしや否やを質問してゐるが、實に其の炯眼には驚かざるを得ない。英雄は英雄を觀、凡人には眞正の英雄がわからない。偉大なる人格者を假作するに於て、凡人には到底其の眞偽の程度が知れない。小説に於ても何處までが眞實であり、何處までが偽であるかの分別が付かない。即ちナポレオンにして始めて之れを看破し得たので



ある。彼の哲聖カントでもスピノーザでも基督の存在はあり得べきことであるが、然かも甚だ真しからずであると喝破した。其の他幾多の學者が現はれて、歴史的にこれを研究したが、未だ誰もが其の存在の事實の一片をも發見し得なかつたのである。彼の有名なる『歴史大系』の著者ウエルスもまたバイブルの他に何等歴史的に見るべきものがないと云つてゐる。或は『英國百科全書』と云ひ或は『チャンパーズ百科全書』と云ひ、其の著者の何れもがキリストの存在に就き疑問を述べてゐる。然り、疑ふべくなく基督は太陽神の作り換へであつたのだ。

文明は時間的にも空間的にも地球を狹隘ならしめた。今や東西の歴史が研究せられ、殊に古代の文明が深き土穴より掘り出され、埃及やバビロンやポンペイの古物が開掘せられて、學者の手に其の材料が蒐集されると共に、從來聖書の神秘と稱せられしものが明瞭になつて來た。其の神秘は全部生殖器であつた。アダム、エバの創造傳説はバビロンやスメリアにもある事が知れた。カインや

アベルの記事は埃及の神話にもある事が知れた。ノアは太陽神であり、其の方舟は女陰であることも説明された。エデンの園は人間それ自身の假設であり、其の中央にある智慧の樹は男根であり、蛇は情慾の表象であることも知れた。亦「O」の神は男女兩性を備ふる神で、エホバの神は即ち夫れである。Iは男根を表はし、Oは女陰を示す。十字形は男根であつて、其の表象の存在は既に基督教の起源より約千年前に遡つてゐる。ペテロは岩で罌丸を意味し、ポールは棒で男根を表象する。三位一體は則ち男性の生殖器である。平和の鳩と稱するものの起源は其形の如く女陰である。マグダラのマリアのマグダラは桃であつて、同じく女陰の表象である。

### 三、原始人の生殖器教

ヘブライ教の創造の歴史は、初めより智識の果物を食ふべく禁じた。即ち智識の獲得が初めより禁じられたのである。夫れが爲めに彼等は全部文明より取



り残された。彼等は無智であつた。智識なきものは決して智者を頌賛せぬ。馬鹿の時代には人は恥を知らぬ。之れが爲めに盛に生殖器教が行はれ、爲に公言を憚かるの醜態が演ぜられた。ヘブライ教に太陽教の潜入し來つたのは羅馬帝國の爲政者が之れを輸入せしめたのである。恰も西歐の人種が東洋人種を征服して、基督教を強いたのと同じである。

さて基督の存在を否定して居る學者は決して少なくない。然れどもハンネーの如く尨大なる材料を蒐集して、具體的に之れを否定したものは恐らくは他にあまりない。彼は一千九百十四年に『宗教の起原及び基督教』を發表して世人を驚愕せしめた。されど其の書物は非賣品として出版せられ、唯だ一部の學者にしか知られてゐなかつた。其の記する所によりて見れば、基督教は其の表象に於ては性的教であり、其の崇拜に於ては太陽教であり、其の教義に於ては佛教である。基督教は印度の太陽教よりクリストナの神を借り、希伯來教よりは宗式を繼承したものだと言明してゐる。彼の有名なる ジョルジ・バードウッド博

士はハンネーの著書に序文を掲げて曰く『余は印度旅行中多くの驚くべき事實を目撃し、之れを著者ハンネーに説明した。これ等の多くは到底公然と發表し得べきものでない。……余は著者よりも一層生殖器の不可思議なるに驚くものである。殊に蒙昧なる時代にありて、人類が思考する様になつた時の最初の印象は、定めし其の子供の生れ來る千古奇蹟的の現象であつたであらう。此の生殖器を神の權化、否な眞實神夫れ自身と思ふたのも無理はない』云々。また著者はその序文に『聖書は偶像教より出發せる靈的宗教の進化の歴史である。世界の大きな宗教は野蠻時代の魔術の温床に生れてゐる。而して原始時代の藥劑師の製造せるミイラが今も猶人類を支配してゐる』と。然り宗教の起原は常に野蠻時代の幼稚なる思想に立脚してゐる。日本にも道祖神と稱して男根を祭れる神社は全國に三百許りある。その思想は今も猶最も文明を以て誇る東西の人種を支配して居る。彼の大ハツクスレーの子供なるジュリアン・ハツクスレーもまた、父の事業を繼承せる有名なる生物學者であるが、彼は『幼稚



時代に於ける恐怖と性的の本能が常に文明人の生活に深く蟠り、假令夫れが新智識によりて蒸發せられ、薄らいでも、夫れは常に深く根柢に横はり、一種の潜勢力となりて吾人の思想を支配して居る。人が一度此の紛糾せる問題に會して得たる驚異や好奇心は、常に古き神話や戒律や、傳説や教義の何物かに操られてゐるのを見る』と云つてゐる。此の心理學上の事實が深く人類の思想に根蒂して、今日の宗教心を支配してゐるのであるから、吾人は餘程注意せなければ過られ易い。情慾は人間性の出發點であり、希望は宗教心のスタートである。吾人は生殖器が全生物の中心をなし居る事を忘れてはならぬ。

千九百十四年の昇天祭の時、當時のデーイン・インケが英國聖ポーロ伽藍に於て説教して曰く、『今日位信者の天國の事を考へなくなつた時代は恐らく他にあらまい。今日の社會を忠實に進歩せしめんと欲する人々は、天國の話を一種の作事と見、僧侶の彼等に與ふる慰安の手形は眞實存在せざる後の世の支拂であるから、彼等は其の手形の支拂ひを現金で要求してゐる。蓋し今や天空に於け

る我々の銀行は、支拂ひの停止をなしたのである。永遠の生命は未來になくして現代にある。粗野なる表象は全部文學的の作事に過ぎない』と大膽に言ひ放つてゐる。英國の僧侶は今やハックスレーの思想に共鳴して、宗教の思想を科學智識の上に立脚せしめんとして居る。夫れでこそ英國の太陽は永遠に没する事はあるまい。今や英國には大ハックスレーの思想が智識階級を風靡してゐる。其の思想は一言にして云へば、即ち智識の獲得である。今より約七十年前大僧正ウイルバー・フォースは盛にハックスレーを攻撃した。其の後十年を過ぎて大僧正コレンゾはハックスレーの思想を大に主張した。之れが爲め彼は當時の教會よりして大なる迫害を被つた。然れども英國の基督教徒は、之れによりて大なる自由を得たのである。其の當時ハックスレーは彼等によりて惡魔と呼ばれた。然るに今や彼は英國の大學者の一人であり、其の産出は英國の誇りとなつてゐる。

彼の銅像はダーウキンの夫れと共に大英國サスウス・ケンシントン博物館



館に光輝を放つてゐる。

#### 四、恐怖心と宗教の製作

ハンネーは『基督教』の序文に『宗教に於ける表象的作事は、總てフアラス（性的）に立脚してゐる。バイブルより此のフアラスの意義を除却する事は、恰もハムレットより丁抹の皇子を剷除すると同一である』と。また其の序文の終りに『此の研究は専ら其の有する表象の誤なき起原を説明せんが爲めに企圖せられたもので、若し之れによりてキリスト教の文明人が、死せる過去の宗教の神やドグマを捨て、親切の宗教を組織し、其の教育なき飢えたる裸なる人間の子供等に對して、總ての社會が犯せる大罪を剷除せんが爲め、多くの人が努力せんことを冀望する』と云つてゐる。然り今日の文明を以て誇る西歐の基督教々徒は、此の世界の大戦争に際して何をなしたか。獨逸人は白耳義や佛國人に如何なる残忍性を發揮したか。己れの教會の爲めなれば如何なる悪行も善行

である。神が恕すと見來つた傳統的の希伯來教や基督教の起原を、今日ハンネーの赤裸々な記述により知る事を得て、吾人は今や釋然として長き迷夢より醒め來つた感がする。

夫れ困難せるの人種には恐ろしい神の觀念がある。敵や猛獸に迫害せらるるの人種、瘦土や濕地に生活するの民族、マラリヤや其他風土病の多き地方に棲息するの野蠻人、これ等には恐怖の神や怨の神や呪の神がある。これに反して食物の多き地方の民族には善神があつて悪神がない。希臘の國は瘦土で常に強敵によりて惱まされて居つた。爲めに其の住民は恐怖や嫉妬の神の觀念を持つてゐる。然れども彼等はこれ等の神を以て一種詩的の創作物と意識して居つた。之れ蓋し希臘人の偉大なる所である。總て宗教の起原は恐怖の本能に立脚して居る。殊に希伯來人は犠牲を要する恨の神、呪の神、エホバを有して居つた。蓋しバレスタインは瘦土であつて、常に食物の缺乏を來し、到底大都會の現はるべき所でなかつた。バイブルにあるやうな記事は大部偽作であつて、ソロモ



ンが七百人の妻を有し、三百人の妾を蓄有して居つたとか、エルサレム包圍の時に百萬の人間が殺されたとか、何れもが笑ふべき誇大の作事である。希伯來人は不幸の民で、『手から口』と云ふやうな哀れな生活をなして居つた。エホバの如くに僧侶もまた人民に將來乳と蜜の滴る土地を彼等に出現せしめんことを約束した。神の怒りをなだめんが爲めに、彼等は最初の子供を神の前に犠牲に供せんことを慫慂した。否な男女の子供を殺す事をも教へた。蓋し此の地では十三萬の人口よりも支へる事が出来なかつたからである。

バレストインの地は僅か千二百平方哩しかない。エルサレムには僅か二萬の人口しか支へられない。今日猶太人が其の時のバレストインに歸り、一王國を建設せんとして居るが、其の土地が餘り狭く、瘦土であるから、無論ものにはなるまい。此の饑渴と殺戮の觀念が、恐怖の宗教を助長した。

其の當時の僧侶の職責は神前に犠牲の奉事をなす事許りであつた。而して神の望みは即ち僧侶の望みであつた。彼等は戦争の苦役より免除せられ、労働の

苦痛より免役せられた。彼等は常にうまき汁を吸ひ、うまき物を喰つた。彼等は多數の妻と妾を養つた。此の悪行は市民によりて黙認せられた。之れありても猶ほ彼等は初夜の權を利用して處女を姦し、婦人を辱しめたのである。蓋し『生めよ殖えよ』の性的宗教が累をなしたのだ。これが爲めに彼等は普通の平民よりも多く蕃殖した。不生産的の僧侶が増加した爲め、遂に猶太國は滅亡した。これ恰も蜜蜂の社會に労働せざる雄蜂の多く生ずる時に、其の巢の滅亡するのと同である。之れに反して羅馬人は救生の太陽神を持つて居つた。故に西歐の宗教は之れが爲めに大なる影響を蒙り、ヘブライ系統の神を記載するバイブルに拘束せられて非常なる不可解の宗教となつた。即ちこれは野蠻的（太陽神）靈的及性的の混合物であつた。これは歴史あつて以來未だ嘗て他に例のない宗教であつた。

### 五、聖書は小説的歴史なり



基督教が野蠻的の宗教に起原してゐる事は、既にザオルテア、ペーン、ハツクスレー、アレンス、ブラットラフス、ロバートソンス、インガーソール、ブラッチフォード等の唱道する所である。彼等は異口同音に、野蠻的の神を文明を以て誇り居る西歐の社會に黙容し來つた事は、大なる矛盾であると罵倒して居る。又其の靈的宗教の方面よりすれば夫れは文明の僧侶によりて大に進歩せられたもので、即ち彼等はバイブルにある健全なる思想のみを描出して、野蠻的の神の觀念や、苛責の觀念や、其の他地獄の悲惨なる觀念を剿絶し、人より人に平和と親切の真正の福音を説き聞かせるやうな思想に改造したのである。之なれば文明の宗教で、然かも大いに理想に近いのだ。之れなれば舊約にあるやうなヘブライ教の使命とは全く反對の地位に立つて居る。然しながら聖書にあるものは大部偽作に係り、實際吾人が依つて以て座右の銘となすべきものは甚だ少なく、然かも夫れが大部は釋迦の教へであるのだ。吾人に傳はり居る宗教式や儀式の奉事、然かも基督教や希伯來教の中心と稱して居るものは其の神の名

に於ても、表象に於ても、其の創造の談話に於ても、神の對話に於ても、奇蹟や、洪水や、方舟や、幕屋や、祝節や、踊や、禮拜や、割禮の記事に於ても、何れもが性的宗教の殘骸である。其の意味に於てバイブルを繙けば、從來神秘と稱せられ居つたものは、全部が明瞭に説明する事が出来る。神秘は宗教の食物であり、神秘なくして宗教は成立せぬ。

元來舊約はヘブライ人の小説的歴史と稱すべきもので、其の原書には明瞭に生殖器の名稱が用ひられてある。所が羅馬の爲政者の命令の下に、マソレッテスや、オリゲンや、ユージェビウスや、シンナークスや、ゼロームや、シオドシアンの如き少數の學者の手によりて、一種のバイブルを編纂せしめたのである。彼等に依つて更に知れ難い神秘的の表象に總てが置き換へられたのだ。これ等の編纂者は、稍々赤裸々に表はれて居る生殖器の名稱を黙々の裡に隠匿し去つた。長い間信者に見せず、そして、今も猶ほ信者に見せない宗旨があるが、若し彼等に其の聖書に記載せる赤裸々の記事が発見せられた場合、夫れこそ大變



で、必ずや恐るべき一種の震撼を彼等に與ふるは理の當然である。故にこれ等の事實は從來少數の者によりて知得せられ、秘密書として出版せられ、單に研究者の材料に供せられて居つた。然かも之れを公然發表する様になつたのは近々數十年の事である。而して之れ等を看破し發表した學者の内にはギボンや、ルナンや、スツラウスや、バウアー等が居る。其の當時學者は眞實敬虔なる信者を躓かせざらんが爲めに、餘程言論を慎しんだ。然れどラマークや、キユビエーや、ライエルや、ダーヴキンや、ハツクスレーや、其の他有名なる科學者が現はれ來り、バイブルにあるやうな記事を木葉微塵に破壊して見れば、何時迄もこれを隠蔽し置くの理由はなくなつた。何時迄も野蠻時代と同様に、之れを神聖なる經典として渴仰し行く事は文明人の恥辱であるのだ。果せる哉、今日ハンネーが、尨大なる著書を發表して其の先鞭を付けた。其の研究によりて基督教の起原は、太陽教と性的宗教の合成物なる事が知れた。

余は今や此の尨大なる記事を抄録するの時を持つてゐない。唯此處には基督教は印度の太陽神である事だけを記して見る。



## 第二章 本 論

### 一、羅馬政府の太陽神輸入

彼の羅馬が世界の大半を征服した時、古き神の勢力が恰も希臘の神と同様に世人に葬られ行くのを發見した。此の尨大なるしかも混沌たる帝國を安逸に支配せんが爲めに、爲政者は世界的宗教の建設を夢みつつあつた。此の時に當つて彼等は、唯だ猶太民族の聖書にのみ人間に對する神の使命の記事ある事を知り、之によりて世界共通の宗教を設定せんと企圖した。彼等は希伯來の聖書に國民の増大して行く理性の見解に於て、大に有利なる素質あるを發見したのである。希臘や羅馬の神は凡て人間形であつて、到底永遠の神の觀念を保有せしむる事が出来なかつた。これ等の神は眞の父を有せるが爲め、地上の王者と何

等異なる所なきを發見した。然るに希伯來の神ジヨブ及び其の一門は明瞭に永遠であり、始めなく終りなき、メルキセデツクの如き、父なき母なき由來なき神であつたのである。此の概念は印度のブラマ神の夫れと同様であつた。當時羅馬帝國の領有する地域は東は印度より西は英國に擴がり、之れ等の分離し易き流動的大領土を統御し得べき、最も有力なるセメントは、即ち過りもなく新しき宗教の現出であつた。爰に於てか舊約の聖書を以て經となし、一方人類の救世主なる太陽神を以て緯となし、基督教の骨子を建設したのである。

元來イエス(Christ)の名はドルイド教派の太陽神の名であつて、即ちヘツスス(Hesus)である。又クリスト若くはクリストスの名は希臘語のクリストナ(Christos)即ち印度の佛陀に由來してゐる。此のヘツスス、クリストナの生涯は總ての點に於て、印度の太陽神クリストナの寫出であつたのだ。舊約聖書が神の默示によりて編纂せられたと云ひ居る希伯來教徒の神、夫れが又羅馬人の神ジヨブと同一の名を有する所より、其の名が利用せられたのであつて、之れによつ



て西方亞細亞と歐羅巴の異人種とを宗教的に結合せしめ、又一方羅馬人の崇拜せる太陽神の救世主を連結せしめて、東方亞細亞の宗教と西歐の宗教とを融合せしめたのである。これ等宗教の建設は必ずや征服者が常に夢みつつあつたに違ひない。

クリシュナの傳説は基督紀元に先だつ事八百年で、太陽神の救世主として地球上の傳説に現はれ來つた事は、キリスト紀元數千年に遡り、其の名が假令如何に變化しても其の實質に於ては、何等異なる所がない。其の傳説の要點は、毎年太陽が冬に死し春に復活する事である。即ち十二月二十二日に太陽は最南端（北半球よりの傳説）に行きて死し、十二月二十五日に復活生誕し、一、二月の暴風雪に出逢ひ、彼岸三月二十二日に至りて赤道を横切り、後、北半球の中空に高く昇り來つた時が即ち夏である。其の昇天は人類の救ひであつて、其の時地球はバラダイスであり、樂園であるのだ。彼クリストナの肉體的傳説は總て太陽の一年間の歴史を繰返したものである。ハンネーは多年キリストの本體

は抑も如何なるものなるやを深く研究しつつある間に、基督に類似せる歴史を有する二十六神のあるを發見した。而して彼等の何れもが太陽神の夫れである事が知れた。此の内其の傳説に於ても其の教義に於てもキリストの夫れと全く同一なるものが發見せられた。即ち夫れは印度のクリストナ佛陀である。

### 二、基督とクリストナとの共通点

ハンネーは其の著書に於て太陽神クリストナと基督の傳説的歴史に於て共通なる七十五箇所を擧げて居る。即ち左の通りである。

- (1) 兩者共に神に選ばれた無垢の處女に生れた事。
- (2) 真正の父は神の靈なること。
- (3) 第二の父即ち地上の父を有せる事。
- (4) 地上の父は王族の系統なる事。
- (5) 其の系統の何れもが様々にして矛盾の多きこと。



- (6) 人體を有せる神なる事。
- (7) 天使等の處女に敬意を表せる事。
- (8) 誕生の星によりて表示せられた事。
- (9) 處女の名の同一なる事。(マリーヤとマリヤ)
- (10) 不思議の父を有せる事。
- (11) 誕生は空中に於ける喜ばしき音によりて告示せられた事。
- (12) 貧困にして洞穴や、旅籠や、田舎に生れて居る事。
- (13) 洞穴若くは馬小屋の光を以て満たせし事。(太陽の誕生)
- (14) 天使等の夜なく歌へる事。
- (15) 生るるや直ちに母に話せる事。
- (16) 牛飼ひや羊飼ひと讚美せられた事。(牧夫は殊に太陽の光によりて恩恵を受く)
- (17) 東方の博士等の星によりて誘導せられた事。
- (18) 地上の父の大工なる事。(造物者、創造者)

- (19) 博士等に依りて貴重なる土産や高價なる寶石が送られた事。
- (20) 生れは貧なれども王者の系統なりし事。
- (21) 父は貢を拂はんが爲め家に居らざりし事。
- (22) 馬小屋に生れた事。
- (23) 母は旅に於て旅籠にありし事。
- (24) 先驅者のありし事。
- (25) 爲政者は先驅者の生命を求めし事。
- (26) マチュラ若しくはマツラに逗留せる事(此市は印度にあれども埃及になし)
- (27) 子供の時より學者なりし事。
- (28) 子供等の仲間において王として選ばれし事。
- (29) 父の老年の子供なりし事。
- (30) 父は爲政者の子供を殺すべく索ね居るを夢によりて警戒せられた事。
- (31) 王はクリストナにてはカンザであり、基督にてはヘロデなりし事。



- (32) 父と母は遁避せる事。
- (33) 子供等の殺戮に赤子の殺戮をも含める事。
- (34) 王は先驅者を殺せし事。
- (35) 赤子の生命の助かりし事。
- (36) 魚の池を造れる事。(此の事實はクリストナにない。之れは後に説明する)
- (37) 此の魚の池を破壊した子供は直に死んだ事。(此の事實も同前)
- (38) 奇蹟の始めは癩病者を癒せし事。
- (39) 宗教的の生涯に入る前斷食せし事。
- (40) 悪魔の誘惑にかゝり、世界の王國を捧げられし事。
- (41) 悪魔よ退けと叱咤せし事。
- (42) 貧しき女に膏油を塗られた事。
- (43) 使徒若くは弟子の十二人ありし事。(十二ヶ月)
- (44) 二人の漁夫シモンとアンデレを選びし事。(此の事實もクリストナになし、

後に説明する)

- (45) 尙二人の他の漁夫ヤコブとヨハネを弟子に選びし事。(同前)
- (46) 二個の船若くは漁船の事。(同前)
- (47) シモン、ヨセフ、ヨハネの三人の漁夫を選びし事。(同前)
- (48) 魚の奇蹟を行ひし事。(同前)
- (49) 漁夫の使徒なりしこと。(同前)
- (50) 五切れのパンと二匹の魚を以て女と子供の外五千の人々に食物を分配せる事。
- (同前)
- (51) 魚の口より得たる錢にて貢を拂つた事。(同前)
- (52) 七切れのパンと少數の小魚にて四千の人々に食物を分配せる事。(同前)
- (53) 蛇の頭を打ち碎きし事。
- (54) 弟子の前で變貌せし事。(太陽)
- (55) 人間の中で最も柔和な弱きものなる事。(釋迦)



- (56) 始めであり終りである事。
- (57) 手を伸ばして十字架に付けられ、手と足と腹に傷痕のありし事。
- (58) 十字架に付けられた時、太陽が暗黒となつた事。(太陽の死)
- (59) 槍に貫かれた事。
- (60) 地獄に下つた事。(冬の死)
- (61) 死より復活せる事。(處女宮に現はる)
- (62) 昇天せる事。(太陽の昇天)
- (63) 多くの人が昇天するを觀た事。(太陽)
- (64) 白馬の戦士として、再び來るであらう、太陽と月は暗くなり、星は天より落ちんと云つた事。
- (65) 終りの日の審判者である事。
- (66) 最も愛せられた弟子はアルジュナとヨハネ(同名)なりし事。
- (67) 總ての創造者なる事。(太陽)

- (68) 輝く光を變貌し雲を輝かした事。(太陽)
- (69) 三位一體の第二格者。(即ちクリストナにてはブラマにピシユヌ、基督にてはエホバと聖靈)
- (70) 復活後煮魚を食つた事。(クリストナになし、後で説明する)
- (71) 復活後魚獲の奇蹟を行つた事。(同前)
- (72) 世の光なりと云つた事。(太陽)
- (73) 眞の葡萄の木である事。(葡萄は太陽に依りて生長す)
- (74) 死を豫言せる事。(太陽の南端に行く事)
- (75) 水の上を歩ける事。(太陽の光)

### 三、基督教初期の魚の崇拜

以上の事實は別に説明する事もなく、能く人に知れ渡つてゐる傳説の事實である。此の内六十二個の事實は兩者共通である。之れは明瞭に基督がクリスト



ナの寫出たる證據である。然るにクリストナの現出は既に基督の紀元を遡る事八百年前であるから、無論基督の傳説が寫生であるに違ひない。尙魚の事に關しては爰に十三の事實を列記した。即ち彼の傳道の始めと終りに於て、最も重要な部に魚の記事がある。若し此の魚の記事をキリストの歴史より剔除すれば、他に何等基督固有のものを發見し得ないのである。要するに羅馬人が此の傳説を編纂した當時、春分に於ける太陽の地位は白羊宮を出て雙魚宮に入つたものと見られるのである。

古來太陽は一年の間に所謂獸帶の十二宮（即ち白羊宮、金牛宮、雙女宮、巨蟹宮、獅子宮、處女宮、天秤宮、天蠍宮、人馬宮、磨羯宮、寶瓶宮、雙魚宮）を運行するものと信ぜられ、其當時太陽を新郎に比して居つた。即ち一陽來復すれば總て動物の生殖時期が始まる。此時に太陽は其の十二宮の何れかに居つて、地球と結婚するものと想像せられた。然し乍ら、太陽の居座は年々徐々として變化するもので、二千年間の進行の内には最早同居座に居ないのである。

而して古代此の意味に於ての太陽教が生れた當時、太陽の新郎は雙女宮に居つたのである。故に彼の羅馬にはロミュルスとレムス、埃及にはチフォンとオシリス、希臘にはカストルとポルクス、波斯にはアフ・マツダとアリオン、希伯來にはカインとアベル等の神話がある。これ等雙兒の何れか殺され、其の残つたものが常に市の建設者となつてゐる。金牛の時代の古物としては有名な人頭有翼のバピロンや、ニネベの牡牛が英國の博物館にある。埃及には牝牛のテベスがある。波斯の日の神ミスラは牡牛に乗つて居る。埃及のオシス神は牡牛の角を有せるが如き、印度に於けるナンドの牡牛の如き、希伯來に於ける牡牛祭の如き、何れもが太陽の金牛宮に居つた時代の生殖教の一端を表出したものである。彼の柔和なる白羊宮に太陽が宿つた場合には、神の小羊として羊が神聖視せられた。然り多くの國民は之れを崇拜したのである。

又基督假作の當時、太陽は白羊宮より出でて雙魚宮に入つた。故に其の當時魚が盛に崇拜せられて居る。魚の奇蹟や、魚の記事のあるのは即ち之れが爲め



である。魚の記事が印度の太陽神クリストナに異なるもので、之れは其の時代の思想に順應せしめたものらしい。基督は紀元後約四百年間は魚と呼ばれた。然れど魚の崇拜は長く續かず、次第に消失して仕舞つた。昔時の基督教信者の墓石に魚形を彫刻せるものが少くない。之れは疑もなく救世主の表象であつたのだ。又印度のリンガヨニー（兩性神）の頂端に魚形の彫刻が少くない。之れは恰も墓石や石碑に於ける十字架と同様のものである。以上基督の傳説に關する記事の十中八九迄は、亞細亞に散在せる太陽神の記事より寫生せられたもので、希伯來の傳説に關するものは先づないと云つてよい。基督の子供時代の話は、無論或る目的の爲めに僧侶の作つたものである。其の聖靈の問題の如きは何れもが小説的の記事たるに過ぎない。

希臘人は太陽教の崇拜者であつた。而して新約聖書は希臘で編纂せられたのである。故に著者は無論進歩せる希臘太陽教の教義を書入れたに違ひない。殊にヨハネ傳の始めにある『大初に言あり』云々の記事は、プラトニーより出でた

もので、之れは太陽教を精神的に云ひ表はしたものである。

然れども其の實質に於ての教義は第一印度の釋迦と支那の孔子の夫れに立脚して居る。何と云つても新約の大部分は亞細亞殊に印度に發源してゐる。新約聖書に記載しある第二の材料は少ないが、夫れは埃及より出てゐる。彼のマリアとイエスの概念は埃及のイシスと其の子供にもある。然りマリアとイエスの肖像の初めて西歐に入り來つたものは、埃及のイシスとホルスの夫れと同一である。第三の材料は北方の亞細亞より出てゐる。何となれば、冬至祭は埃及にない。此處では吾人の冬期と稱するものがない。此の冬期祭は峻烈なる冬期を有する國民に最も關係を有するものであるが故に、南洋や、東洋の熱帶地には此の概念を有するものがない。之れは疑ひもなく、温帶の亞細亞に流行したものに違ひない。

#### 四、埃及よりの平民的宗教



埃及トレミーの時代に於て、諸國に散在せる宗教的の書物がアレキサンデリアに蒐集され、彼等はこれ等の宗教書を翻譯寫生したため、其の材料を以て新しき聖書を編纂することは比較的容易の事であつた。殊に彼のマリアの名の如きは印度の處女マールヤより寫生したものに違ひない。斯の如くして埃及と印度に於ける當時の二大民族が宗教的に融和したのである。然れど新約の記事は希伯來の聖書に基礎を置いてゐる。蓋し傳統的の種なき宗教は成立するものではない。其の文書は甚だ古くして何か曖昧なる天啓を含み居るものであらねばならぬ。今日新たに製造したものでは到底宗教は成立せぬ。故にマホメットやヨセフ・スミスが新しきバイブルを創るに於ても、古き希伯來聖書为天啓や、戒律に根源を据えてゐる。而して其の著者は、既に知れ渡つて居る神の特別の使命を有するものであらねばならぬ。

希伯來の神は豫言者と長談したり、共に夕涼みの花園を散歩したり、エホバの神は『我はイスラエルを導きて上りし日より、今日に至る迄、家に憩ひし事

なく、恒に幕屋より幕屋に移り、天幕より天幕に遷れり云々』と訴へる様な言葉をも發してゐる。之れが希伯來人の天上神を地上に降らし來つた宗教であるから、寔に親しみがあつた。即ち餘程平民的思想があつたのだ。新約の著者はヤコブとヨセフによりて連結して居るが、此の兩者の名は即ち聖書百科全書によると神の名で、兩者とも生殖器の表象であると云ふてゐる。新約の著者は斯の如く天の兩者を地上に降した。神の子イエスすらも大工の子として生れさせてゐる。然り大工は造物者で、又創造者を意味するのである。古き希臘のオリンピック神の時代は過ぎ去つて、當時の人心は人間らしき神を要求し、彼に妻を持たせ、子供を持たせんと云ふ思想を有して居つた。即ち希伯來の神は夫れである。神の子イエスと其の地上の妻マリアは即ち夫れであつた。恐らくは宗教に人間らしくして、然かも永遠の生命を持ち居る神を出現せしめたものは他にあるまい。此の思想の下に基督教が建設せられたのである。此の思想に立脚する新しき宗教家が今やアレキサンデリアに圓熟しつつあつたのだ。



吾人は恰も此の時代に當り他に種々の宗教が雑多な色彩を採つて成長しつつあつた事を忘れてはならない。これ等の宗教の多くは人類の爲めに犠牲に供せらるる神の子を信じ、教義としては釋迦の優しき金言を服膺して居つたのである。茲に於てか羅馬の國教として基督教が出来上り、羅馬の指導者によりて先づ之れが西歐に傳播せられたのである。しかも之れが徐々に成長し、色々に改造せられた。吾人は聖書の歴史を見るに、色々の會議に於て其の教義や宗式が取捨された事を見るのである。今日吾人が見る聖書は、紀元六百九十年頃迄はなかつたのである。然れば猶太人は之れに大反對をなし、古き恐怖の神を蔑らし、神の子を貧しき乞食的の地位に衝き落した。新しき宗教を罵倒したのである。蓋し彼等のメシアは猶太國を獨立せしむる神の子であつたのである。

此の新しき宗教は亞細亞には大なる勢力を以て傳播した。其の理由の第一は古き太陽の死して新しき太陽の誕生する事、即ち太陽は新年に死して後復活する古き太陽教の概念に立脚したものであつたからである。第二は、無敵の太陽

は冬と云ふ惡魔に打ち勝ち、赤道を過ぎ越して昇天し、夏の樂園即ちバラダイスを現出するからであつた。而して當時の基督教の教義は、太陽の死の觀念を剿除し、其の誕生、即ち復活に重きを置かしたのである。事實彼等は太陽の年々に生れ、年々に死する代りに、常に救世主なる個人の誕生と變造した。神の子を地上に現はし、其の死と復活は萬人の救ひであり、而して其昇天は彼等も天國のバラダイスに導くべき組立てなのだ。彼等は聖書に、赤子の不思議にも死より免れた事を記して居る。蓋し之れには太陽が誕生しても未だ一、二月の恐しき暴風雪と奮闘せねばならない意味を含ませたのである。基督教の信者の内で今も猶ほキリストが眞實死より蘇生し、昇天し、吾々の祖先が蛇によりて欺され、遂に墮落した其の罪を救ひくれたとして大いに喜んで居るものもある。

##### 五、十字架は性的表象なり

十字架の表象は古代より使用せられたもので、畢竟性的の表象に過ぎない。



昔時一度は性的教より太陽を離縁せる一大宗教が企圖せられたのだが、夫れは全然徒勞に歸した。蓋し人類に性的の觀念なくして宗教の成立する理由はないのである。故に多くの時代が滑り行く内に、遂に性的教と太陽教との二大宗教が融和した。即ち性的教の十字架に太陽の子供なる救世主を釘付けしたのである。之れが今日の基督教の十字架を表象するやうになつた由來で、しかも夫れが性的教に胚胎して居る。彼のキングが其の神學に於て云つて居るやうに、宗教には古來何も新しいものはない。而して此の十字架は即ち古代の偶像教の表象たるに過ぎない。故に此の偶像教の表象を喜んで用ふるの愚を罵倒したものは、フェリツクスの如く決して少くなかつた。然れど基督教は七世紀まで十字架の表象を用ひなかつた。其後遂に人を十字架に付けた表象が現はれて來た。之れに就て色々の議論があつたが、多くの婦人等が好んで此の表象を用ふる事になつたので、終にコンスタンチノーブルの會議も其の儘に放任する事になつた。

元來猶太人は當時の奴隸生活より脱するが爲めに舊約に約束しある様なエホバの子供メシアを渴望しつゝあつた。即ちメシアなる救世主が現はれて、世界の王國では獅子と羊とが平和に生活して行けるものと思つた。所が新約にあるメシアは十字架に釘付けられて殺されたのであるから、こんな教を拒絶するの亦無理はない。新約のマカ傳第十章に『或は家、或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑を拾へるものは、誰れにでも今の時の百倍を受けぬはなし。即ち家、兄弟、姉妹、母、子、田畑を迫害と共に受け、また後の世にては永遠の生命を受けぬはなし』云々と。此の言あるに依りて基督は羅馬人の爲めに捕はれたのである。無論之れは筆上の作事である。假令こんな考へがあつても、夫れは他人に語るべき性質のものではない。之れは基督を十字架に付けんとする著者の前提であつたやうだ。然るに基督は精神的に羅馬の神となつたのであるから、希伯來人の彼を排斥するのも亦無理はない。

吾人の爰に注意を要することは、基督の最初の奇蹟即ち水を變じて葡萄酒と



なした事である。之れはバイブル上の一大變化であつて、女性が男性となつた時代である。水は女性であつて葡萄酒は男性である。水を變じて葡萄酒となす事は、舊約に於てのルツをベテルとなし、ヤコブをイスラエルとなし、新約にてはソールをポールになすが如き、表象的の意味が含まれて居る。即ち之れは小民族の所有する<sup>○</sup>ヨニ的馬蹄教や、天女崇拜教より乳離れするが爲めの表象的作事である。太陽教も基督教も其の本質に於て男性教である。所謂左手教を變じて右手教となしたのである。太陽は葡萄造りて、總ての太陽神は葡萄神である。基督は自ら吾れは眞の葡萄の樹なりと云つて居る。酒の神バツカスも亦太陽神である。故に基督はバツカス神の改造であるのだ。

死と復活の思想になると、希臘にはプロセフィン女神(死の破壊神)の神話がある。之れも亦基督の死と復活とに能く似てゐる。プロセフィンの復活は春分で、此の時が希臘や波斯の新年である。否な昔時は英國の新年も三月二十二日であつた。當時波斯の勢力は希臘及び羅馬の勢力を凌駕して居つた。故に太陽

の復活を春分となし、同時に此の時を基督の復活祭即ちクリスマスとなした。春分祭は何れの國にても行はれ且つ總て性的である。蓋し此の時は動植物の生殖の時期であるのだ。我が國でも寒さの端も彼岸迄と云うて大いに喜び祝するの風習がある。西歐ではメーポールを立てて、盛に浮かれ廻るの習慣がある。天文學上の太陽の復活は十二月二十二日であるが、希臘若しくは波斯の勢力が終に自然の復活即ち春分祭を屬國にも採用せしむるやうになつた。實際希伯來人は基督の誕生を九月の秋分にして居つたのを、異教徒の採用し來つた冬至祭の日に夫れを變更したのだと云はれてゐる。故に其のクリスマスも亦太陽教と同時に進行するやうになつた。此の事は蓋し基督教徒のエキスキュスであつて、其の理由は基督教の信徒を多く得んが爲めの方便であつたのだ。希伯來人の九月の秋分を以て新年となすが如きは、實に笑ふべきことで、彼等の天文學に無識なるを表示するものである。



六、神の子の残忍なる行爲

テルチユリアンは基督教國の人間が總て異教徒の祭を採用して居ると罵倒してゐる。羅馬人は、天文學の知識に富み、太陽は、十二月二十日に死し、同二十日に復活するの觀念を有して居つた。其の赤道を横切り、三月二十二日に至りて地球と結婚するものと想像した。然し乍ら羅馬人は太陽神ジュピターに對して毎年の死と復活の觀念を抱く事は、畢竟大神の威嚴を傷ふものと思はれた爲め、神の子供を製造し、其子供が年々十二月二十二日に生れ、三月二十二日に赤道を越えて地球の處女と結婚し、昇天して夏日のバラダイスを現出する。彼は之れが爲め人類に對して救世主である。之れが抑も神の子を此の世に降し給へる假作の出發點であり、又之れが世人の嘲笑を招くに至つたスタートでもある。

此の觀念は何れの國にもあつた。彼のアレキサンデル大王はジウスの神の子

であり、長シビオはジュピター神の子であつた。羅馬の建國者ロミュルスとレムスはアポロ神の種を宿せる處女イリヤの奇蹟的雙兒であつた。アグルスとワルカンは女神ジュノより生れ、埃及王ベーンキーはラー神の種を宿せる母より生れてゐる。アスキュラピオスはアポロ神の子であり、病者を治し、ヒツポリツスを死より甦らして居る。埃及の太陽神オシリスは人類の幸福の爲め地球上に現はれ、惡魔の爲めに殺され、葬られて後復活して萬人死後の審判者となつた。其の他或はヘルキユレスの如き、ベルセウスの如き、マキユリーの如き、アポロの如き、これ等は地方の少女に宿れるジュピターの愛の結晶物である。北方亞細亞に於けるこれ等諸神の人間の處女に戯れ來つた古代の神話に、基督の誕生が胚胎して居る事を知るに及んで、吾人は慄然として膚に粟を生ずるの感なきを得ない。

然れど其の觀念だけは自然的であつて、しかも美しき所がある。彼の希伯來人の持つて居つた恨の神、呪の神とは雲泥の差がある。己れの犯せる罪の結果



は死であり、地極の苦痛である。故に其の死を免れ、其の地極の苦痛を脱せんが爲めに生前に犠牲を供しなければならぬと云ふ教義が、今も猶此の世に残り居るものとすれば、夫こそ社會に大毒を流すものである。殊に其の犠牲がアブラハムの子イサクの如き最も無垢なものでなければならぬのであるから、恐ろしき教義である。其の宗教の教義が如何に美しき衣服に蔽はれて居つても、如何に優しき音楽や、詩歌や、繪畫や、其他總ゆる美術の培養基に表現せられて居つても、其の裏面には有毒なる專制的の教義が蟠まつて居るのである。故にルナンは、基督教の勝利は蓋し千年間の文明の破壊であつたと云つて居る。之れが爲めにギボンは暗黒時代の出現を憂ひて曰く『蓋し野蠻の思想と宗教の勝利が累をなしてゐるのである』と。然り一時此の教義は人心の上に大勢を振ふた。之れが爲めに祭司には大權が與へられて居つた。ペーリング・ゴルドは『宗教信仰の發達』に於て、恐るべき犠牲の歴史を記してゐる。ルシアンは親が子供を高さ岩より投げた悲惨の犠牲的記事を擧げて居る。母は其の子供を袋

に入れて曳き廻し、或は恐ろしき怒聲を擧げて打擲し、高さ塔や懸崖より投げ殺して居る記事もある。試みに觀よ、茲に一人の父があり、其の子供等は何れも悪行に浸つて居る。唯だ其の一人が善良で無辜である。而して他の惡き子供を救はんが爲めに、唯だ一人の善良なる子供を何が故に神に捧げざるを得ないのか。抑も神はこれ等の犠牲を喜んで受けるであらうか。然り、アブラハムはイサクを犠牲に供した。神は神聖なる無辜のものでなければ受け給はないのである。

斯くの如き事實が今も猶最高の文明を誇る英國にもある。千九百十七年十二月、倫敦のデリー・エツキスプレス新聞に掲載せられた記事に左の如きものがある。即ち或る一人の婦人がクリスチャン・サイエンスの集合に行つた後、十六歳になる己れの息子の咽喉を剃刀で切り殺した。其裁判の審問に對して彼女は、聯盟國の勝利を得んが爲めに神に對して犠牲に供したのであると告白した。彼女は其の子供を殺すや直に叔父ベンジャミン・ヘイを招き、彼に己れの子供



を犠牲に供したるを至當と思はないかと訊ねてゐる。探偵カークは、彼がヘイの家に行つた時、彼女は剃刀を以て己れの罪の購ひに對して子供の咽喉を切つたと云つて居つた。醫師のシャープは彼女は不眠症に罹つて居つたと云つてゐる。而して彼に告げるには、クリスチャン・サイエンス教の集合に行く所であつた。若し子供を殺せば聯盟國の勝利の爲めに効果あらうと思ふと。又其の後彼女は神に對する愛の犠牲であると云つた。——以上は其記事の概要である。

### 七、冬至と基督の復活

此の悲惨なる愚者と子供は傳說的殘忍なる宗教の神、恨の神、呪ひの神の犠牲となつた。之れが見ずして信ずる者の最後の到着點である。愚者の迷信位恐ろしいものはない。然り此の傳說的の希伯來教に今日基督教が立脚して居る。此の迷信は宗教の糧食であり、而して其の信仰は全く迷信である。聖クリストムスは記して曰く、『紀元四百年頃迄は、基督の生誕の日は祖師らにも知れてゐ

なかつた。其の後異教徒の冬至祭即ち十二月二十五日を其生誕の日と定めた』と。此の日は無敵なる波斯の太陽神ミストラの生誕日である。故に嘗て基督はミストラと呼ばれ、正義の太陽神であつた。彼は又新郎と呼ばれた。蓋し春分には地球の處女と結婚すべき太陽であつたのだ。斯くの如く新約のバイブルは當時羅馬帝國の有する太陽の共通點を按配して製作したものである。即ち茲に神の獨り子が現はれ、其の死は蛇によりて詐された罪の購をなし、萬人を救はんが爲め昇天したのである。此の企圖は假令希臘に深き天文学の智識なしと雖も、良く理解し得られるものである。彼等は天體の太陽や星に、親しき人間らしき神の屬性を與へ、彼等の喧嘩や戦争にも加擔せしめた。彼の聖書を編纂したるアレキサン德里ヤの希臘人は、波斯及び自國のプロセピン女神の思想に従ひ、自然の復活期と同様に、基督の復活祭を春分となしたるや疑を容れない。『聖書百科辭書』は『使徒行傳を編纂せる著者は希臘生れのものである』と云つてゐる。



昔時太陽は十二月二十二日に於て晝夜平分線を距る最南端に達し、此處に留まること三日間の後、即ち十二月二十五日に再び北に向つて運行する事を認められた。此の三日間、太陽は恰も死して墓穴にあるやうに思はれた。二十五日に至り再び復活生誕して、其の太陽の居座は十二宮中のビルゴ即ち處女宮である爲め、之れが處女マリヤを擬した起源である。即ち金曜日午後四時より日曜日午前三時迄なれば三十三時間になる。何れにしても基督は一週間の最初の日、即ち日曜日に蘇つて居る。蓋し基督は太陽神であつたからだ。『ヨハネ傳』第二十章第一節に『一週のはじめの日、朝まだ暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取り除けるを見る』云々。即ち未だ暗かつたのだ。『マタイ傳』二十八章一節に『さて安息日はりて一週の初めの日のはの明るき頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて來りしに』云々。又『マカ傳』第十六章二節に『一週の首めの日、日の出でたる頃、いと早く墓にゆく』云々。又『ルカ傳』第二十四章一節『一週の初めの日、朝まだき、女たち備へたる香料を携へて墓に行く』云々。何れもが『一週の初めの日、朝早く』に大なる意味が含ませてあるやうである。

これ等の記事によりて吾人の知る事は、左の四點である。即ち(一)基督の墓穴にあつた事は、太陽の墓穴にあつた時と同様に約三十三時間である。(二)キユリオス(Kurios)の子、太陽神は日曜日に生誕したのである。(三)首の日に餘程意味が與へられてある。(四)福音書の全部に同様繰返されてある。表象的の意味がなければ、斯くの如く符節を合するが如き記事は先づないと云つてもよい。而して太陽神であるが爲め、最初の奇蹟は水を變じて葡萄酒になした。之れも亦表象的である。舊約と新約とは無数の矛盾があるに拘はらず、表象的の記事には決して矛盾はない。恰も教會に關する繪畫の、如何に其の事状と周圍が異なるも、其の表象的の裝飾物に至つては常に矛盾なきと同一である。其の墓に現はれた最初のもものは、マグダラのマリヤで、彼女は嘗て七つの惡鬼を有して居つたのである。このマグダラのマリヤはラテン語の桃で、日本の桃太



郎と同様の意味がある。即ち夫れはメンブラーナム、フェミニスムを意味し、天女の表章である。イエスと此のマリアの関係は、ヴィナスとアドニスとの関係である。

#### 八、新約に含まれたる作爲

倫敦の博物館に、有名なる書聖チチアンのヴィナスとアドニスの畫があるが之れは一種の諷畫である。即ち夫れは異教徒の太陽神アドニスに、戀愛神なるヴィナスを退けて、道徳を教へて居るの壁畫である。蓋し昔時、希伯來教では寺院に娼婦を置き、之れによりて祭司の收入を計つたのである。新約の著者は祭司や寺院の收入を絶たざらんが爲めに苦心した跡がある。故にカデシヤを有夫の婦人よりも高位に置き、寧ろ神の爲めの神聖なる娼婦として嘉納したのである。之れが爲め七つの惡鬼に付かれて居つたマグダラのマリア、即ち寺院の娼婦を爰に書き出した。新約の上梓せられた當時、エルサレムや猶太國には神

聖なる寺院の娼婦が盛んに活動して居つた。然るに新約の著者が一言も之れに言及せざるは、抑も何ぞやである。蓋し夫れは祭司の唯一の收入であり、彼等にとりて其の禁制は己れの死活に大關係があつたからである。『馬太傳』第二十一章十二節に『イエス宮に入りてその内なる凡ての賣買する者を逐ひだし、兩替するもの臺、鳩を賣るもの腰掛を倒して云ひ給ふ』云々。之れは實に非常識なる記事で、無論明瞭なる作事であるが、しかも娼婦に就いて何等一言の語る所がないのは、著者の注意深い所ではある。

新約書を編纂せる著者は、無論舊約の記事に立脚して居るが、猶太系統のもの手に依つて成つて居らない事だけは確である。蓋し新約の記事は、何等希伯來教の傾向を有して居らないからである。希伯來教や猶太教の儀式や教義は、全く現代主義で決して墓場を越えた未來の觀念を有して居らない。基督教の教義は、現代の世をツランセンデンタルと見る。人類の憧憬する所は天空遙かなる世界で、總てその目的を達する爲めに、人は奮闘すべきであると云ふ。希伯



來人は、蛇によりて欺されたエバの傳統的事實によりて女性を遇するの傾があるが、新約にはそんな思想は毫もない。即ち希臘の女性の如く、溫和なものを見るのである。舊約の神と新約の神は全く異なつて居る。希伯來のジヨブの神は新約には何ら記す所がない。之れに反して羅馬の太陽神ジヨブの名はある。而してミケルアンジェロらの時まで、ジュピターの神は羅馬で禮拜せられて居つた。クリオスなる希臘の太陽神は舊約のジヨブの地位を取つてゐる。然し乍ら傳統的に、殊に紅海の勝戦でチンブレルを吹き廻つた神の名は、決して削除する事は出来ない。故に吾人は、ビュリタン派の信者が希臘のクリオス神を排して、再び生殖神エホバを其の祈禱や、詩歌や、聖樂や、其の他教會の壁畫に現はし、再び彼を聖座に据えんとするのを見るのである。新約は猶太人の有する此の世に於ける清淨とか、不清淨とかの觀念を全く捨て、『見ずして信するものは幸なり』の絶對の信仰生活を要求する希伯來教の八釜敷き教律は兎に角、其の臭氣を取り去らんとする傾きがある。故に今日の猶太教と基督教とは、犬

と猫の如き關係にある。然し今日の基督教のファリズムは自由結婚である。自由戀愛式である。希伯來のやうな寺院の娼婦式でなくなつた。故に彼等は、希伯來教や猶太教の祭司に其の税や代償を拂はない。即ち基督教の信者は、彼等の生活の途を絶つたのである。之れが爲め其の祭司のクリスチャンを憎むのも亦無理はない。新約の『マカ傳』は基督の終りの一ヶ年の傳を記したもので、その中に記してあるものは稍々傳説に近きものを擧げて居るが、『マタイ傳』や『ルカ傳』に至つては、其の傳説に色々の勝手な作り事が挿入してあると『聖書百科辭書』の著者は云つてゐる。然りマカの福音書は大なる基督の傳記より拔萃したもので、彼は基督のガラリヤの傳道より始め（ガラリヤのガルルは一年の一週と云ふ意味）、殊に基督の福音と奇蹟と十字架に關する一年間の傳説を擧げて居る。

### 九、太陽神メルキゼデクと基督



著者不明の『希伯來書』の第五章に『なんぢは永久にメルキゼデクの位に等しき祭司なり』神よりメルキゼデクの位に等しき大祭司と稱へられ給へり』等、同じ意味の記事が七回も繰返されて居る。

抑も聖書中、七は最も注意すべき聖字で、之れは一週の七である。七つの悪鬼、七つの麴、天地創造の七日、七つの金の燈臺、ファローの七つの牛、七つの荒年、七つの燈火、七つの封印、七つの星、七つの教會、神の七つの靈、七つの角、七つの目、七人の御使、七つの喇叭、七つの雷霆、七つの苦難、七つの鉢、七つの頭云々。これ等七の字を數へ來れば、或は百を以ても猶足りないかも知れない。これが殊に『黙示録』に多いのであるから、無論象徴的の七なるに違ひない。

然らば、メルキゼデクとは如何なる神であるかと云ふに、之れはカンナ民族の太陽神である。猶太の神話では彼は天の王、平和の王、正義の王である。彼は父なき、由來なき、太初なき、終りなきの神で、彼は神の子として常に祭司の

心に住むと思はれてゐる。此の思想は太陽の一年の一週から生れて居る。即ち其の大初なき終りなきのメルキゼデクの太陽神が、常に其の一週の軌道に住まつて居る。總て太陽神は葡萄の樹に關係を有して居る。葡萄は太陽に依つて成熟し、良き酒は太陽の光線や熱の賜物である。『ヨハネ傳』は基督が劈頭に水を變じて酒となした奇蹟を擧げてゐる。之れは太陽の一週を意味する『ガレリア』に於て行はれて居る。『ヨハネ傳』第十五章一節に『我は眞の葡萄の樹なり』云々。又其の五章にも同様の記事がある。之れは象徴的の言で、即ち太陽神の事である。ノアは葡萄園を造り、酒を造るとの記事がある。彼も亦太陽神である。メルキゼデクは太陽神である爲め、麴と酒とを造つてゐる。基督が葡萄の樹であつた如く、デオニシウスもバツカスも亦酒の神であり、同時に太陽神である。酒の寶祚は杯である。基督は傳道の困難を酒に比喻し、『我が飲まんとする杯』『父の我に賜ひし杯』とも云つてゐる。

エホバの神は寶祚の酒杯を基督に與へてゐる。基督は十字架に上るや『吾が



父よ、若しかなはば此の杯より離ち給へ』と云つた。之れによりて見ると、基督の天賦は此の杯であつた。彼が弟子等と別離の時の近付くや、訣別の席上で杯を廻し『汝等此の杯より飲め、これ新約の我が血にして、罪を赦さんとして人々の爲めに流す所のものなり』と云うて居る。基督が葡萄の樹である以上は、其の血はもとより葡萄酒である。故に教會では、今も猶晚餐式に葡萄酒を飲むの習慣がある。

### 一〇、酒神バツカスと基督

基督は諸方に傳道して、其の終りの近づくや、彼は凱旋的にエルサレムの都城に入つたのである。其の光景は、不思議にも今迄の有様と全く趣を異にして居る。彼は弟子に命じてエルサレム附近の村に行き、其の家に繋ぎある驢馬を牽き來らしめ、之れに乗つて入城してゐる。基督の馬や驢馬に乗つた記事は、此の他にバイブルにはない。何を意味するか、突然此の事實を挙げ、しかも他

人の家に繋ぎある驢馬を勝手に牽き來らしめ、之れに乗つたのである。基督がエルサレムへ入來する時、多くの人々は其の衣を脱いで之れを途上に布き、或は樹の枝を伐つて途に敷いた。多くの人々は前に行き後に従ひ、『ダヅキテの裔ホザナよ、主の名に託りて來るものは福なり』(『馬太傳』二十一)と群衆に擁せられて堂々とエルサレムに入城した。從來の基督の經歷と今日の此の光景とを比較せば、如何にも不調和でないか。此の記事は酒の神即ち太陽神バツカスが驢馬に乗つてチバ城に凱旋したのと同じである。其の傳説に、彼バツカスが細荷の都に入るや、ファウタスと云ふ木の神も随伴し、バツカンデと稱する多くの男女、殊に多くの女性等も彼の前後に列をなし、或は笛を吹き、或は琴を奏し、狂氣の如く着物の袖や、裳を振廻し、木の葉も花も騒ぎ立ちて、皆々『萬世に何時も變らぬ幼顔のバツカス』と讚美したと云ふ事である。之れでは宛然基督のエルサレム入りを讀むのと同じの感がある。況んや其の『ホザナ』と讚美せる』一句は『萬世に變らぬ幼顔の神』の一句と語學上同一であると云ふ



に於ておやである。

茲に注意すべき事は、基督にも女の信者の多かつた事である。彼等の信仰は熱狂的のもので、彼の幻影を目撃したものは、多く女であつたのだ。それがしかも基督教の戀愛的、ヒステリック的、エロシチック的の狂信を誘導したもので、今日聖會が性會と云はるるのも亦故なきにあらずである。之れと同様にバツカスにも、マイナツドや、バツカンテと稱する女性の信者が多く、彼等は熱狂的に、其の童貞を彼に捧げたものである。之れは印度の太陽神クリストナにも共通の事實であるのだ。

彼の基督の言、『勞れたるもの、又重荷を負へるものは、我れに來れ、吾れ汝を安ません』(『馬太傳』二章)之れは酒の神バツカスの云ふ事と同一である。『汝等衣食の事を思ひ煩ふ勿れ、野の百合を見よ、空の鳥を見よ、明日の事を思ひ煩ふ勿れ』(『馬太傳』六章)之れは酒の神の放任自由なる觀念ともなるのである。酒の善き方面と悪しき方面とがあるが、酒の上の過失は凡て罪を酒に歸し

酒を罪し、彼の贖によりて其の罪を免れ得るのである。基督はバツカスであり酒の神であるから、人の罪を身に負うたのである。バツカスにも自由や、赦免や、解放や、贖身を意味するリールやルオーの名がある。基督も亦バツカスの如く『汝の罪許さる』の様な言を吐いてゐる。然り酒の神は赦免や、自由や、解放や、平民主義や、四海同胞主義の神であるからだ。彼の前には男女も、老幼も、白人も、黒人も、何等差別がないのである。プラトーンは其『國憲論』第二卷に云つてゐる。即ち『神は人類の生れて勞苦に堪へざる可からざるを憐み、爲めに神聖なる祭禮を指定し、以て人生の休息と勤勞とを交替せしめ、又人間に與ふるに數多のミューズ及び夫れが指導者たるアポロン及びバツカス等を以てし、人間歡樂の伴侶たらしめ、又神々の祭禮に加はり、神々の援助に依り、人間の教育を進歩せしめる』云々。蓋し希臘人や、羅馬人が新約を編纂するに當り、幾分か、否、少からず、プラトーンの思想に薰化せられて居つたことは疑はれない。







醫術、音樂及び豫言等の術をアポローンから教へられたのである。彼、嬰兒アスクラピオスを抱いて自分の家に歸ると、其の娘オキロエなる者は、此の兒を一目見て直ちに發作の状態となり、將來此の兒が榮光ある偉大の人物となる事を豫言した。聖書のシメオンと老女アンナの爲したと云ふ事は、アスクラピオス傳の馬人キイロンと其の女オキロエの云うた事と行うた事と同じである。シメオンは嬉んでイエスを抱き上げて祝した。馬人キイロンはアスクラピオスを自分の家に抱いて來た。聖書のアンナはイエスを讚美し、人々に其兒の事を語つた。オキロエも亦アスクラピオスが將來光榮偉大なるものなる事を豫言した。之れは殆んど同様ではないか。

アスクラピオスは成長して醫術の神となり、人間に長命と健康とを與へた。又死んだものを蘇へらして居る。イエスも亦幾多の疾病を治療し、女性マルタ・マリヤの弟ラザロの死して墓に葬られ、四日になるものさへ生き復らして居る。『ヨハネ傳』第十一章に『イエス彼(マルタ)に言ひけるは、我れは復生なり、

生命なり、我れを信ずる者は死ぬとも生く可し』と云うてゐる。アスクラピオスは同じく醫神であり、太陽神であつて、太陽の冬至墓穴に入つて死するも、亦再び復活再生し得べき事を爰でも表示して居る。基督の肖像を現はすに多くこのアスクラピオスの肖像を模倣して居る。紀元前四世紀メロスにて發見せられた希臘彫刻師の手に成るアスクラピオスの肖像が、實に基督の肖像のモデルであつたのだ。

而して希臘の神話は多く亞細亞より輸入せられたもので、アスクラピオスが基督と同様である如く、印度のクリストナとも亦同様であるのだ。基督は『ヨハネ傳』第九章五節に『吾は世の光なり』と云うて居る。『マタイ傳』第十七章三節に『斯くて彼の前にて其の状かはり、その顔は日の如く輝き、其の衣は光の如く白くなりぬ。』又同章十五節に『見よ、光れる雲かれらを覆ふ。また雲より聲あり』云々。之れは有名なる基督の變貌で、太陽なる事を明瞭にならしめて居る。其の他光の記事は決して少くない。『マタイ傳』第二十四章三十節にも



「日は暗く……かつ人の子の能力と大なる榮光とをもて天の雲に乗り來るを見ん」と云ふやうな事がある。

### 一二、アレキサンドリアにて新約編纂

夫れは兎に角として、新約編纂の目的がなんであるかを見る爲めに、吾人は爰に深く聖書の起源を追究するの必要がある。初めて新約に記載せられた言語は希臘語であるから、第一に如何なる地方で當時希臘語が、話されて居つたかを知るのが捷徑である。希臘の都市アテネで記載せられなかつた事は明瞭な事實である。蓋し其の地では其の編纂せられた何等の手懸りもないのである。而して猶太人によつて記載せられなかつた事も亦前述の通りである。之れと同時に、當時の猶太人には希臘語は知られてゐなかつた。其の編纂せられた都市は舊約聖書の親しく知れてゐる、處女と其の子供を有する、更に必要なるは、愛の神の觀念や、佛教哲學の良く知れ渡り居る、亞細亞の太陽神の傳説や、羅馬の

古代神のよく知れた所でなければならぬのである。此の條件に合格するの都市は世界に唯だ一ヶ所あつた。即ち夫れは地中海の南沿岸にあるアレキサンドリアであつた。

希臘の爲政家中埃及に於けるトレミー王の下に、世界最大の圖書館がアレキサンドリアに建設せられたのみならず、此の市は當時世界的學術の淵藪となつた。殊にトレミーは世界に知られた各宗教の研究に熱中した。彼は學者をして當時の宗教に關する書物を細大漏さず蒐集せしめた。彼は圖書館の外、大學や美術館や、博物館や其他教育上の機關を設立して、世界の智識を此の市に網羅せんと企圖した。彼は宗教的の著書や記録を獲得せんが爲めに、あらゆる方法を講じ、之れを復寫せしめて、所有者より其の原本を寄送せしめたのである。其の當時の圖書館ブルキウムには四十九萬の書物があり、セラフィウムの寺院には、四萬二千八百卷の書物があつた。此處で學者は各宗教の祖師等と相接觸するの機會を得た。此のトレミーの死後も、此の大圖書館はアレキサンドリア



にあつたのであるから、當時の學者は其の材料に立脚して、新約聖書を編纂するの好期を得た。

達磨が九年の壁睨みと同様に、材料なき思想は無論ゼロであるが、斯くの如き材料を有する學者の著述は、無論其の當時人心の最も要求する銀線や金線に觸れて居つたに違ひない。故に彼等は舊約と全く異なりたる教義を編み出し、恨みの神や、呪の神を排して愛の神、即ち瀆罪の神イエス・キリストを製造したのである。これ等の著者の中には、基督と同様の性格を有するセラピス神の觀念を有して居つたものが少くなかつた。此のセラピスの神はトレミーが希臘より持ち來り、埃及人に渴仰せしめた神で、前述のセラフィウム寺院は其の神の爲めに建てられたものである。著者は基督を此のセラピス神に擬し、其の基督として畫ける肖像も、亦此のセラピスの肖像であつた。ハームスオースの『萬有百科辭書』にある十五の基督の肖像は、アスクレピオスとセラピスの兩方の寫生である。埃及より嘗つて伊太利に輸入せられた處女と子供の肖像は、イ

シスと其の子供ホールスの肖像であつた。即ち肖像の基督は智慧と慈悲に必要なる有鬚漢で、沈み勝な容貌を有してゐる。

兎に角此の新約を編纂したる著者は、舊約に記載せるジョブ神を削除した爲め、希伯來の神との交渉が極めて薄くなつた。けれど新約は舊約に立脚して編纂せられたものなる故に、古代の宗教的の神秘的思想を含ませてゐる事は否まれない。之れは明らかに野蠻的なる希伯來教の教義を排して、慈悲の教義を有する印度佛教の思想を挿入せしめたのである事はよもや過りはあるまい。

### 一三、太陽崇拜の性的祭祀

太陽神の崇拜は廣く世界に擴がり、例へ其の神の容貌が如何に異なるにしても、キリストや釋迦の如く、第一、頭部より御光を放射してゐる。第二、神聖なる祭日は多く太陽の日と稱せられてゐる。第三、如何なる神社佛閣でも皆太陽に面して建設せられてゐる。かの有名なる羅馬の聖ペテロ伽藍でも、太陽崇



拜を排してゐる希伯來教のエルサレム宮殿でも、其の然らざるものがない。而して其の殿堂の最も多くは東方に面してゐる。本邦に於て方位を彼れ是れ八釜しく云ふのも、亦此の意味に於てである。『埃及記』に記載せるエロヒヤエホバの神も、亦當時太陽神であつた。其の第二十四章十六―七節に『すなはちエホバの榮光シナイ山の上に駐りて、雲山を蔽ふこと六日なりしが、七日に至りてエホバ雲の中よりモーゼを呼び給ふ。エホバの榮光、山の嶺に燃える火の如くに、イスラエルの子孫の目に見えたり。』又其の十六節に『イスラエルの神を見るに、その足の下には透明なる青玉蒼色の天空をもて作れる如きものありて、輝ける天空にさも似たり』とある。無論これは太陽の事をいつたのであるに違ひない。

印度では今も猶昔時の如く依然としてホーリ祭の行列で神郎太陽クリストナを屋臺に載せ、今茲に説明するを憚るの醜態に於て、土人は歌つたり、身振して練り歩くのである。又一方の屋臺には花嫁が乗つてゐる。赤色の水が見物人

に向つて振り撒かれる。其の赤水は葡萄酒を意味し、同時に性的、戀愛的の意義が含まれてゐる。新郎なるクリストナは若者の装束で現はれ、其の側には牛飼の小娘達がゐる。其の小娘達は所謂バラキイーで、其の市の娼婦である。印度の娼婦は今も猶半ば神聖なものとして擯斥せられてゐない。アビシニアに今も猶昔時エルサレムに於て行はれたやうな神聖の娼婦がある。祭司は之れによりて多大の収入を得てゐる事は、其のありし昔の歴史を物語るものである。群衆は恍惚として、淫猥の狂信に耽溺し、其の野卑なる行動は到底文明人士の語るべきものではない。其の起原は太陽神クリストナが、地球の處女と結婚し、之れによりて萬物が生殖すると云ふ迷信に立脚してゐる。

斯くの如き祭は昔時到處に舉行せられ、今日吾が日本でも中國の田舎に行けば見ることが出来る。蓋しこれ生物の出發點であり、しかも人間本能の發露である。猶太の愈越祭は遙か遊牧の時代に遡り、それは出埃及前に既に行はれて居つた。昔時のアラビア人もまた同様の祭祀を春季に行うて居つた。吾人が



今日新年を祝する事は太陽神に起源してゐる。外國にもクリスマスや、イースターや、バツソーパーや、ペンテコストと云ふやうな色々の祭があるが、何れもが太陽神の祭である。之れによりて吾人は、昔時崇拜せし神の大部分は太陽神であつた事を知ることが出来る。

#### 一四、太陽崇拜の性的表象

太陽の死と復活の思想は、希臘や其の他古國の賞牌に依つても知ることが出来る。即ち賞牌の一方には、パツカス一名デオニシウスの老年の太陽神が今や海に没せんとする所があり、他面には海豚(女陰の表象)より蘇生し來る太陽を表はして居る。其の當時學者は人魚が總て生命の母であると思つた。而してこの人魚は今日の海豚である。希臘人が特に海豚を萬物の母として選んだのは、一は彼が温血動物であり、子供に乳を飲ませ、同時に水に住まつて居ると云ふ事であつた。蓋し希臘では、凡ての生命が水より來ると云ふ思想を持つて居つた

のだ。此の思想は今日當らずと雖もまた遠からずである。

而してこのメタルの刻畫にあるものは、實際人魚の生殖器より太陽の生れ出づる所を現はしたものである。此の目的を現出せんが爲めに、祭司等は表象的の物質を使用した。肉を表象する爲めには赤色に染めたる羊を用ひた。此の羊は太陽の十二宮の一たる白羊宮の羊で、旺盛の生殖力ある事を示したものである。此の赤色の羊皮が裂け目あるやうに造られ、其の周圍に絹様の長毛ある山羊の毛が置かれた。此の山羊もまた太陽の十二宮の一なる磨羯宮の山羊で、之れも亦頗る生殖慾の盛なる動物である。此の裂目ある重要な部分に海豚の皮が置かれるのである。之れは眞實のデルフェイス即ちウオンブの表象であつた。嘗てバイブルに此の海豚の皮が狸の皮として翻譯せられてあつたが、現代版では海豚の字を用ひてゐる。若し高僧が十二月二十日に死去すれば、太陽教や生殖器の宗式に従つて衣を被らせ、後公衆に見せる場合には、恰も希伯來人が其の宗式に従つて死人に被せた様な墓衣を被らせる。二十二日の朝即ち四十時間



の後、海豚を以て埋め付けられた。前述の皮の裂目より死人を現はし復活した状態を現出せしむるものである。此の四十時間（實際太陽は三十三時間最南端にあるが、聖書では四十時間としてある）は、基督の墓穴にあつた三日間と同一である。舊約にあるヨナが三日間魚の腹の中に居つた話も、亦希臘のメタルやコインに印刻してある太陽の死や復活と同様の意味を表示したものである。

海豚より更生するの思想は、決して希臘や希伯來に限つたものでない。牝牛や魚から再生し得るの觀念を有したのもある。之れが爲めに、或る處には人間の通過出来るやうな大穴を有する牝牛や魚を造り、其の穴を通過したものがよく再生し得るとの迷信を抱かしめた。此の迷信は今も猶野蠻人の社會に残つてゐる。其の延長として神聖なる岩穴や木の穴を通過したものは、やがて其の病氣が癒ると云はれてゐる。其の迷信の起源は何れも太陽の年々再生し來る神話的大芝居に出發してゐる。

希伯來人は勿論太陽神の觀念を、波斯や希臘や埃及の奴隸的俘虜であつた時

代より傳得して居る。其の最初に知つたものは、春に於て太陽が赤道を横切り之れによりて太陽は冬の死より蘇へり、其の昇天は人類を樂園に招徠する事である。然れども當時彼等は其の日を以て其の民族が埃及の奴隸の厄を脱し、モーゼによりて勝利を得たる、その記念の祝日となした。第二に彼等の知つたものは、希臘のヘルセウス神の如く、神の子として成長し、冬の恐るべきドラゴンより遁れて、春分に達し、地球上の少女等を救済したと云ふ、老いたる太陽が死して復活したと云ふ、大芝居であつた。之れは希臘のコインにあるやうな芝居であつたのだ。然し乍ら新年の到着は市街をぼんやりと通行するやうな人間には知れない現象で、其の時天候は依然として嚴寒と異らない。即ち其の間には春の曙光がまだ見えないのである。故に多くの國民は前述の如く新年を新芽の綻びる駑蕩の春になして居る。而して夫れは畢竟冬至祭、愈越祭パツパ、昇天祭即ち太陽の死、復活救世を一纏めとなしたもので、夫れは恰も英國にイースター祭があるのと同然である。以上は太陽教起原の概畧である。



一五、人類愛の釋迦の教義

羅馬國民が大帝國を統御するに當り、世界的の太陽教が深く各國民の人心を支配し居るを見たのである。而して自國の太陽神ジュピター(ジョブ)、希臘のゼウス、バビロンのマルダック、波斯のアフラ・マヅダ、印度のクリストナ等が最も著明なる太陽神なる事を知つた。一方希伯來人が幕屋の祭や、戀愛の幕屋、エホバの神即ち恨の神―目にて目を、齒にて齒を、償ふ復讐の神―の恐怖教や、性的教に浸り居る間に、印度の王子釋迦は王位を去り、賤しき求道者として慈悲の印度哲學を結晶せしめつつあつたのだ。即ち夫れは基督教信者が自ら稱して最も尊き教義となし居る人類愛であつた。慈悲心であつた。蓋し是れ釋迦の教へであつて、吾人は茲に於てか、燈臺もと暗し、捕へて見れば我が子なりの感なくんばあらずである。

余は今ハンネーの最も平易に釋迦の言を記載した所を擧げて見る。即ち「人

をして怒心を離れしめよ。人をして傲慢を棄てしめよ。人をして凡ての束縛を脱せしめよ。轉がる戦車の如く起り來る怒を壓へ得るものを我れ呼んで眞の御者と云はん。愛によつて怒に勝たしめよ。善行によりて貪慾に勝たしめよ。彼れは我れを侮辱せん。彼れは我れを打たん。彼れは我れを敗らん。彼れは我れを掠奪せん。然れ共これ等の念を有するものには恨の盡くる事がない。恨を以て恨に酬いんと欲せば、恨長へに盡きず。唯だ愛のみ、これを止め得べし」と云つてゐる。

彼また曰く「人は己れの意を伏する事能はず、却つて他人の意を伏せんと欲する。能く己の意を伏する者は他人の意をも伏する事が出来る。怒を殺せば安穩に眠る事が出来る。人をして喜ばしむる事が出来る。怒は毒の根源である。怒を殺せば長夜に憂苦がない。己れを覺るものは人を覺るものである。己れ清からば人も亦清しである。己れの體性は即ち人の體性である。己れの垢を離るるは即ち人の垢を離るることである。己れの貧を離るるは即ち人の貧を離るる



のである。己れの怒を離るるは即ち人の怒を離るるのである。己れの痴を離るるは即ち他人の痴より離るることである。人の離るるを見れば能く和せしめよ。人の善事を揚げ、其の過ちを隠せる人の慚を宣べ傳へるな。人の秘密を撥くな。呪誓をなすな。小恩に對して大恩を心掛けよ。怨親等しく苦しむ時に、先づ怨むものを救へ。罵るものあらば、寧ろ憐心を生ぜよ。打つものあらば慈悲心を生ぜよ。他人を見る事父母の如くにせよ。四河海に入りて又河の名なし。身を正しくして、意を正しくせよ。慾望を除き、慾をして無慾ならしめよ。然らば總ての煩惱と病氣を去る事が出来る。慈悲心は即ち安樂の要素である』云々。

此の教訓の内には千古の金言なるものが決して少なくない。之れが二千五百餘年前の教義であるから實に驚かざるを得ない。ウエルスは釋迦の教義に就いて曰く、『印度の周圍は山であつて、其の當時の文明國アツシリアや、バビロンやエヂプトと相接觸するの機會を得なかつた。航海術の進み來つたのも、餘程近代の事である。故に彼れに智識の缺乏して居つた事は寔に遺憾であつた』と。

余も亦同感なきにしもあらずである。しかも其の當時『四河海に入りて又河の名なし』と云ふやうな四海同胞の教義を案出し來つた事は、如何にも大發見であつたと思ふ。

彼は人類の五戒を教へた。即ち、

- 第一、罪なきものを殺すべからず。      第二、他人の物を盗むべからず。
- 第三、虚偽を語るべからず。            第四、酒を飲むべからず。
- 第五、姦淫をなすべからず。

彼は又正道を教へた。即ち(一)正しき信仰、(二)正しき考察、(三)正しき語(四)正しき行、(五)正しき生計、(六)正しき奮闘、(七)正しき意志、(八)正しき關想、である。彼は此の八道を實行して撓まず、倦まざれば、遂に涅槃(ニルバーナ)の眞理に達し得べしと説き聽かせた。

釋迦の教は其の當時印度に文字なかりしを以て、其の教義は弟子によりて口碑的に傳はり來つたものらしい。蓋し其の後に現はれたホーマーのイリアッド



も猶印刷に附せられてゐなかつたのである。而して印度經典の文字は多く地中海のアルハベットであるから、其の當時夫れが印度に達してゐなかつたのである。故に弟子等は五戒や八道の様に解り易き要點に分別し、之れを説明したもののらしい。ウエルスは、釋迦の教義は大に基督教の夫れに似て居り、殊に『生命を欲するものは之を失ふ』の言の如き、何れの大宗教家も喝破してゐるのであると云うてゐる。否な基督教の教義は蓋し佛教の夫れに立脚して居つたのである。

けれど釋迦の狹隘なる所は少くなかつた。彼は世界歴史の智識や觀察力を有せなかつたのである。彼は時代と空間に起る生命の多角的變事を明瞭に認むる事が出来なかつた。即ち彼の思想は其の時代の觀念や、其の當時の人間性を超越する事が出来なかつた。彼の心は永遠の循環性觀念に束縛せられて居つた。蓋し其の教義は太陽教に起源して居つたからである。太陽の子は太陽である如く、世界の子は世界の子であり、佛陀の子は佛陀であつた。畢竟彼は宇宙を變

化なき一つの輪環と自覺して居つたのである。

夫れ宇宙廣しと雖も、絶對の變化なき現象が何處にあるか。吾人の今日見るの一日は明日の一日よりも短いではないか。吾人は決して祖先の歴史を繰返してゐない。吾人は父母より形體を受けた。然れども絶對に相似せる所が何處にあるか。變化は無限である、良心は年と共に進化する。眞理は世と共に發達する。萬物は永遠に進化して凡て新ならざるはない。此の觀念が現代人の科學によりて克ち得たる新しき觀念である。無論此の釋迦の古き觀念は社會を害するものである。けれど彼の久遠の愛、即ち慈悲の愛を説き來つた事は何んと言つても偉大である。正に基督は其の糟糠を嘗めたのである。

#### 一六、釋迦及び孔子と基督

其の當時釋迦の教へは實踐教であつた。希伯來の夫れの如く戒律や犠牲の宗教ではなく、寺院を有して居らなかつた。蓋し其の教義は犠牲の必要がなく、



僧侶の所謂神聖なる命令を要しなかつたのである。彼等は神學を有せず、其の當時無數にあつた如何がはしき神々の存在には無頓着であつた。然れど今日の佛教は如何であるか。其の嘗て美しかりし教義も、先きのブ라마教に邪魔せられて、自己救済の教も一變して現代に及び、未來の困難や苦痛から救はれんが爲めの利己的宗教となつて仕舞つたではないか。彼の六道輪廻の觀念は、決して釋迦が説き聞かせたものではないにも關らず、それが佛教の中心であるが如くになつたのである。其の死後に於ける魂の轉位が、人類に恐怖の念を生ぜしめ、惡人は其の罪の爲めに下等動物に生れ變り、餓鬼道や、地獄の下道に落ちれると云ふブ라마教の教義に釋迦を結び付けたのである。而して釋迦をして此の餓鬼道より人類を救ひ出すの救世主となしたのである。然り初代の佛教はアソカ帝の下に大勢力を以てシリアや、バビロンや、埃及に宣傳せられたのである。所が十一世紀の頃には佛教も先きのブ라마教に併吞せられ、印度の滅亡と共に其の宗教も亦衰へ、人類を支配し得なくなつたのである、とウエルスは云

つて居る。然れど釋迦の説き聞かせた教義は、今日の基督教が剽窃せる愛であつたのだ。然らば佛徒等は其の假作の基督より之れを取り戻し、愛と親切を標榜する天眞の佛教に歸り、現代の文明に順應するやうに改造すれば、即ち大いに將來あるの宗教となるのである。

夫れ基督の話は總て僧侶の話であつた。新約聖書にある千古の金言は基督よりも遙に先に出でた先輩の言であつた。然り、前述の釋迦の言は勿論、孔子やプラトリーや、セネカや、エピクテタスや、オーレリウスの説き來つた教義をも、其の内に含ませたのである。

支那の孔子は印度の釋迦より後るる事約百年後に生れ、同様の教義を宣傳せる事は、實に不思議の現象である。最初人類的の教義を支那に與へたものは、何と云つても孔子である。ハンネーは最も平易に其の教義の一端を記して居るから、譯して見よう。

孔子曰く『汝が他人にされんと欲する事を他人になせ。』彼は其の意味を一層



判然たらしめる爲め、消極的に説明して曰く「己れの他人にせられたくない事を我れ他人に行ふ事を欲しない。此の金則は凡ての人の行道に最も必要なる尺度で、之れを以て人世の行路を左右すべし」と彼は三度繰返して居る。又彼は他の美言を發してゐる。即ち「徳は抵抗なきの魅力を有す。徳は孤ならず、必ず隣を見出すであらう」と。彼は健康なる男性的の達觀を有し、穿き違へられた、しかも人間性を脱却せる「右の頬を打たれれば左の頬をも向けよ」との女性的無能的の教義を排斥したのである。彼は「害は正義を以て償はざるべからず、親切には親切を以てし、不正は假令小なりと雖も正さざるべからず。然らざれば、他日大なる不正が汝と他人を亡ぼすであらう」と警告した。實に之れは二千五百年前の金言であつて、しかも猶夫れが現代の社會に誤りなきの金言ではないか。

以上の釋迦や孔子の金言は、其の當時アレキサンデリアの神學者に知れて居つた。之れがエホバの神の獨り子なるメシアの教として、彼等によりて偽作せ

られたのである。當時神の子と稱するものは、恰も各國に王がある如く、數多あつたのだ。すべて埃及のファラオは神の子であつた。ギボンは吾人に告げるに、恰も四世紀頃、羅馬のコンスタンチン帝は父の死后吾れは神なりと宣言した。又マークス帝の要求により、其の妻ファウスチナは女神なりと宣言した。然り其の當時神や、女神や、處女の腹に宿れる神の子等は、黒莓の如く澤山にあつた。

而して吾々の新約聖書もまた其の當時流行せるファッションの俘虜となつたのだ。聖オーガスチンは「今日基督教と稱するものは、其の時既に現存して居つた。即ち既に存在せる宗教に基督教と稱する名稱を附した許りである」と云うて居る。然り基督教は基督教を建設したのではない。ジユスチン・マアチアは、吾々信者は「神より得たる言(ロゴス)即ち無垢の處女より生れた神の子イエス・キリストを宣言するに當り、吾人は今や何等異教徒に誇るの特色を有せざるものである。今迄吾人の神の子と稱し來つたイエスは、單なる人間であつたのだ。



然れど神の子として彼を尊敬する所以のものは、即ち彼の智慧である』云々と云つてゐる。

一七、バイブルに於ける想像的記述

テルチユリアンは『紀元二百三十年頃基督教徒が、異教徒の祭を採用したる事を大いに悲しむのである。吾人は寔に變り易く、異教徒の貞節に比して正に慚愧に堪えぬものがある。彼等異教徒は基督教より何物も採用しなかつた』と云つて居る。然り基督教の要素は、古い宗教の教義や信仰に立脚して居るのであるから、無論採用すべき何物もなかつたのである。けれど基督教々徒が千古の金言を積極的に宣傳した事は大いに多とする所である。之れと同時に基督教が文明の進歩に大害のあつた事も吾人は決して忘れてはならない。舊約聖書は甚だしく小説的な不自然の著述であつて、夫れは確に野蠻的の著者によりて上梓せられたものらしい。彼は、澤山の首を得れば得るだけ名譽であると思つて

ゐる臺灣の生蕃と同様に、多くの人間を殺すを以て偉人と思つたらしい。故に舊約にはミデニテスやアマレキスや、ケニテスの民族を根柢より破壊し、無数の殺戮を行つたやうな記載が屢々繰返されてゐる。彼の第二の『歴史志略』第十三章十七節に『アラビヤと其の民彼等を數多く撃殺せり。イスラエル人の殺されて倒れし者は五十萬、みな屈強なる人なりき。』一戦争に於て五十萬の人間が殺されたと云ふやうな事は、人類の歴史に於て未曾有の事である。『士師記』第六章には此の殺された國民が、再び其の數に於ては濱の眞砂の如く、其の數の多きに於ては蝗のそれの如くと云ふやうな記事がある。蓋し棒大の記事も此處まで來れば滑稽である。

希伯來の神のみならず、其の僧侶も亦恐ろしく血に渴して居つた。彼等は宗教に對しては狂信を有し、己れの子供等を其の當時奉事せんとする神の名によりて命名した。斯くの如く希伯來人は、餘程姓名に重きを置いた。舊約にある神の名も、新約にある夫れも、何れもが深き表象的の意味を含み居ることは、



既に前述せる通である。姓名に於てIの最初にあるものは男性であり、AやOやUやVの來るものは皆女性である。神の名は多く此の兩字の組立によりて構成せられ、舊約の神エホバは前述の如く、男女兩性神である。即ち創造の力を有するものである。吾々の聖書にはエホバの名があるが、夫れは希伯來の聖書にはない。希伯來では夫れはIו又はIohとなし、其の神は兩性の表象である。而してエホバ (Jehovah) の字義を解體すると、oとvとは希伯來語や羅典語に於ては同一である。Ah 又はAは女性を示すに過ぎない。故にエホバの文字には一男性と三女性があつて、之れは所謂四價原子である。而して夫れはIוなる明瞭の表象を判然たらしめざらんが爲めの方便的の名であつたのだ。新約となれば古き舊約の神の名は全部消滅し、Iahの名は殆んどないと云つてよ。ただ重要なメシア (Messiah) の名はあるが、夫れは直にクリストの名に置き換へられて居る。又アナニアの名はあるが、夫れは基督教の謀判者で、即ち自稱メシアであつた。其の名の全く異り居る事が、明瞭に聖書の想像的の編纂た

る事を告げて居る。蓋し民族教の家族名なるものは、實社會にありては決して忽焉として消滅すべき性質のものでない。

故に新約は舊約よりも或る目的の爲めに更に一層の技巧を凝らして造られぬ事が知れる。其の記事は道德上の一種の芝居であつて、夫れには實際人間らしい人間の面影を見る事が出来ない。舊約にある戦争で神が人を殺したり、少女を掠奪したりするやうな記事の代りに、新約では降神者や、巫的の豫言者や祕密結社の仲間連の舞臺に出入するのを見るが、一として實際の人間らしいものではなく、又人間の香りを持つて居るものもない。若し實際の歴史や地理に關したるものになると、何れもが全く無智なるを裏切つてゐる。而して何れも夫れは僧侶の製造せる新しき宗教の表現に過ぎないのである。故に聖書にあるものは、其の當時の僧侶の智識に踰踏せられて、新智識を世に附與するものが何物もない。何れもが毫も祖先教を超越して居らない。其の舞臺に登せた救世主は印度の太陽神クリストナであるが、然し其の背景と空氣とは全く異つて居る。



今日の此の兩聖書位調子の合はぬ書籍は恐らく他にあるまい。蓋し此の新教の起つた當時、猶太人が流罪的、奴隸的の境遇にあつた爲めに斯くあらしめたものか、夫れとも國教になし來つた羅馬の出版上の都合より、斯くあらしめたものか、夫れは今日容易に速斷する事が出來ない。否な夫れは釋迦の優しき教義の傳播に歸するもので、新約の福音書に於ける様な教義は即ち其の反響的寫出であつた爲めであらう。

### 一八、羅馬に於けるバイブル改造

新約には釋迦や、孔子の教義は尠くないが、更に羅馬のマークス・オーレリウスの優美なる深遠なる、しかも男性的思想が少からず含まれてゐる。吾人は佛教徒なる印度のアソカ帝が、紀元前三百年頃シリアやマセドニアや、埃及や東歐に佛教の教義を傳播せんが爲めに、傳道師を送つた事を忘れてはならない。其の教ふる教義が抑も基督教の柔和なる教義の基礎となつたものと思はるゝの

である。マークス・オーレリウスの教義は人間行道の模範であり、比類なき人類の指道者であるが、之れは明かに東洋宗教の色彩を帯びて居る。即ち之れが現代の基督教の骨子となつて居るやうだ。此の釋迦と孔子の教義は歐洲には餘り柔和であつて、しかも餘り人情過ぎた。蓋し歐洲では戦争の神々が居つて、最高の勢力を振ひ、其の宗教には悲惨なる流血の現象や、罪なき子供の生きながらの焼殺等が行はれて居つたからである。此の印度の柔和なる教義と優美なるしかも男性的なる羅馬の思想とが結び付いて、爰にマークス・オーレリウスの教義の如き、人類の行動を指導すべき教義が出來たのである。

新約の記載は左の二點に於て全く希伯來式である。即ち第一は、天上の神や天上の物體を地上に持ち來し、希伯來民族の歴史に之れを結び付けた事である。第二は、表象的の言葉を廣く用ひたことである。一方、新約の舊約と異なる所は、神聖なる娼婦の記事を隠匿し、希伯來教の性的に關する事實を、深く包みたる表象で現はした事である。世界の救濟觀念は全く希伯來式で、之れは希伯



來の神よりアブラハムや、ダビデを経て、直接傳來せるものである。希伯來のエロヒムは木の神で、ジヨブ即ちエホバは希伯來民族の守護神であつた。『申命記』第十四章二節に、『其れは汝は汝の神エホバの聖民なればなり。エホバの地の面の諸々の民の中より汝を擇びて、己れの實の民となし給へり。』また『亞麻士書』第三章十二節に、『地の諸々の族の中にて我れただ汝らのみを知れり』云々。故に希伯來人には其の擇ばれた民と云ふ觀念が、常に腦中にあつた。けれどもこれ等の記事は、後年に至つて加へた事は事實であつて、新約を編纂せんが爲めの一の前提であつたのだ。

其の當時マソレツテスによりて今日の舊約に改版せられたものであるから、夫れは彼の作事である云つてもよい。其の後紀元六百九十二年、即ち基督教が最後に羅馬の國教となつた時に、其の改造せられたものが少なくなかつた。此の時に四福音書や使徒行傳や宗教の信條等が確定した。而して其の表象たる I<sup>o</sup>や II<sup>o</sup>には頗る羅馬の香氣があるので、之れも餘程おそく聖書に挿入せられ

ヨセフの關係が如何なるものであるか

たものらしい。『聖書百科辭典』の記する所によれば、彼の基督の系統は學者達が勝手に製造したものである。即ち其の系統には何等基督に關係せるものがない。『馬太傳』第一章十八節に『その母マリヤ、ヨセフと許嫁したのみにて、未だ偕にあらざりしに、聖靈によりて孕り、その孕りたること顯はれたり。』之れは疑もなく僧侶や、神學者の小説的の編纂であつて、其の頁以上に亘れる系の圖の記載は、全く其の偽作なるを裏書して居る。否なこれが抑も全バイブルの偽作なりと看破せられた端緒であつたのだ。蓋しヨセフの種を宿し居らざるマリヤの子基督に、ヨセフが何んの關係があらうか。之れは即ちマリヤとクリオス（太陽）若くは其の聖靈との製産物である。

其の當時は遺傳學が發達して居らず、否な僧侶等の無學なりし爲め、斯くの如き非常識の記事を掲載するに至つたものらしい。之れが新約を編纂するに當つての最も大なる缺陷であつた。故に今日羅馬教會ではマリヤの系圖を造らんとして、大に講究して居る。其の當時感應遺傳は認められて居つた。故に今日



理髮師が用ひて居るやうな、紅白の棒を立て、其の前で色々の動物を交尾さし斑彩のある動物が出来ると思つて居つた。又妊婦が火事を見れば子供に痣が出来たり、黒人の顔を見れば黒い子供が出来たりと思つて居つた。故に其の當時妊婦は感應を恐れて、大に其の動作を慎んだのである。此の過される觀念が、今も猶此の文明の社會に残つて居る。然り智識は征服である。智識は經驗であつて、製造の出来るものではない。其の當時僧侶の無智なる、基督が感應的にマリアの腹に宿り得るものと思つたらしい。而して基督の關係なきヨセフの系圖を記載する事によつて、バイブルの全部を破壊して仕舞つた。然り今日基督教の牧師は、基督の系圖や、基督の奇蹟や、基督の昇天は、基督教の傳説であり、十字架上の死と、之によりて起るの罪の贖ひはポーロの製造したもので、基督自ら教へたものでないと云ふ。然らば聖書に何が残るか。

一九、バイブルは現代的改造を要す

愛の教へは釋迦に出發して居る。惡魔の觀念は既に印度にも波斯にもある。聖書の著者が祖先の發見し來つた千古の金則を、其内に編入した事は正に吾人の大いに徳とする所なるが、同時に無智なる全く社會を毒するやうな記事を挿入し來つた事は、吾人の最も遺憾とする所である。故にウエルスが『文化の聖書』に言つてゐるやうに、吾人はバイブルを大改造して、其の内に含まれてゐる千古の金言のみを拔萃せなければならぬ。千古の金言は決してバイブルばかりではない。佛教にも波斯教にも回々教にもある。否な宗教の開祖の發した言にも、人類の行道を善導すべき金言がいくらかもある。夫れ基督教の信者は神に依りて特別に擇ばれたるものと自稱してゐるが、其の精神はやがて他人を卑下するの精神となる。他宗の教義を誹謗する偏狹的思想となるのである。今や文明國の人士は譏然として目醒め來り、聖書にあるやうな基督の生誕や、奇蹟や、復活や、昇天の記事を信じなくなつた。今や基督を以て一種の聖人であり、其の人格に於て印度の釋迦や支那の孔子と大いに似たるところのものがあ



ると爲すに至つた。況んや舊約にあるが如き、アダム・エバの蛇によつて欺かれ、夫れが爲めに人類が今日の如く墮落し、罪の子となつたと云ふやうな、子供だましのやうな傳説に就いては何等の意味をも考へなくなつた。吾人は己れの形態に依りて神を創造し、また人は神の形に依りて作られてゐると云ふやうな思想は、一種幼稚な人間の想像を表象したものに過ぎない。

昔時、智識の未だ幼稚なる時代に、人は英雄や偉人を以て一種神の如きものと思ふた。否な神の權化や表現と思つた。故に彼等は死後神として神社佛閣に祭られ、人は其の功德に預かり、其の神化した人格に肖からんとした。之れが即ち英雄崇拜と同じ性質のものである。之れなれば頗る美しき考である。然るに之れが一變して利慾の爲めの神社佛閣となつたのであるから、識者に捨てられたのも亦無理はない。吾人が天上の神を想像するときに、夫れが唯だ性質の表出に過ぎないにも拘らず、嘗つては地上に棲息し、而して死したものと想像して居るのである。蓋しこれは古き因襲や、情性に支配せられ居る觀念であつ

て、何れの國にもそれを見る事が出来る。彼の支那の孔子は歴史的の人物で、現代の社會にも猶大聖人として尊敬せられて居る。彼を神となし、彼が爲めに社廟を設けて崇拜するの念は、無論大に嘉すべきものであるが、之れに色々と迷信の衣服を纏はし、太陽神や基督と同様の傳説を追加するに至つては、依然として迷信たるを免れない。彼のパーペリニーの英雄アンチノウは、ハドリオン帝の命令によつて神となつた。其の碑文に『彼の祭壇に供物を捧ぐれば、彼は則ち病氣を癒す』と云ふ事が記してある。また其の傳説に、彼は母の地上に降れる神と談話せる都度受胎せる神の子であると記してある。彼の千古の英雄ジュリアス・シーザーもまた神の子であると云はれて居る。彼の大神のジュピターは凡ての神の神であつて、永遠の父のタイプであるにも拘らず、地上の人間と生れ、結婚し、クノーススに葬られたと云はれて居る。

斯くの如く吾人は偉人を神となし、神を人間化した傳説や口碑の各國に無盡藏なるを見るのであるから、吾人は最早斯の如き事實を繰返すの愚を避けなけ



ればならない。兎に角偉人を死後に神となし、其の傳説に立脚する宗教に必要な性質の衣を着せ、恰も古代の僧侶が色々勝手なる教義を工風して基督にあらゆる美徳の性質を附與したやうに、今日、日本の色々の宗教が世界的の金言をその教義に結び付け居るやうに、工風し、改造し、改善し來つた事は蓋し否定が出来ないのである。此の場合に於ては、寧ろバイブルの如き古い經典のなかつた方のものが、勝利を得る事になる。今日基督教のバイブルは、此の點で却つて禍を爲して居る。故にハンネーは基督にヨハネの系圖が累をして居る如く、聖書の編纂が寧ろ無益であつたと云つてゐる。然し基督の傳記は一種の小説であつた。歴史にない識者の騒いだのもまた尤もである。而して其の聖書は羅馬政府管轄下の猶太歴史を知らない、しかもバレスタインの地理や習慣を知らない著者に依つて編纂せられたものである。

## 二〇、侵略手段としての基督教

何故に羅馬が基督教を國教として用ひたのかは誰も知らない。蓋し王位の黒幕は常に不明であるからだ。吾人は羅馬が基督教を歐洲に宣傳した丈は確に證據を握つてゐる。何が爲めに羅馬は基督教を宣傳したか、之れは大なる問題である。吾人は今之れを詳細に論ずるの餘白を持つてゐないが、總論や本論の所々に於て其の一部を記述して置いた。蓋し基督教は敵本主義の宗教であつたのだ。

當時羅馬の領域は東は印度より西は英國に跨がつて居た。其の帝國を平等にしかも安逸に統御せんと欲せば、宜しく一大宗教の必要があつた。之れは既に前述の通りである。茲に於てか、僧侶や神學者は羅馬の爲政者の命令を受け、喧嘩をしない、柔和なる、無抵抗の宗教を製造したのである。故に其の編纂には非常なる技術を凝らしたる跡あるを發見するのである。基督紀元前後、三百年頃アレキサンデリアに多數の言語學者が居つた。當時其の市で話されて居つた言葉は希臘語であるが爲め、聖書も亦希臘語で記述されたのである。果して



如何なる學者が此の聖書を編纂したのであるかは全く手掛りがない。蓋し聖書は羅馬政府の政策上より編纂せられたものなるが故に、其の名の煙滅せられたのもまた無理はない。其の名は或はマタイやルカやマカやヨハネの如き基督の弟子であり、或はペテロやポーロや其他の使徒の名稱を用ひてある。然しポーロやペテロを除けば何れもガラリヤの漁夫共で、無學の徒であつた。其の無學なるが爲めに、今日見るやうな無學の記事を書いてゐるのかも知れない。されど其の當時アソカ帝の命令の下に傳道せる佛教徒の美なる教義、即ち久遠の愛を経となし、優美ではあるが、男性的のマークス・オーレリウスの教義を緯とし、新しき教義を組織し來つた事は、無論弟子共の手で出來ない藝當であつた。然り今日になつてほゞその黒幕のマソレットスや、テクラヤ、ユウセピウスや、オリゲンや、シユトニウスや、シオドシアや、ゼロームや、シンナークス等である事が知れた。其の最も衝に當つたものはマソレットスであつたらしい。他の學者共は羅馬政府爲政者の命令の下に色々聖書を改造し、訂正し、組み換

へなごしたらしい。

兎に角之れによつて羅馬帝國領土の民族を平等になし、右類的無抵抗なる教義を宣傳したのである。偉人や、學者の産出は思想の攪亂者であるが爲め、寧ろ無學を懲慫したのである。之れが抑も『見ずして信ずる者は幸なり』の基督教の旗章となつたのだ。之れは恰も英吉利が今日印度に高等なる教育を獎勵しないのと同様であつた。彼等は信仰生活に重きを置かしめ、此の世をツランゼンデンタルと見さしたのである。現世の生活は假の宿であり、目指す所は天國にあると云ふやうな、人生放棄の教へを説いたのである。之れが爲め古來、いかに幾多有爲の青年が現世を棄てて彼の世の天國を慕ひ旅立つたか知れない。即ち基督教は始めより信仰を要求する。迷信であらうが、錯覺であらうが、そんな事は無論問題ではない。信仰山をも遷すといふ基督の言に至つては、實に無智なる暴言である。此の言は正に科學の敵である。科學の公式を否定したものである。『馬太傳』第六章三、四節に『明日の事を思ひ煩ふな。明日は明日み



づから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にして足る』と云ふやうな事がある。即ち信仰あらば神は何もかも與へ下さるのである。今回の東京の大火で、神に祈り信仰によりて其の災厄より遁れんとした者があつた。古諺にある如く、落ち来る火花は拂はざるを得ない。雨は降るの理由があつて降り、風は吹くべき理由があつて吹く。因果の原則に支配されない現象は何處にあるか。同章二四節に『汝等神と富とに兼ね事ふること能はず。』之れも亦此の世の富を放棄さしたものである。神に事へるには富が禍をなすのである。天空の天國を目的として居る人士には、バイブルは名の如く聖書であるが、吾人には嘗つて敵本主義であつた教書としか見えないのである。

タシタスは吾人に告げて『羅馬政府が其の教義を英國に宣傳したる當時は盛んな迫害を受けたのである。それが爲め爲政者達は、其の反對せるドルイド派の僧侶を残らず捕へ、アングレサの島で撲殺した』と云うて居る。今日英國の國教は基督教であるが、眞實信者であるものは僅かに一割しか無いとハンネー

は云つてゐる。然り羅馬政府は政策上の方便として基督教を世界に傳播した。其の傳統的の基督教を有する西歐の強國は其の宗教を利用して色々の大罪を犯して居る。之れは東洋では惡魔の宗教となつて居る。

宣教師は其の惡魔の先鋒となり、印度を領し、安南を掠め、香港を奪ひ、青島は宣教師の強姦事件より遂に獨逸の爲めに取られてしまつた。日本も約三百年以前、ゼスイトの爲めに國を横領せられかけた。若し千古の英雄秀吉が居なかつたならば、或は今日印度の如く強國の一領島となつて居つたかも知れない。米國の比島を奪ひ、布哇を掠め、キューバ島を略したのも、其の名義は文明の爲と云ふ。これは畢竟文明の宗教を宣傳せんが爲めであること云ふ。基督教の宣教師は支那や朝鮮に於て日本政策の邪魔をなして居る。之れは即ち嫉妬的行爲であつて、宗教の本性たる偏狭心に歸因するものであらう。蓋しそれが本國の爲めなれば何れもが善行であるが、日本の爲めに行ふの善行は凡てが自國の爲めの惡であるのだ。



二一、無智の信仰は精神病なり

吾人は無智の信仰位恐ろしきものはないと思ふ。蓋し信仰は智識を疎外し、ヒステリックの狹信を招致するからである。而して之れに希伯來の性的宗教が結び付いてゐるのであるから、仲々常識を脱する事が多い。けだし恍惚の境涯は性的教や情的の宗教に多いからである。太陽教は釋迦の柔和なる教義を含み嘗ては偉大なる宗教であつた。其の初めは疑もなく神殿なき、佛閣なき、單純なる宗教の奉事であつた。其の奉事も嚴格なる理性に富んだ野天のそれであつた。然るに今日基督教信者は、光よりも暗きを欲するやうになり、而して其の集合もまたフリーメーゾン流の結社の如き觀がある。けだし之れは其の當時基督教々徒の社會に行はれた思むべきアガーベの如きものより、傳統的に繼續して來て居るもので、今も尙吾人はリバイバルや、亞弗利加のオリギーや、シエカー派や、クリスチャン・サイエンス派のウイッチングや、イエルスや、リツシ

ングの如きものに於て其の一端を見るのである。これらは多く下層の人間社會に流行するもので、其の行爲は一種の自己催眠である。

人類は凡て模倣の本能を持つて居る。一人が自己催眠に罹れば、其の隣のものも直ちに自己催眠に陥り、一種精神的のアットロフイに陥るのである。之れに對して有名なるヴントは『模倣の欲動』と云ふ名稱を與へて居る。彼の十六世紀時代に獨逸の諸地方に甚だしく流行せしヒステリーの如きは、即ち其の好適例である。之れは主として尼僧の間に流行せるヒステリーの發作であつて、最初一人の尼が痙攣を起すと意識を失ひ、牀上に倒るるや、遠く隔たりたる室に居る尼さへも、其の狀を目撃して直ちに傳染し、意識を失つて倒れ、自分の身體を嚙つたり、互に噛み合つたり、或は他人を傷けたりして喧噪を極むるものである。また基督教に於ける惡魔憑附の迷信が端なくも第一世紀の頃より第三世紀の間に亘つて流行性精神病を惹起した。之れは一種の精神障礙に原因するもので、汎ねく多數の人間に傳染した。また狼憑の迷信に基づく精神病が、



十六世紀の末葉から十七世紀の初めにかけて流行した。其の他蛇を見たり、或は其の話を聞いたり、或は恐怖すべき事柄に因りて衝動的に此の精神病が起ることがある。之れはヒステリック性のもので、婦人に限られて居る。此の病氣は健康者にもまた病者にも起るもので、前者にありては群集してゐる場合に起り、後者にありては早發痴呆症の場合に認められるのである。斯くの如き現象はクリスチャン・サイエンスや、ホーリネス教會に今も猶見ることが出来る。兎に角今日リバイバルが起つたとか、狂信的の宗教を奉事することによりて得たる精神異状の經驗を以て、自ら神の恩恵に浴したと自稱して頻りに法悦がるものも居る。自ら神に逢ひ、神と話を交換する様な體驗を有せるを以て、己れは一生基督教の神を捨てる事が出来ないと言ひ居る者も少くない。そは智識の進むと共に、一種の精神上の錯覺であつた事がわかるであらう。

現代は此の大戦争によりて二百五十年一足飛びに躍進したと云はれて居るが、或は然らんである。而して識者は今日迄の宗教を只大部分は迷信なりと看破し、

時代の錯誤であつた事を知るに至つた。將來の宗教は智識の上に立脚した内容のものであらねばならぬと云ふ思想に支配されるやうになつた。嘗て大ハックスレーが青年への勧めに『真理に隨へ。其の真理を發見せんが爲めに全力を注ぐべし。其の真理を萬事の指導者となせ。斯の如き研究は迷信によりて妨害せられてはならない』と云つてゐる。此の勸告は今や英國の僧侶連によつて採用せらるるやうになつた。英國は今や最後のドグマより脱離して、ドグマの束縛なき自由の教會を設立せんとして居る。今迄教會に屬せざりし學者や、政治家と共同して、世界進歩の急先鋒となり、心的奴隸の最後の足枷より脱出せんことを奮闘して居る。

吾人は約二千年間、基督を以て眞實神の獨り子となし、祖先の罪を贖はんが爲めの救世主メシアとばかり思うて居つた。然るに今日ハンネーが前述の如く、基督が正に印度の太陽神クリストナの寫出なる事を具體的に説明して呉れた。之れが爲めに吾人は人生五十年間は愚か、祖先以來欺かれ來つたことが分つた



のである。詐欺も餘りに大なれば、所謂無限大は無限小に合するのであつて、消極と積極の區別が出来なかつたのだ。恰も蠅の眼に映ずる人間の體が想像されざるが如く、餘り人や、其の言が非凡なれば、愚人であるか、偉人であるかの區別が付かなくなる。餘り巨大の魚は俎上の料理に登らず、餘り大なる愚人は刑法の罪人とはならない。之れは東西共通の事實である。基督の行動が總て人間らしくなかつた爲めに、吾人は眞實神の子であり、其の言が正に神の言であると思つた。今になつて見れば、之れは大本教の靈媒の言と同様に頭から嚴かなる命命であつたのだ。

### 二二、富の獲得を忌める神の言葉

宗教には所謂神の言が必要である。聖靈や、靈媒の言はなくてはならぬ日用の糧である。頭から高飛車に斯くあるぞよ、斯くせよと來ると、何となく神々しく聞える。之れが爲めにエルサレムや大本教の殿堂が必要となつて來る。宗教者

の所謂神は無形なる故に、凡て目に見える堂宇や、背景や、耳に聞える靈媒や降神者の言が必要である。其の堂宇や背景は、常に崇嚴なるものであらねばならぬ。其の靈媒や降神者の言もまた自然と頭の下るやうな嚴格なものであらねばならぬ。バイブルにあるやうな神の靈媒、基督の言もまた其の性質を帯びて、彼は常に權威あるもの、如く語つた。基督は決して笑はなかつた。然り笑ひは宗教には大の禁物である。滑稽が這入れば威嚴は忽ち消滅する。故に古來基督の肖像を書き來るや、常に悲しみに沈める有髯の病人らしきものであつた。基督の相は所謂グレーブであつた。彼は貧困の大工の家に生れた。三十年間は大工として貧乏の生活を送つた。其の後の傳道生活に如何にして食物を得たかは不可解とせられて居るが、兎に角みじめな生活であつたに違ひない。基督の生活はクリシユナや、釋迦の寫出ではあるが、彼は十字架に就くや卑怯にも『父よ、此の杯を我れより放ち給へ』と云つて、其の苦痛を訴へてゐる。而してそれは千古の謎である。ウエルスは云つてゐる。然り基督の生活は何もかもが悲惨な



生活であつた。而して之れが一方では同情を唆るの方便でもあつた。否な夫れがまた宗教心を唆るのグレイブの基督であつた。

基督教の信徒は基督を以て模範となし、其の言葉を以て神の言葉と思つてゐる。而してその説く所は今日の吾人の説く道徳とは全く反對の地位に立つて居る。若し眞面目に之れに服従せんと欲せば、現代の社會組織を破壊する事になる。即ち其の第一は富の獲得を忌む事である。第二は正義の主張を忌む事である。第三は骨肉の觀念を忌む事である。

『ルカ傳』第十八章十八—二十五節に『或る司問ひて云ふ。「善き師よ、われ何をなして永遠の生命を嗣ぐべきか。」イエス云ひ給ふ。「何故我れを善しと云ふか。神ひとりの他に善きものはなし。誠めはなんぢが知る所なり。姦淫をなす勿れ。盜むなかれ。偽の證を立つる勿れ。汝の父と母を敬へ。」彼いふ「われ幼き時より、皆之れを守れり。」イエス之れを聞きて云ひ給ふ。「汝なほ足らぬと一あり。汝の有てる物ごとごとくを賣り、貧しき者に分ち與へよ。然らば財寶を天に得ん。

かつ來りて我に従へ。」彼は之を聞きて甚しく悲しめり。大いに富める者なればなり。イエスは之を見て云ひ給ふ。「富める者の神の國に入るは如何に難き哉。富める者の神の國に入るより、駱駝の針の孔をこほるは反つて易し。」之れは現代の社會とは絶対に相容れないものである。故に彼は神と財とは兼ね事ふる事能はずと云うてゐる。(馬太六章二四節)彼は乞食的の生活を獎勵した跡がある。昔は兎に角、今日の社會に於て財産なきものは一日も安心して生活の出来るものでない。吾人の今日の奮闘は明日を慮るが爲めである。個性の延長と見る子供の養育や、教育は蓄財を要する。時には荒れ年がある。時には大震災がある。時には泥棒に出遇ふ事もある。之れに對して相當の準備を爲して置く事は、常識問題で識者を俟つて後に知るべき性質のものでない。

『馬太傳』第六章二五……三四節に『この故に我なんぢらに告ぐ、何にを食ひ何にを飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を着んと、體のことを思ひ煩ふな。生命は糧よりまさり、體は衣よりも勝れるにあらずや。空の鳥を見よ。播かず



刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひ給ふ。汝らは之れより遙かに優る者ならずや、汝らの内誰か思ひ煩ひて身の長一尺を加へんや。また何故に衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ。勞せず紡がざるなり、然れども我なんぢに告ぐ。榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及ばざりき。今日ありて明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝等をや。あゝ信仰薄きものよ。さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んと思ひ煩ふな。是れみな異邦人の切に汝を求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらのものの汝等に必要なるを知り給ふなり。先づ神の國と神の義とを求めよ。然らばすべてのこれ等の物は汝等に加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな。明日は明日みづからを思ひ煩はん。一日の勞は一日にて足れり』とある。これは非明日の主義であつて、明日の事を思ひ煩ふ勿れ、天の父はなくてはならぬ物を與へ給ふと云ふ事である。然り之れは怠慢者に取つて頗る都合のよい主義である。實に調法なる他力教である。

ハックスレーは彼の有名なる山上の教を『種々の異なる方面より得たる材料によつて恰も寄木細工の如く編纂したものである』と云つて居る。ホッツマンは『山上の垂訓は希伯來の文書中より謄寫せるものである。』と云つた。

夫れは兎も角として、實に非常識極まるの教訓である。吾人は今一々之れを駁するの紙數を有して居らない。然れど『鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず。然るに汝らの天の父はこれを養ひ給ふ』の言に至つては、實に驚異の念に驅られざるを得ない。吾が農家は鳥によりてどれ丈けの害を被つてゐるか。即ち鳥は穀物や、果實の泥棒である。彼等は播かず、刈らず、倉に收めず、唯放浪、放漫の生活を送つて居るが爲めに、吾人の農作物を泥棒せざるを得ないのである。尤も農蟻や菌蟻の如く、作物の種を播いたり、菌の胞子を植ゑ付けて、食用菌を作るものもあるが、他の動物は多く泥棒的の生活を送つて居る。他人の孜孜兀々として栽培せる農作物を食害したり、他人の蓄藏せる穀物を食盡する所の害虫を養ひ置くの神あるが爲めに、吾人は年々歳々多大の損害を蒙



つて居るのである。此の思想は信仰的生活者を驅つて、乞食たらしめたのであるまいか。今日伊太利の如き基督教國が何故に貧乏して居り、これに反して基督教を蛇蝎の如く嫌忌する未來なき猶太人が、何故に資力的に世界を風靡し居るかを見るに及んで、吾人は此の教訓の大いに社會に禍をなし居るのを見るのである。イエスは天國の第一の敵として時間的の生存を否定したが、人間生活には衣食住の問題が第一である。其の獲得は生きさんが爲めのスタートである。夫れを思ひ煩ふ勿れ。此の世を放棄せよ。此の世は夢の世である。浮世である。眞の世界は天國にあると云ふ。然り、之れに服従する事は民族の破滅である。農民も漁夫も工夫も働くに及ばない。神を信仰すれば、神はなくてはかなはぬ糧を與へ給ふと云ふのであるから、實に驚かざるを得ない。これは嘗て希伯來の教書にあつたものを、新約の著者が漫然爰に挿入したものであると云ふ事である。

基督教の過去や未來の教義に没頭する人間は、現代の法悦や苦痛を放棄せん

とする傾向がある。彼等は唯未來の樂園に向つて如何に邁進するか、の觀念を腦裡に有するばかりである。ベック博士は『イエスは第一の敵として時間的生存に關する配慮を擧げた』と云つてゐる。基督は時間の觀念を脱却したものと見え、明日の事を思ひ煩ふなかれと云つた。明日の事を思ひ煩ふ事は則ち財産を思ふことである。財を貯へんとするの觀念は、全く明日の不安を防がんが爲めの觀念である。明日の觀念なきものに財の必要なきは理の當然である。明日あるは則ち時のある爲めで、神には時がない。明日がない。時のある事は則ち神のない事である。けれど此の觀念が此の現實社會に何の益があるか。否夫れは社會に大害があるのである。

### 二三、正義の主張を忌める神の言葉

第二には正義の主張を忌むことである。則ち人類の本能を放棄し、徹頭徹尾無抵抗を慫慂する事である。基督は山上の垂訓に『去れど我れは汝等に告ぐ。惡



き者に抵抗ふな。人もし汝の右の頬を打たば左をも向けよ。なんぢを訴へ下衣を取らんとする者には上衣をも取らせよ。人若し汝に一里行くことを強いなば共に二里行け。なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者に拒むな』(馬太五章三九―四二節)此の消極的の教義がどれ位社會の文明を害し居るか知れない。彼のトルストイや、タゴールや、ガンデーもまた無抵抗主義を標榜して居る。時には人間社會に其の無抵抗の必要なる事もある。けれどもクエーカー宗の如き無抵抗で行けば國は亡びてしまふ。今回の大戦で英國のクエーカー宗は、其の無抵抗主義を排して、戦争に参加したからよかつたが、若し彼等の全部が飽迄も此の主義を強行した場合には、必ずや英國は慘敗の悲運に遭遇して居つたであらう。

余は嘗て『毒を以て毒を制すべし』として、狼に對しては狼を向け、獅子に對しては獅子を向けよと懲憑した。獅子や狼に對しては兎や鹿は向けべきでない。此の場合の無抵抗は無意味だ。窮鼠猫を嚙むて、反抗せざれば殺されて仕

舞ふのだ。夫れでも基督の所謂天國の再生が確定して居るものなれば兎に角であるが、夫れが無いものとすれば、之れ位悲惨なる信仰は無い。故に『天國に於ける最も幸なるものよりも、此の世の最も不幸なるものの方が幸である』と云ふ諺が西歐に現れて來たのである。トルストイは此の無抵抗主義や、その他、山上の教訓を實行せんと欲せば、宜しく社會の組織を改造せざるを得ないと喝破して居る。蓋し夫れは確かに達見である。吾人は如何にして人間性が進化し來つたかを知るに當つて、到底斯くの如き無抵抗や無能的主義の現代の社會に行はれざるを知る。此の點に於て孔子の教義が正に其の當を得て居る。夫れは正に實踐的である。彼は『非を以て正さざるべからず』と云つてゐる。然り、正義は決して無抵抗によりて葬らるべきものではない。非は飽く迄も正さざるを得ない。正義の主張や、権利や、名譽の擁護や、獨立や、自尊の精神は、畢竟自我の高潮である。故にベック博士は『他人の吾人に對して不道德を行ふに當り、吾人が公民權や一身上の名譽を擁護することは、常に吾人の權利のみな



らず、道徳上の義務である。若し之れに對して吾人が忘るるならば、即ちそれは不道徳の行爲を支持する事になる。之れに依つて社會の基礎を覆へし、社會の維持を目的とする道徳に違反する事になる。然るに斯くの如き一身上の名譽や、公民生活に於ける自我の主張の觀念は、宗教と全く没交渉であるのだと云うて居る。故に如何なる惡に對しても無抵抗主義を標榜するが如き思想は、則ち社會組織と相容れざるものである。しかも夫れは社會の秩序を亂し、其の基礎を破壊するものである。若し社會道徳が宗教の教義と相容れないとすれば宗教は社會に害あつて、益なきものである。

#### 二四、骨肉の觀念を忌める神の言葉

第三に骨肉の觀念を忌む事である。即ち基督教の教義は四海同胞主義であつて、骨肉や近親の愛情を認めないのである。『ヨハネ傳』第三章三四節に『葡萄酒つきたれば母(マリア)イエスに云ふ、かれらに葡萄酒なし。』イエス言ひ給ふ

『女よ、我れと汝と何の關係あらんや』とある。また『マタイ傳』第十二章四七―八節に『我が母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ、斯くて手をのべ弟子たちを指して言ひ給ふ。視よ、これは我が父、わが母、わが兄弟なり。誰にても天に居ます我が父の御意を行ふ者は、即ち我が兄弟、我が姉妹、我が母なり。』これが基督の思想である。けれども我が民族の美德は則ち父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信ずる所にある。だから其の教義と全く反對の地位に立つて居るのである。之れが爲めに故加藤弘之博士は、基督教の非國家的であり、非民族的である事を極力説明して、基督教の教義を罵倒した。『ルカ傳』第十二章五一―五三節に『我れ地に平和を興さんが爲めに來ると思ふか。我れなんぢらに告ぐ。然らず、反つて分争<sup>わかた</sup>しむ。今より後一家に五人あらば三人に、三人は二人に、二人は一人に分ち争はん。父は子に、子は父に、母は娘に娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に、分ち争はん』と云うてゐる。

また『馬太傳』第十九章二九節に『また凡そ我が名のために、或は兄弟、或



は姉妹、或は父、或は子、或は田圃を棄つる者は數倍を受け、また永遠の生命を嗣がん。然れど多くの先なる者後に、後なる者先になるべし」と、基督に代つてルカが言うてゐる。斯くの如き文章は、尙『ルカ傳』の第九章や第十四章にもある。殊に『凡そ我に來て、其の父母、妻子、兄弟、姉妹、また己れの生命をも憎むものにあらざれば、我が弟子となつて得ず』といふに至つては殆ど從來の社會道德を根柢より破壊するものである。即ち子供に傳はつてゐる親心の延長や、子供の延長なる孫心の觀念を破壊する事である。蓋しこれ自己の永遠に生きんとする奮闘心の破壊である。吾人は此の奮闘心の觀念によつて前途に光明を認むると同時に、其の觀念によつて過去や祖先の功勞をも追想し得るのである。しかもそれが人類の進歩發達を促すの刺戟となるのである。吾人は祖先の名を辱しめざらんが爲めに奮闘する義務を有して居る。我が民族の文明は此の觀念によつて大いに發達し來つた。ベック博士は『時の未來に對する配慮が非宗教的なれば、家族に對しての配慮もまた非宗教的であらねばならぬ』

家族の維持と子供の將來に關する考慮程、此の世の生存に甚だしく東縛を與へるものはない。故にイエスは、凡そ我に來てその父母妻子、兄弟、姉妹また己れの生命を憎む者にあらざれば、我が弟子となす事を得ずと云つた。然りイエスは自己の母と兄弟とを拒否した。蓋し彼の親族は單に彼の教訓の聽聞者に外ならなかつたのである。彼は吾人の祖先が最も神聖なる義務として考へて來た死者に對する配慮の念をも、非宗教的として否定した」と云うて居る。然り基督は汝の敵を愛せよ、右の頬を打たれなば左の頬をも向けよと云ひながら、父母兄弟を見る事他人と何等異なる所がない。基督の弟子になるには父母兄弟の愛着の觀念を去らなければならぬのである。之れ畢竟人間性を没却したるもので、人間の進化發達の歴史を否定するものである。故に基督教の牧師や宣教師がダーウキンの進化論を惡魔の辟論となし、之れを蛇蠍視するのをもまた無理がない。釋迦は父母にも法を説き、妻子をも弟子となして居るが、基督は聽聞に來た母と弟達を追ひ返して居る。蓋し基督の目的は此の世ではなく、彼の世な



る天國であつたのである。夫れでなければ到底こんな言の吐かるべき筈のものでない。否な是は新約著者の羅馬爲政者に依頼せられた敵本主義の作事であつたのだ。

無明日主義や、無抵抗主義や、無妻主義は、佛教にも共通である。否な基督の教義が佛教の夫れに立脚して居る。けれど、此の三主義が果してこの現代の社會に實行せらるるに至つた曉に、社會は如何なる影響を蒙り、如何なる變化を來すであらうか。幸にして人類はそんな馬鹿げた教義に欺されないもので、今日迄文明を繼承し來つた事は、吾れ人ともに祖先に感謝する所である。若し斯くの如き迷信者が多かつた場合に、彼のウキリアム・ジェームスが云つたやうに、地球上の人間は大部分彼の世を慕うて死去したのであらう。否な、宗教的迷信の爲めに、今日どれだけ掛替のない貴重なる生命を無益に葬り去りつゝあるか知れない。之れが爲めに、彼の聖オリゲンは罽丸を剔除した。今日天主教の信者にカステレーションを行ふ者が決して尠くない。故に女性的の信仰者や傳道

師が多いのである。ベック博士が、其のエクスターゼの論文に「若し凡ての人間が宗教的に生活するならば、一切の文化及びあらゆる社會の組織は破壊し終るであらう。宗教は唯だ神を尋ねるばかりであつて、人間社會の目的に對しては全く無頓着である」と云うて居る。然り宗教は社會の組織を破壊し、社會の道徳を覆へすものである。人類奮闘の目的を侮蔑し、社會の一人としての義務を放棄せしむるものである。宗教は全然非社會的である。之れに反して道徳は全く社會的である。宗教の觀念は自己一個人でも存在するが、道徳の夫れは必ず二人以上でなければ存在しない。彼のロビンソン・クルソーには道徳の必要がなかつた。けれどフライデーを得て初めて彼は道徳に束縛せられた。即ち他人に迷惑をかけぬ事が道徳の初めである。エロスの神も一人なれば無意味だ。ヅイナスの戀愛もアドーニスがあれば成立しない。仙人に善惡の觀念のある筈がない。人の行爲は求快避苦であらねばならぬ。之れが「己れの欲する所を人に施せ」の精神となるのである。



二五、基督教徒は敵を愛せず

宗教は全く個人的である。即ち解脱を求め、大覺を尋ね、大悟に達せんとするのである。故に他人には無頓着である。世を棄て、も其の目的を達する事が出来る。山間に單獨なる仙人生活を行ひ居つても出来るのである。されど親もあり、妻もあり、子もあり、兄弟もあり、否な社會の人間が共棲して居る以上宗教はなくとも道德は絶対に必要である。基督教の言ふ所のものは、如何に熱心なる佛教信者でも、如何に孔子の崇拜者でも、基督の贖罪を認めなければ天國に行く事が出来ないのである。故に孔子も釋迦もまた吾人と同様に地極に行くのである。之れを思へば吾人何んぞ孤獨を感じるの要あらんやである。そしてまた如何に破徳の行意があらうが、如何に道德上の缺陷があらうとも、基督を神の子と信じ罪を懺悔すれば即ち天國に行けるのである。蓋し是れ位悖徳の人間に取つて調法なる教義はあるまい。禪宗では清淨の行者涅槃に入らず、破

戒の比丘地獄に墮ちずとも云ひ、眞宗では十惡五逆何を極樂往生の妨げならんやと云うて居る。然り基督教の教義も亦之れと同様である。否な夫れは佛教の寫生であつたのだ。

神に對する罪は不道德でない。罪は即ち神なき生命である。蓋し神と離れ居る事である。神なき場合には罪の觀念が存在しない。ポーロの如く一度恒久の啓示を受けたる一瞬間に、人は過去の凡ての罪を感じるのである。故に如何なる道德家も、此の場合從來の生活が罪の生活であつた事を認めざるを得ないのである。けれど此の觀念が現代の社會に果して何の利益があるかである。此の宗教に道德を結び付けんとしたのであるから、今日の如く宗教は全く社會と相容れなくなつた。故に吾人は社會道德を獎勵し宣傳せんと欲せば、よろしく既成宗教を撲滅せざるを得ないのである。

基督は「汝らの仇を愛し、汝らを責むるものの爲めに祈れ」(「馬太傳」六、四四)と云うて居る。トルストイの云つたやうに、之れが基督教義の眼目である



やうだ。然るに基督教徒には仇を愛するの觀念が毫もない様である。今回の大戦争は確かに其の非仇愛的の大活劇を演じた一大事實である。彼等は同じ葡萄の樹に連なる基督教の信徒ではないか、彼の白耳義で行へる獨逸人の殘虐は、正に基督教徒の殘虐性でなかつたか。全部の處女を受胎せしめたのもまた彼等の行爲でなかつたか。之れと同様に佛人もまた今日ルール地方で同様の事を繰返して居る。基督教國に於て、汝の仇を愛せよの教義の實現せられた事が、今日まで何處にあるか。彼のガレリオは基督教に反對せる地動説を固持して火刑に處せられた。彼のフス教授は教會の專横を憤慨し、其の腐敗を攻撃して、根本的革命を唱道するや、羅馬法皇の怒りに觸れ破門せられ、石牢に幽閉せられ、遂に火刑に處せられた。ルーテルは贖罪符の公賣に反抗し、羅馬教會の教義に反對し、宗教界の誤謬を喝破した。之れが爲め彼のレオ第十世は彼を破門した。彼は幾度か暗殺者の犠牲にならんとしたが、ザクセン公に保護せられてつひに事なきを得た。彼の聖バーソロミューの虐殺の如き、終に數年に亘る慘

憐たる宗教戦となつた。之れが爲めヘンリー三世は、クレマンと呼ぶ一僧侶の匕首の露と消えた。彼のチャールズ四世は新教を保護したる爲め、舊教の一狂僧に殺された。その他三十年戦争の如き、或は慘憺たる十字軍の如き、何れもが仇を愛せよの國教を有する基督教國人の企圖したものであつた。

基督教國の爲めに支那の要港の大部分は奪はれて仕舞つた。南洋の寶庫と稱せらるる島嶼の大部は基督教國の占領する所となつた。或は比律賓と云ひ、或は攻馬と云ひ、或は布哇と云ひ、何れもが基督教國の爲めに掠奪されて仕舞つた。吃々汲々として贏ち得たる吾が同胞の加州に於ける農士も、また今や奪はれて仕舞つたのだ。彼のブーア人の奮闘努力せしツランスバールのダイヤモンド鑛山も、また英吉利に奪はれて仕舞つた。然り亞細亞も、亞弗利加も、濠洲も、南洋も、否な亞米利加までも、何れもが基督教を以て國教とする國民に奪はれて仕舞つた。茲に於てか、吾人は秀吉が我が國に潜入し來つた基督教セスイトを排して、其の毒牙を脱したる大勳功を追想すると同時に、東洋の我が



同胞に對して熱き一掬の涙を注がざるを得ないのである。然り基督教徒は敵を愛せよと云ふ。爾曹惡に敵する勿れと云ふ。其の愛の標榜や、頗るよし。然れどもそれを實行し得ざるは抑も何である。蓋し是れ基督教の製造者は人間性の智識なきが爲めであつた。彼の基督は仇を愛せよと云ひながら、ユダ一人さへも愛することが出来なかつた。此の矛盾の記事は正に基督が筆上の作事たる事を裏書きして居る。

基督教の教義は掠奪主義に最も好適せる方便を提供するのである。常に神を先陣に立て、後陣で惡魔が之れを指揮してゐる。故に敵國を占領するのは畢竟神の爲めである。基督教を宣傳するには其の國を領するに限る。之れは異邦教を征服せんが爲めである。やがては全世界を神の國となさんが爲である。其の名義名文や甚だ美である。之れが嘗て羅馬帝國征服者の爲めにせんが爲めの教義なりしを知るに及んで、吾人は開口閉塞の時を知らない。若し夫れ聖書を繙かんと欲せば、夫れは當時の羅馬帝國の爲めに編纂せられたるもので、然かも

それが敵本主義のものであると云ふ前提を以て通覽せんことを、余は勸告して憚らないのである。

## 二六、宗教信條には眞理の存在なし

それ信仰は大部分迷信である。信仰は目的にあらずして手段である。信と知とは反對の地位に立つものである。智識には信がない。信の對象は眞であらうが、僞であらうが、何等關する所がない。基督教では基督を神の子と信すれば天國に行けるのである。即ち夫れは手段である。恰も酒が慰安を得るの手段的飲料であり、阿片が苦痛を脱するの手段的喫料であると同様である。慰安を得苦痛を脱すれば則ち其の目的を達したので、酒も阿片も其の場合には必要がないのである。人類が安心立命し、大覺し、解脱すれば、即ち基督や釋迦の必要はなくなるのと同様である。故に彼の有名なるアクヒナスは「信と知とは相互排他的のものである。吾人の知識にあるものは直接現前して居るものであるが敵



に、信の對象とはなり得ない。吾人の理性が對象と一致する時に、知識がある。然れど信は現前して居らず、又現前する事能はざる物を信するのであるから、知と没交渉であり、随つて意志の降参が必要となるのである」と云つてゐる。即ち理性が對象と一致する時に知識があるのである。信仰には何等の理性をも要しない。否な理性が信仰を邪魔するのである。故に『見ずして信ずるものは幸なり』の言が宗教家に必要となつて来る。故に知識に立脚せる科學と宗教とは兩立しないのである。ベック博士は『教條は理性的思惟に依つて理解さるべきものでない。夫れは凡ての理智を超越した内的經驗の表出であるから、是非不合理であるべき筈である。不合理なるが故に吾れ信ず』と云うてゐる。不合理であるが爲に吾れ信ずるのが宗教の本領である。それは教父テルチリアンの有名なる言である。蓋し信の對象は不合理に定まつて居る。故に基督教信者は解らないが爲めに信するのであつて、解つて見れば信仰生活より脱するのである。人は宗教に宗教的の眞理があるやうに思つてゐるが、決してそんな眞理

の存在する筈はない。

或る日本の宗教家兼科學者が有名なアインシュタインに左の四つの質問を發した。即ち(一)科學的眞と宗教的眞とは異つた立場に立つと考へらるゝや。(二)この兩者は相容れるのであらうか。つまり科學的發見は宗教的信仰を改良し、迷信を除き得るであらうか。何故ならば宗教的感情は科學的發見に對して衝突を起すことがあり得るから。(三)神に就いてどんな概念を持たるや。(四)『救世主』に就いての意見如何等。

其の第一に對してのアインシュタインの答へは『科學的眞理なる言葉すら明確なる意味を定めることは容易でない。況んや唯だ「眞理」と云ふ言葉に至つては、夫れが或は生活に於ける體驗事實に就て云ふ場合の眞理と云ふ事、或は數學の定理が眞であると云ふ場合、又自然科學の或る學説が眞であるかないかと云ふ場合等、一々夫れに「眞理」なる言葉の意味が異つてゐる。『宗教的眞理』の質問に對して私は何にも是れと云ふ定かな意味を考へる事は出來ない。』第二



の質問に對しては『科學的研究は因果關係的の考へ方や、廣い總攬の見方を促がす故、是れによつて迷信を滅し得、又宇宙を理解する事に就いての確信は、幾分か宗教的感情に血縁ありさうな信念だと思ふ。これがあらゆる精神科學上の奮闘や、勞働の根柢をなすものである事は疑を容れない。』第三の質問に對して、『此の經驗し得る世界、可見世界の内に啓示せらるる卓絶した理性なるもの優越性を確く信ずる信仰、夫れは深い感情がまつはりついたもので、此の信念こそは私の「神」なる概念となるのである。つまり、世界並びにスピノーザの所謂汎神論的概念と呼ぶべきものであらう。』第四の質問に對して、『基督教々義上の贖罪や、信條などは、私は唯だ歴史的現象としてのみ眺めてゐる。』然り、之れが科學界の第一人者たるアインシュタインの宗教に對する思想である。

彼は第一の質問『宗教的眞理』なる問に對して、茲に何等の意味を考へる事が出来ないと思つてゐる。之れは無論の事であつて、宗教に特別の眞理がある筈はないのである。第二の質問に對して、彼は幾分か宗教的感情に血縁のあり

さうな信念だと思ふと云うてゐるが、『宗教的信仰を改良する』と云ふ事は、既に意味をなさないから、彼は何も答へて居らない。夫れ廣く科學的智識が進歩し來れば、信仰は則ち成立しないのである。第三の質問に對して彼は、宇宙の卓越せる理性を以て神の概念となして居る。宇宙の本體或は理性を神となすことは、明かにスピノーザの汎神論の見方である。汎神論の神は人格の所有者でないから、基督教の神とは全く異なつてゐる。吾人が宇宙の理性を以て、神の概念となす事は信仰でもなければ、また迷信でもないのである。之れは決して主觀的のものでない。吾人が眼前に見る宇宙に理性の活動を認めることが、神の概念となるのであるから、其理性が即ち神であるのである。故に神の定義は、無論一定したものではない。科學者の大部分は基督教の神を否定してゐるが、アインシュタインの神は科學者の大部分が認めてゐる。嗚呼大なるかな宇宙、其の本體を憧憬するの精神は、やがて大人格を造る事になる。此の意味の宗教は大人格を養成するに大なる必要がある。之れは科學の衝突する性質のも



のでない、此の意味に於てすべての人間が宗教心を有すると云へる。之れが抑も現代人の憧憬する宗教である。

二七、眞の宗教は人を束縛せず

彼の有名なる佛國の文豪ヴォルテアは無宗教であつた。彼は『人が鐵槌になるか、金敷になるか、何れかの道を選ばなければならぬ』と叫んで、當時の宗教界に大鐵槌を加へた。彼は基督教の信者達に惡魔と呼ばれた。彼は貴族の守護神たる宗教的ドグマを蹴散らした。彼の目には祭壇よりも肉の世界が有意義であつた。然り彼は基督教を信じなかつたが爲めに無宗教と云はれたのである。然れど彼は吾人の唱ふる汎神教的の宗教は持つて居つたに違ひない。彼の寂寞たる寺院生活から飛び出した多感のルーソーにもまた宗教がなかつた。假令彼は無神論者を罵り、未來に神の存在を説いたと云つても、その生活はたしかに宗教から離れて居つた。而して十八世紀前半の思想は、ヴォルテアに依つて代表

せられ、其の後半はルーソーに依つて代表せられた。此の事は正に特筆すべきの現象であつた。

彼のルイ十四世が崩去した時、パリーの市民は酒場に走つたと云はれて居るが、當時彼等はあの陰氣なる宗教的の氣分に飽きて居つたのだ。其の本能にして自由を要求する所の人間が、宗教的の足枷や、手枷に拘束せられて居つたのであるから、ルイ十四世の崩去を聞くや、直ちに酒場に走つたのもまた無理はなかつた。宗教が眞實人類の利益の爲めに人間を拘束するならば、未だしもであるが、其の生活は迷信であるが爲め、其の拘束せらるる人々を悲惨なる境涯より救助する事は目下の急務であるのだ。自由を束縛するやうな迷信的既成宗教は、畢竟破壊せざるを得ないのだ。『物を知るは憂ひの初めなり』と西哲は云うてゐるが、之れ位人類の新鋭氣を挫折せしめた言葉はない。『汝禍なる哉、パリスの學者よ』と基督は學者を罵倒して居るが、宗教には學問が禍をなすので、己れの憂ひを避けんがために『知識は敵である。天國に行くには學問が邪魔



をする』と呼號する。無暗な揣摩や臆測や妄想は科學者には禁物だ。科學者から與へられた一個の證跡より眼を閉ぢ、之れに就いての思索を避け、證據を煙滅せんとするの宗教家を見るが、夫れは悲惨なる落伍者の爲す事であつて、實に言語道斷である。

科學者の思想は常に地球上に立脚してゐる。宗教家の思想は、光線の如く距離の二乗で遠ざかる不明瞭なる天國に立脚して居る。現代の特徴は科學の光を人間自身の上に齎さんとするの理想である。肉の享くべき運命とせられたる幾多の疾病も、最早今日では手を拱ねいて傍觀する事が出来なくなつた。人間は退化したものでなく、之れからが眞善眞美に向つての道程にあるのだ。人類の前途は、宗教の云ふやうな悲觀的のものでなく、實に洋々たる希望に満たされてゐる。アメイバより進化し來り、しかも今では彗星の發現を豫言したり、星の成分を分析したりするやうになつた。神の如き人間の將來、其の自ら創り上げた頭腦の進歩を見るに及んで、吾人は實に其の前途の洋々として有望なるを

知るのである。汎神的の宗教は人生に必要であるが、既成の宗教は人類の文化に利益なきのみならず、寧ろ有害である。しかも夫れが全然科學と相互排他的の地位にある。

ヴォルテアやルソーは此の意味に於て無宗教であつたのだ。されどスピノーザの言謂宇宙の理性を以て神とすれば、即ち彼等も亦有神論者であつた。基督は敵本主義の假作人物であるが故に、彼等は之を信じなかつたのである。

### 二八、恐るべき宗教中毒者の迷誤

吾人は基督に於て、其のモデルの太陽神クリストナと同様の、或は其のモデルなるソクラテースと同様に、其の人格的の長所を憧憬する事は、人類に有利なる事と思ふ。けれど人間性を脱却せるの教義は、全部削除せざるを得ないのである。西歐に『宗教は阿片の如し』と云ふ諺がある。之れは如何にも皮肉な而かも譬へ得た名言である。



余は嘗て紐育に居つた時、下記の話を一友人より聞かされた。即ち或る淪落の辻女があつた。偶然一人の日本人と、時を期して或る所で會せん事を約束した。稍々時を経るも其の女はなか／＼やつて來ない。約束の時間を遅るること約二時間にして、彼女は惶惶として來た。其の時日本人は、早速彼女の遅刻を詰問した。之れに對して彼の女は『自分は淪落の女である。今や吾が身にまつはり居る色々の不幸を考ふれば、一瞬間も安閑として居る事が出來ない。故に支那町の阿片窟に到り、阿片を喫する事に依つて、慰安を得たのである。それが爲めに思はず時を浪費し、約束の時刻を違へたのである。乞ふ之れを察せよ』と云つて、其の遅刻を詫びたさうである。之れは無論、阿片に中毒して居る女であつたに違ひない。其の喫煙により得たる恍惚の状態は、宗教的のエクスタシーと何等異なる所がない。然り、宗教は時に阿片の働きをなすのである。之れによりて慰安を得、之れによりて己れの罪を忘れ、物質的の壓迫を忘れ、時にはそれが麻睡劑の働きをなすのである。一度此の中毒に罹れば、阿片なくして

一日も安易の生活が出來なくなる。故に彼等は此の阿片を得んが爲めに、女の貞操を犠牲になし、あらゆる方便を盡して購入せんとするのである。酒もまた同様の效能を有することは、既にバツカス神の所で述べた通りである。此の阿片や煙草を喫して中毒すれば先づ中止することが困難である。酒や茶に中毒してもまた同様の傾向を有するものである。迷信的の宗教に中毒したる者は、恰も阿片や酒に中毒したものと同様に、一日も其の神なくして安心立命が出來ないのである。

或る基督教信者は告白して、余は基督が今や假令印度の太陽神クリストナの寫出であるといふ體に證明されても、基督の神を一日も捨てる事が出來ないと云つてゐると聞いたが、恰もそれは阿片や酒の中毒に罹つてゐる所のものと何等異なる所がない。近頃中央の新聞で、日蓮宗の信者が朝五時より夜半に及ぶまで太鼓を打ち鳴し、近所の安眠を妨害すると云うて、百餘の人々が連判で其中止方を警察署へ訴へ出たと云ふ事を報じてゐる。宗教的の熱心家となれば



社會の公德も、義務も、責任も何もあつたものでない。若しそれが迷信や中毒であつたとすれば、同胞として寔に氣の毒なものである。

それ歴史を緝けば吾人々類は常に一種の宗教を持つて居つた事を發見するのである。即ちそれは其の時代の理想であつた。理想は永遠に進歩する。若し當時の理想が假作の基督によつて現はれ居つたとすれば、即ち彼は其の當時理想人物であつたのだ。されど二千年前の理想が、無論今日の理想でない事は火を睹るより明かである。故に若し基督教を生かさんと欲せばよろしく現代の理想に一致するやうに、之れを改造せねばならない。けれど其の根柢が既に崩壊されてゐるのであるから、全然之れを別個の坵場に入れて製造し直さなければ、物にならないであらう。

蓋し既成の宗教には、無常觀と罪惡觀が支配してゐるから、生活の價値を奮闘や努力によつて定めないうで、死後に其の價値を定めんとする。こんなものは到底今日の新人を動かし得るものではない。彼等は此の世界を既定的のもの

と見、道や眞理は不變不動のものと考へてゐる。之れが抑も現代の思想と全く異なつてゐる思想である。即ち吾人の世界は決して既定的のものでなく、全く幾百萬年の星霜を経て今日となつたと見るのである。即ち過去は現代の母である。現代は過去の子である。良心も、眞理も、何もかも進歩しまた進歩しつつあるのである。吾人は無限に創造し、破壊し、また組み直しをなし得るものを見るのである。

彼等は改造や進化に對して全然盲目である。故に運命や環境の圏外に脱出し得ないのである。故に彼等は固定したる既定の組織制度の下に生きんが爲め、浪漫心と感傷心に持つてゆく。彼等は現代のみじめな境遇を祖先の罪として諦め、因縁づくを見る。思惟の方面より生活を見んと欲し、生活の方より思惟を見ない。彼等は常に一種の觀念に束縛せられ、理想に於ても常に形式的不變を信じ、眼前に現はれ來る幾多の現象をも全部其の内に吸収せしめんとする。彼等は絶對主義に束縛せられ、其の下に何物をも考慮せんと欲する故に、健全



の思想より乖離し、判断を過まり易い。彼等の目的は天國であるが爲めに、此の世の道德や義務や責任を放棄せんと欲する。彼等は知識を嫌忌し、科學的の發見を隠蔽せんとする。宗教は斯くの如き時代遅れの迷信や、偏狭なる見解を有して居るが爲めに、現代の文明と相容れないのもまた無理はない。

### 二九、利慾に墮落せる崇拜心

人間には崇拜心はある。夫れが宗教である。之れは因襲や傳説的の素質を有して居る。しかも夫れが人間性であるのだ。即ち模倣は本能である。遺傳性の繼承である。之れを崇拜し、之れを憧憬し、之れを模倣せんとする。己れの嗜好や、趣味や、職業や、環境に依つて、色々の對象を造り、之れを神となし、理想とせんとする。遂には其の對象を人間化し、理想化し、之れにそれ／＼の衣を着せ、屬性を與へて之れを模倣し、崇拜し、憧憬し、之れにあやからんとする。其の製造者の精神は、蓋し人間性の慾望に支配せられて居る。之れは決して

て悪い考へではない。けれど時の経過と共に、不幸にも夫れが偶像化し、之れに祈り、之れに信賴し、其の力によりて幸福を得、之れによりて利益を得んとする利己一片の對象物となつて仕舞つたのだ。

基督教でも佛教でも初めは偶像なく、殿堂なき心的の宗教であつた。夫れも今では何れもが天國を慕ひ、極樂を目指す利己的の宗教となつてしまつた。然り何れにしても利己を脱却するの宗教は成立しないのである。之れが爲めに猶太教の如く神が此の世にメシアを下し、之れに依りて全世界を統御征服し得ると考へ、其のメシアの降誕に對し悲鳴を擧げて祈り居るものもある。また基督教の如く、其の目的は此の世ではなく、未來の天國であり、之れがために神の子として基督を信すべきであると教ふるものもある。佛教の教義もまたさまざまに説かれて居るが、要は涅槃に達せんが爲めの教義である。夫れは基督教の教義と同様に、他方に依つて極樂に行かんとするの慾望である。畢竟それは利己の精神より出發してゐる本能である。けれど現代の理想は利己の精神を大い



に蔑如する様になつた。他人を出し抜いて天國に行かんとするの精神は假令物質的に他人を侵害しないとしても、その素質に於て依然として卑しき復讐道徳に外ならない。バイブルは徹頭徹尾此の復讐道徳を説明したものである。之れにより約二千年間、幼稚なる人間を操つて來た。蓋し夫れは時代の錯誤であつたのだ。

今や科學が進歩し、文明が斯く進み來つて見れば、そんな時代錯誤の聖書や教義が何になるか。否な、社會道徳は排他的となり、却つて社會に有害なるものとなつたのではないか。彼の佛國のルソーは『自然に歸れ』と喝破した。昔時の金言や名言は大部分今日の名言や金言ではない。けれどルソーの夫れは今も猶確かに名言である。自然の現象に基督教の如き詐欺は決してない。太陽は晨に出でて夕べに没して居る。月は弦月となり、満月となり、如何に變化するも永遠に詐欺はない。金星は宵の明神として西天に現はれ、北斗七星は北方の天に光輝を放つて決して變る事はない。其の運轉は眞であり、其の存在も

また眞である。『此の眞を追求せよ』と、大ハックスレーは青年に勸告した。其のハックスレーに對して嘗て基督教の祖師は、惡魔呼ばりをしたてはないか。廣大なる宇宙、美なる富士の山、大なるナイヤガラの瀧、此の自然の光景を憧憬するは、やがて人類を大にする所以のものである。偉大なる哉ナポレオン、盛んなる哉豊太閤、彼らの鵠業、彼らの超人的の行動を憧憬し、其の人格を崇拜する事もまた、人類の向上發展に利益である。或は學者的の偉人がある。或は藝術的の偉人がある。或は政治家と云ひ、或は哲人と云ひ、詩人と云ひ、其の異なるの偉人を崇拜する事は、やがて彼等に肖からんが爲めである。吾人にはそれ等の人々が神である。故にナポレオンはシーザーを、シーザーはハンニバルを、ハンニバルはアレキサンデルを崇拜した。彼のプルタークは尨大なる『英雄傳』を著はした。之れによりていかに多くの英雄が刺戟せられ、また養育せられたか知れない。之れが爲めにカライルは『英雄崇拜論』を編纂した。彼は神としての英雄オイデンを劈頭に擧げて居る。詩人には沙翁があり、ダン



テがあり、ベロコンがある。或は音楽に於けるビートルベンの如き、或は彫刻に於けるミケル・アンゼローの如き、或は繪畫に於けるラフェールの如き、これ等の英雄崇拜も亦一種の宗教である。

### 三〇、崇拜は人格の陶冶なり

夫れ崇拜の目的は人格の陶冶にある。人間の向上發展にある。良心の進化發達にある。藝術や學術の進歩にある。其の奮闘や努力は、決して天國や、極樂に入らんが爲めの利己的の慾望心に支配せられて居らない。

吾人は永遠に進歩する。吾人の文明は祖先の遺産である。今日の文明は流れの一断面である。文明の一階段である。しかも其の階段の素質は大いに進歩したものであらねばならぬ。進歩は自然の原則である。基督教の云ふやうな、人間は決して退化したものではない。吾人は今日人間の進歩し來つた跡を見て、其の前途の洋々として益々有望なるを見るのである。狼は訓化せられて忠實な

る看護犬となつた。犛猛なる水牛は訓化せられて今日の畜牛となつた。野蠻人も訓化せられ教育せられて、遂に神性の人間に近づきつゝある。野蠻性は永遠に進化する。桑港の金門公園には雀が人の手より直接麵麩の小片を貰つて居る。埃及の料理屋では恐怖せずして一種の小鳥が食卓に飛び來り、客人より食物を貰うて居る。倫敦ティムス河に架せるタワーブリッジの上では鷗が、子供等の手から直接に食物を貰つてゐる。余は瑞西のゼネバ市ラックレーマンの湖畔でもまた同様なる鷗を目撃した。斯くの如く馴化し、進化し、人になづみ來つたそれは、畢竟人間愛の鳥獸迄に及び來つた證據である。之れはやがて人間社會に行はるる相互扶助の益々發達すべきを裏書きするものである。

如何なる不道德を行ふも、如何なる破廉耻の行爲があらうが、一度基督によりて其の罪を悔い改めなば、神の子となり、罪の購ひを得るの基督教であるから、今日どれ位惡人を助長したか知れない。どれ位落伍者を産出せしめたか知れない。之れは則ち其の宗教の罪であつて、吾人は決して之れを等閑に看過し



てはならない。こんな教義を社會道徳に結びつけたのであるから、社會が今日悪化したのもまた無理はない。人類の幼稚なる場合は兎に角、夫れが一度時代の錯誤であつた事が知れた場合に、恰もバリーの人間がルイ十四世の死せるを聞いて酒場に走つたやうに、『神は最早死んだ、何にも恐るゝに足らない。それ酒場に走れ』と云ふやうな思想になるのは無理もない。

従來の宗教は何れもが方便教であつた。そんな方便や詐欺の教義は必ず時代の進歩と共に看破せらるべきものである。如何に二百年前カントが道徳の要素は神の存在と、靈魂の不滅と、未來の存在の觀念とが必要であるといつた所が、今では時代が遙かに進み來つて、そんな事を思うてゐる識者は何處にもない。夫れは畢竟時代の錯誤であつたのだ。其の反動が今や我社會を害してゐるのである。吾人は爰に於てか、今日の方便教や詐欺教を全く葬つて、更に詐欺なき科學的の新しい宗教を建設せざるを得ないのである。

科學を融和しないやうな宗教は、今日の社會に成立すべきでない。即ち夫れ

は目に見、耳に聞き、手に觸れ得る對象であらねばならぬ。また嘗て生きて居つた詐欺なき人間神の憧憬教でもあらねばならぬ。夫れはヘッケルの所謂『瓦斯様の有推動物』であつてはならない。また其の對象は太陽でも月でも山でも河でも何でもよい。夫れなればスピノーザの所謂汎神的の神である。それを憧憬する事もまた必ずしも利益ない神でない。若し夫れ人類の進歩發達を助長し、人格を養成するものであれば蓋し足れりである。其の神は人間を完全ならしめ、吾人の進歩に刺戟を與ふるものなればよいのである。然らば異教徒を罵り、他人を惡魔呼ばりするの要はない。然らば支那も印度も布哇も玖馬も比律賓も歐米の強國に奪はれないですんだであらう。然らば『我れ不可解なるが故に信ず』の宗教心に捉はるるの必要もなかつた。然らば神祕や不可思議は忽焉として消滅する。總てが客觀的になつて來る。他力を要せざるが故に奮闘心を生ずる。落伍者を鞭撻する事になる。罪惡を助長するの憂ひがなくなる。貴重なる勢力を浪費しなくなる。蓋し之によりて、吾が文明はベルグソンやベーコンの云つ



たやうに、捉へ所を得たと云へるのである。過ぎ去つた智性は本能である如く、過ぎ去つた本能が趨向性であるが如く、アモーバは人類の祖先であつたのだ。假令釋迦に現代の智識なしと雖も、吾人は決して笑ふべきものでない。彼は確に偉人であつた。ソクラテースもプラトールもカントも皆然りであつた。彼等は文明の砂上に其の足跡を残したものである。假令時代の錯誤として、屬性ある神の存在や、靈魂の不滅や、未來の存在を信じたと雖も、夫れは決して侮蔑すべきものでない。其の當時の信は釋迦の『正確なる信』と同様に意味があつた。けれど今日では『正確の信』には意味がないのである。即ち正確ならざる故に信はある。正確なれば即ち信でない。吾人は時代の錯誤として從來『確信』や『正信』の言を用ひ來つた。されど吾人は今日、幽靈や、人魂や、海坊主や河童の言葉を有すると同様に、夫れが廢退性不用の言葉なるを知つたのである。其の他所謂神や、靈魂や、未來の言葉もまた同様の意味であつたと認むるのである。

### 三一、新宗教と永遠なる社會道德

吾人は過去の子供である。其の形體は兎に角、其の本能も、其の因襲も、其の言葉も、また祖先より繼承した。皆な過去の遺産である。吾人は唯だ無意識に夫れを繼承したのである。吾人は今や其の無益にして、しかも有害なる遺産を放棄すべき時代に遭逢した。然り、吾人は宗教や、哲學や、倫理や、古き因はれたる道德を改善し、取捨し、選擇すべき時代に際會した。これに目覺め來つた今日の人類の進歩發達に對して、吾人は識者と共に大に慶賀せざるを得ないのである。

科學は宗教を破壊した。されどそれを建設しないと云はれてゐる。併しながら破壊なくして建設は起らない。況んや社會道德と排他的にして有害なる、方便的詐欺的宗教が、我が民族に何の益あるやである。茲に於てか吾人は、主觀的既成宗教を葬り、客觀的の詐欺なき新しき宗教を建設して、人類の進歩發達を



圖ると共に、社會の安寧や秩序を保證する爲めに、社會道德を獎勵せざるを得ない。今やデカルトの如き方便やオンドロギー的の説明や、信仰的の觀念を、全部脱却せざるを得ない時代となつた。

此の社會道德に就いて、今少しく其の概梗を述べて見る。社會道德は今より約二十餘年前、余の恰も獨逸に留學せる當時、盛んに研究せられて居つた。今では、人間の行動は則ち社會の制裁によつて支配する外はないと云ふのである。夫れが爲めに最も必要なるものは則ち國民の義務教育である。夫れは將來の民族を繼承する小國民に最も必要なる要件である。同時に家庭にありては親の智識を子供に傳へ、社會の一人としては社會が彼を教育する。故に小國民の教育には學校教育や、社會教育や、家庭教育の三種類あるのは爰に云ふ迄もない。即ち教育を施しつつある間に、兒童の不良性や、低能性や、白痴性の見分けが判然して來る。此の時に善良の分子と悪性の分子とを隔離する事が出来る。之れが爲め或は感化院を興し、或は家庭學校を建て、彼等に特別の教育を施すの必

要がある。其の感化なし難き低能兒や、不良兒は、特別の保護を與へ、隔離せざるを得なくなる。獨逸では尠くも一割餘の低能兒があると云はれてゐる。これ等の遺傳性悪性の者が成人したる場合に、國民の將來の爲めどうしても結核若しくは去勢せざるを得ないとせられてゐる。強姦常習犯者には生殖器の異常發達をなせるものが多い。これ等が社會に惡種を扶殖するやうになれば、それこそ社會の破滅である。前科者は神聖なる家庭に出入を禁じ、社會もまた前科者として之れを遇するの必要がある。低能的前科者は大部分病的で、外科的の施術によつて平治せしむる事もあるが、先づ今日の處、彼等は普通の人間になり得ないのである。前科者を神聖の家庭に出入せしめず、社會が彼の有名なピクトル・ユーゴの『レ・ミゼラブル』に出て來る主人公ジョン・バルジョンの如く、彼を以て前科者となすことは則ち社會の制裁である。

此の社會の制裁を受くるの人間は、義務教育の時より大部分知られて居る。けれど世には無籍にして義務教育を受けざるものが今日でも決して少くない。



而してこれ等の分子が今や悪性の種を社會に扶殖しつつある。夫れは何れの國にもあることで、夫れは爲政者の等しく苦慮する所である。常習犯はどうしても社會安寧の爲め隔離せざるを得ない。然り、彼等には毫も道德の觀念がないのである。吾人は茲に於てか、百尺竿頭更に一步を進め、何故に不良性低能兒の産出するやを研究せざるを得なくなる。

今日の傾向は、優良なる人種に子供が少く、下層の教育なき人間に子供が多い事である。知識あるものは生活上の不安より、色々の方法を以て産兒を制限し、知識なきものは制限の方法を知らざるが故に、粗製濫造の傾きがある。下層のものは資力に乏しきが故に、無論充分なる義務教育を施す事が出来ない。時に貧窮の結果、知らずくの間、悪事に染まるの傾がある。けれどそれは教育により大いに矯正する事が出来る。夫れは孔子の所謂恒産あれば恒心ありの教に基くもので、人は食なければ泥棒もする、其の他の悪事もする。されど若し尋常の人なれば決して食へない筈がない。放蕩三昧、親の遺産を蕩盡し、日

夜遊里に耽溺し居るものなれば、夫れは自業自得の罪であつて、蓋し社會の道德を廢棄せるものである。故に社會は彼に向つて、相當の制裁を加ふべきは理の當然である。此の社會の有害分子を宗教が保護するのであるから、前述の如く道德と宗教は排他的にならざるを得ない。

夫れ社會の安寧を妨害するものは、全部社會より隔離すべきである。夫れが爲め社會がそれを隔離するに、多大の資力を要する事は勿論である。今日のやうな過渡時代に、それは止むを得ないのである。我が小國民の此の社會を繼承する時に、其の悪人の一人たりとも小數ならんが爲め、吾人の努力奮闘すべきは當然である。近來優生學なるものが現はれて來た。夫れは遺傳學の原則に立脚して、優良の人間を社會に産出せんとするガルトンの思ひ付である。吾人は狼を訓化して看護犬となしたやうに、悪性の人間を幾百年の間に教育や淘汰によつて善化し得べしと見るのである。之れが今日の優生學の力である。遺傳學の恩恵である。吾人々類は立猿の如き祖先より進化し來つた。夫れに近き同類



が今も猶阿弗利加の野蠻人によつて代表せられて居る。吾人は爰に於てか、ポ  
ルネオや臺灣の恐ろしき生蕃を追想せざるを得ないのである。これ等の食人々  
類が、嘗て吾が祖先にあつた事を思へば、吾人は今日の不良兒も、悪性劣等の  
人種も、またやがては改善し、進化せしめ得るものと思ふのである。

彼の狼の後裔なるポツビー犬は十年間主人の墓側に伽をなしたではないか。  
犖猛なる獅子は埃及のファロー王の爲めに敵陣に突進して敵人を噛み殺したで  
はないか。彼の恐怖せらるる獵豹は鹿の狩獵に利用せらるゝではないか。其の  
他鷹や鷲が教育によつて人間の爲めに小鳥や小獸を捕へるが如き、彼の恐ろし  
き鰐が己れの口に『ケリ』の如き小鳥を隠して保護しやるが如き、其の他教育  
によつて善化し得るの猛禽や猛獸は地球上に決して少なくない。之れによつて  
吾人は人類の教育の前途に益々光明を認むるのである。

然し教育には詐欺や方便は禁物である。假令善化し得べき豹でも、狐でも、  
一度騙せば決して其の猜疑心を去る事が出来ない。余は個人として二十數年間

基督教の信者として欺され來つた一人である。今日宗教の教義が道德とは相排  
他的である事を明瞭に知覺した以上は、如何に變事があらうが再び其の教義に  
欺さるべきものではない。夫れは理性なき下等動物でさへも本能的に之れを拒  
絶するの能力を有して居る。彼の大本教の教義には其の詐欺ある事が發見せら  
れた。それに對して政府は相當の制裁を加へんとして居る。彼等は今や支那の  
紅萬字教と提携して、捲土重來の勢力を示さんとして居る。一度其の詐欺が發  
見せられた以上、爲政者は之れに向つて常に猜疑の眼光を放ち、之れを監督す  
べきは理の當然である。けれど他の宗教にも前述の如き詐欺は決して少なくな  
いのである。唯だ大本教が彼等を代表して其の犠牲となつたばかりである。

基督教の内でも、殊に羅馬カトリック教の教義となると、ハンネーの所謂敵本  
主義であつたのだ。故に吾人は非常なる警戒を要するのである。既往は兎に角、  
將來牧師や、宣教師や、其の他祖師の教義の宣傳に對しては、吾人は常に猜疑  
の眼を以て注意せざるを得ない。まかり間違へば、宣教師の行爲に歸する擾亂



によつて、青島が獨逸に奪はれた様な不幸に出逢はないとも限らない。支那は無抵抗であつた爲めに何の難作もなく青島を奪はれて仕舞つた。我が民族もまた其の教義によりて無抵抗になれば、夫れこそ支那と同様の運命に陥るのである。この無抵抗なる教義が嘗て羅馬帝國の敵本主義であつたのだ。夫れが今では強國の敵本主義となつて東洋を掠め、南洋を奪ふの方便教となり、社會道徳を破壊した。吾人は嘗て基督教の教義がよく解らなかつた。即ち其の不明であつた爲めに一度は信者となつた。處が今日解つて見れば、無論其の信仰は國家に有害なるものと思ふのである。

### 三二、無抵抗的基督教は破産せり

支那に背基督教の運動の起るのも、嘗て其の國の要所を奪はれたが爲めの覺醒であつた。吾人は信と知のアンチボーダル・オボジツトの関係にあるにも拘らず、自己の理性を迷霧の間に埋没し來つた往時を追想すると共に、其の巧妙

なる宗教々義たるを思はざるを得ないのである。苟も一度教會に入籍する者あれば、誰もが容易に脱出し能はざるの組織になつてゐる。夫れは恰も天理教のそれにもよく似た所がある。然り吾人は從來既成宗教の教義に過まられ、非常なる不生産的、非民族的の生涯を送つて來た。見よ、其の基督教信者にして富める者は世界廣しと雖も何處にあるか。否な此の世の富者の天國に行くは駱駝の針の孔を通るよりも困難である。然り、其の貧乏が基督教の教義に必要である。今回獨逸で或る敬虔なる一信者が、百萬馬克を除き殘餘の世襲財産の全部を慈善事業に寄附した。所が、今日百萬馬克は我一厘の價值しかないではないか。戦争前百萬馬克の蓄財によりて、人は富裕なる生活をなし得たのである。されど彼は今や乞食となつた。之れが宗教的信仰の生活を送る者の必然の歸着である。

然るに一方猶太人は、基督教と全く反對の宗教主義、即ち現代主義を標榜するを以て、今や世界の富を吸収せんとして居る。否な、今や大部分の富は既



に彼等の掌中にあるのだ。彼等には未來がない。基督教信者の放棄する財産を拾ふのもまた彼等である。彼等は乞食の假裝によりて、敬虔なる慈善家の富を掠奪せんとしてゐる。基督教國の貧乏するのもまた夫れが爲めである。昨年故人となつた、獨逸系の猶太人スチンネスは、此の大戦及び其の後の擾亂に際して非常なる富を獲得したこの事である。或はロスチャイルドの如き、或はセーフの如き、或はサミエルの如き、或はシーメンスの如き、猶太人が一度手を引けば彼の歐洲は破産すると云はれてゐる。嘗て一度天下を風靡した西班牙も、基督教が禍をなして今では半死半生の状態である。伊太利も佛蘭西もまた生産的の僧侶の多きが爲めに窮乏して居るではないか。基督教に熱心でない國が他を出し抜いて富み居るとは、如何にも皮肉な現象ではないか。亞米利加の今日の富は決して基督教々義と何等の關係がない。英吉利の巨財は其の宗教と何等の血縁がない。余は今回歐米を視察し、職務の傍ら宗教をも研究した。今日の彼等の教會を見よ。婦女や、小兒や老人のほか、知識階級者の教會に出入する者がないではないか。

此の大戦争に於て獨逸は佛國の亡びんことを、佛國は獨逸の斃れんことを眞實神に祈つた。時には已れの最愛の子供を殺し戦勝の爲めに犠牲に供した婦人もあつた。基督は叩けよ然らば開かれん、求めよ然らば與へられんと言つた。されどそれは總て詐欺であつたのだ。彼等は信仰生活の全く徒勞であつた事を知つた。彼等は未來なき猶太人が甘き物を食ひ、美なる衣服を纏ひ居るを見た。慈善を行はない、寄附を行はない、しかも守錢奴の猶太人が、所謂此の世のパラダイスを演じてゐるのを見た。茲に於てか、信徒生活者は翻然として覺醒し來つたのである。何れの家庭に行つても、今や耶蘇を語る者がなくなつた。否なそれ所ではない。彼等には衣食住の問題が更に大事となつて來た。夫れが爲め米國には牧師のストライキが起つた。教會には有力者が行かなくなつた。随つて教會が成立しなくなつた。殊に紐育の如きは今や八百萬の人口を有する大都會となつた。之れが爲め危険なる交通の機關や、空氣の不潔や、生活の恐怖



や、その他色々の刺戟が神経を衰弱せしめるやうになつた。それが爲め日曜日の他、土曜日も猶休養を要するやうになつた。其の結果、日曜日の教會に於ける舊式の説教や宗式は、到底今日の青年男女を引き留める事は出来なくなつた。今や宗教の糧はヅキタミンを缺き、野外の運動に生命のエリキシアある事が知れた。其の生命も死後の生命でなくして現代の生命である。故に歐米の何れの公園に行つても日曜日には非常に多くの人が集まつてゐる。或は白衣のジャケットを着て競走するものがある。或はフットボールや、テニスや、クリツケットや、ゴルフや、バスケツトボールや、ホツケや、其他男女の遊戯は無限に行はれてゐる。之れによりて人は浩然の氣を養ひ、之によりて更に新しき銳氣を回復し、生活の爲めにまた奮闘するのである。

宗教は神経衰弱を誘發するものと言はれてゐる。否な夫れは神経衰弱性の所謂センチメンタルの人間がそれに多く集るが故に斯く言はれてゐる。米國ボストンに巡査のストライキが起つた時、通行の婦人は大部分強姦せられた。ボス

トンの伊太利街で牧師は、昔時ビーチチャーやムーデーが行つたやうに路傍演説を行つてゐるけれども、此の演説を聞き居るものはいつも高々十數人位のものだ。そんな時代は最早遠き昔に過ぎ去つて、今や人は此の世の糧を尋ねる爲めに奮闘せざるを得なくなつた。而して此の糧を得ることはやがて生きんが爲めに必要であるのだ。彼の野外の體育運動はやがて健康を齎すのに必要であるのだ。此の人生の行路に社會道德と相反するやうな説教を聞く閑人は、その跡を絶たんとして居る。今や如何に雄辯のムーデーが出て來ても、如何にビーチチャーが熱辯を揮うても、夫れは時代が違つてゐる。今や子供の教育よりも親父の教育が必要となつて來た。

從來基督教の盛んな國ほど、今日其の反動を受けて、宗教の等閑に附せられてゐる傾きがある。日本に於て今日基督教の衰へ來つたのは、外國と少しも異なるないが、しかも夫れは智識が宣傳せられ、教育が進み來つた爲めであらう。今回余の旅行中基督教の最も衰へたと思ふ國は獨逸であつた。彼等は我が國を



敗かすやうな神は信ずる必要がないと言つてゐる。英國では基督教が其の國教であるから、今でも旺んであるやうに思はれるが、事實は決して左様ではない。前述ハンネーの云つたやうに、眞實信者として告白してゐる者は僅かに國民の一割しかないのである。況んや伊太利や佛蘭西や其他の諸國に於て、基督教の勢力ある所は、今や何處にもない。先般露國では基督教の教主が捕はれて死罪に處せられた。其の後全部の舊教徒は入獄したやうに傳へられてゐる。然り、ラスプーチンの如き處女を姦するやうな僧侶は、世に害あつても益がない。今また土耳其では回々教主メチドが國境より放逐せられた。此の次に來るべきものは誰ぞや。近き將來に必ず思ひ當る事があるであらう。

### 三三、智識に立脚して迷誤を去れ

夫れ智識は征服である。智識は豫見である。豫定は力である。智識は眞理である。信仰は全部迷信である。吾人は迷信を破り眞理の發見の爲めに努力奮闘

すべき天職を有して居る。それによりて人類は自然を征服し、本能を征服し、自己を征服し得るのである。彼のカーライルは『汝の手がなすべく發見したものを全力を以てなせ。我等の背後に人類の努力と、人類の勝利の六千年があつて、横たはつてゐる。我等の前には無限の時があり、其處には未だ開闢せられざる、未だ征服せられざる大陸と寶の山がある。是れ吾人の開拓し征服すべき所である』と云つてゐる。然り、人類の進歩發達は無限である。之れが爲めに吾人は努力を要し、奮闘を要する。努力と奮闘のある所には、永遠の進歩と創造がある。世界は人類の力によりて永遠に改造せられ、また發達せらるべき運命を持つてゐる。吾人の努力や奮闘は此の方便的の宗教や詐欺的の教義によつて防遏せらるべきものではない。これ等の宗教や教義の爲めに、文明は少くも十世紀遅れたと識者は認めてゐる。吾人は今日ハンネーの此の大研究に對して心より敬意を表すると共に、科學の何れの發見をも隱蔽せんとする宗教家の愚を啓發し、其の教義の人類に大害あり、社會道德と相排他性なるを宣傳せざる



を得ないのである。是れ蓋し學術に忠なるもの、天職であると思ふのである。夫れがやがては世界の文明をより完全の域に引き上げ、人類の幸福を益々増進せしむるものと思ふのである。

それ知識は安心立命である。自衛の武具である。知識なきが爲めに人は欺かるるのである。知識なきが爲めに人は病氣に罹るのである。それなきが爲めに人は落伍し、不生産的は兎に角、社會の寄生虫となり、負擔となるのである。吾人は眞理を羅針盤となし、智識を尺度となし、社會道德を實踐するに於ては假令來世があり、神があつても何等顧慮する事はない。此の場合には釋迦も、孔子も、否な基督以外の全部の聖人君子は、また基督の贖罪を認めざるが故に地獄に行き、限りなき火に投げ入れられるのである。彼の「大ハックスレー」は「誠實なる人間の地獄は天使の詐欺に充ちたるパラダイスよりも猶我慢が出来る」と云うて居る。實に皮肉の言ではないか。然り詐欺に満ちたる天國が何を意味するか。人は見えないが故に信ずる。聞えないが故に信ずる。手に觸れないが

故に信ずるのである。若し目に見え、耳に聞こえ、手に觸れるものなれば、蓋し信ずるの必要はない。「見ずして信ずる者は幸なり。」此のモットーがなければ宗教は成立せぬ。故に既成宗教と科學は全然兩立すべきものではない。

昨年八月の紐育ウオヅ・ウオルクスの社説「社會出來事の進行」の内に、教會と現代と云ふ一節がある。其の大意は下の通りである。

——羅馬カトリック教を除ける大部分の教會は、其の教義やドグマの問題に關して今や大動搖を呈して居る。古き信仰の冷却は、現代宗教の流行的表徴である。有罪の觀念は長時、基督教の生活者には必要であつた。今や其の觀念は頓に消失して仕舞つた。聖教會の牧師等は、日曜日の説教にさへ從來の教義を否定し、其の削除を監督に迫つてゐる。長老教會に於ては、多くのドグマが今も尙教會の信者に必要であると宣言してゐるが、實際其の有力者はドグマを否定して居る。殊に彼等は處女の生誕や、基督の復活を公然と否定してゐる。然り、之れは決して新しくない。五十年來の科學と宗教との戰爭であつた。此の



古き問題がまた現代の問題の焦點となつて現はれて來た。今や兩方のチャンピオンが出て争闘をして居るのである。假令如何なる感情が現はれても、次の事は確である。即ち信仰の時代は最早や過ぎ去つた。其の信仰より如何なるものが出て來ようが、そんなものは最早や現代の世界を左右する事は出來ない。今日聖教會のワシントン監督が、數月前大規模の伽藍を國京ワシントンに建設すべしと報告した。また近頃紐育の監督が、一千八百七十二年以來建設し來つた聖ヨハネ大伽藍を完成する爲めに、千五百萬弗の贖金を要求した。之れは、米國デモクラシーの爲め、また米國人の心靈上の向上を表象する爲めに必要であらう。されど此の大伽藍の嚴格さを頌揚するものは、宗教的の信仰である。其の大伽藍は信仰夫れ自身と同様に、中世紀に屬して居るものである。其の中世紀の大建築物は、高等なる批判を知らなかつた時代の出現である。バイブルにどんな矛盾したことがあらうが、何にもお構ひないのである。科學に立脚して新約の奇蹟を説明するの企圖もなかつたのだ。これ等は太陽の東に昇つたり、

西に没したりするのと同様の實在と思はれて居つた。此の時には宗教と科學の戦争がなかつた。否な、其の時代には科學がなかつたのだ。否な、恐らくは宗教もなかつたのだ。然しながら信仰は確かにあつた。彼の歐洲に於ける大なる伽藍は、此の信仰の沈黙せる表象である。然り、それは簡單なる容易に理解の出來る神が、吾人の日常の生活を審し、惡を無慈悲に罰し、善人に富饒なる賜物を與へ呉れると云ふやうな、子供らしき信仰の沈黙せる表象であつたのだ。此の千五百萬弗を要する極美の大伽藍が、ハドソン河畔のコロンビア大學と、其處ではダーウキンが最も學界の權威者であるを認められてゐるコロンビアの理科大學と、兩々相並び建設せらるゝに於ては、夫れは如何にも不調和ではあるまいか。――

此の論文の筆者は不明であるが、兎に角夫れがウオヅ・ウォルクスの社説であつて、現代の米國人を支配して居る思想でもあるのだ。彼の羅馬にある聖ペテロ伽藍は、當時一億リーラの大金を投じて建設せられ、之れに依つて伊太利



は大いに貧乏したと云はれて居る。吾人はウオヅ・ウオルクスの筆者と同様に世界の大なる伽藍を見、其の廣大極美なる美術的の大伽藍を頌讚するが、之れと同時にそれが大いに生産的であり、しかも夫れが無智なる中世紀の産物たりしを思はざるを得ない。

かのフォクス・チャクソン博士は數年前『信仰の戦ひ』と稱する數卷の書物を發表した。其の一卷の中に次のやうな事がある。即ち『好奇心ある讀者は、基督教の神學者や、教會の高僧や、聰明にして懷疑的な宗教的傾向ある人々が、神に到る針の孔の入口に重荷にくたばつて、唸つて居る駱駝のやうに、巨大なる荷物で、その邪魔になる神學的責任の爲めに、路傍に喘ぎ乍ら横はつて居るのを眺めるであらう』と。之れは如何にも皮肉な言葉ではないか。即ち富者の天國に入るは駱駝の針の孔を通るよりも困難である。其のやうに、監督や神學者や高僧や宗教的の懷疑者が神學的責任の重荷によつて、針の孔を通れないで、駱駝のやうに路傍にくたばつて居るのである。今日の宗教では其の教義や、戒

律や、宗戒や、因襲や其の他色々のドグマが其の重荷となつて、總ての人間の天國に入るの門口を閉塞し居るのである。基督教の教義は多く人間と矛盾する夫れであるが爲めに、誰もが天國に行けないのである。即ち既成宗教は人類の自由を束縛した。人類の慾性を封鎖した。天國に入らんが爲めに社會道徳を破壊した。人類を無抵抗となし、隱遁的にしたのである。

#### 三四、現代人の新しき宗教及び神

彼のウエルスは『現代人の新しき宗教』に於て、次のやうな事を云つてゐる。夫れは、吾人の宗教的觀念に能く似て居る所があるから拔萃して見る。

——神は己れの永生である。己れから神と同一化されたものが神である。同一化せられないものは昨年の雪と同様に、永久の價值がないのである。神は有限である。新宗教は宇宙神教の一種と見るのである。如何なる時でも、どんな神でもよい。呼び求むれば交りを發見し、慰安と勇氣とが與へられ、而して神



の知覺が内部にあり、その内部の光こそ宗教的經驗の眞體であり、それが眞の神である。彼は一個の存在者であり、我々と交り、我々を通じて存在する。彼は目的を有し、過去と未來を持つて居る。彼は時間の中にある。而してその外にあるものでない。現代の宗教者は、かの想像的な權能なき三位一體に祈るものではない。基督教的正統の教理の多くは、注意深き學者に依つて矛盾の性質を帯びたる獨斷であると解決せらる。多くの信者は今日迄はぼんやりして居つたドグマ、即ち基督の神性や、處女降誕に關する信條等に固着して居つたのである。吾人は今や彼等の信條や、獨斷より離れて、砂漠の様に思はれる曠野の中に出かけて行くのである。然らば最早やふり向いて歸つて來るのではない。吾人は遙か遠方に旅行し、その荒廢の砂漠を越えて居るのである。最早や、吾人は十字架の下に集ふ人間の仲間には歸つて來ないのである。吾人は信仰に依つて信ぜず、しかも拒絶したのである。信仰に依つて吾人はかの神聖な剝製にした案山子、かの古代の神學思想の矛盾せる蓄積、即ち之れを呼んでニケアの神と

云つたのだ。而して此の神は確かに神ではないのだ。吾人は唯だ信仰に依つてのみ其の神を見出したのである。

——新宗教は佛教に能く似て居る。之れは宇宙の起原に就いて何等の系統を提出しない。それはまた時間と空間との現象の背後にも達しない。かのプロチナスからヘーゲルの徒に至るまで、絶對とか無條件とか云ふ否定の言葉で總ての事が斷言し得ると云ふ誘惑を以て、多くの魂を樂ませて來た、氣取つた遊戯の中には、唯だ醜惡なる僭越性を見出すのみである。あらゆる知れたものの背後には、測知し難き幕がある。絶對の存在は覆衣ベイルをかけた存在である。それは生であるか、死であるか、善であるか、惡であるか、何事も知られてない。その存在に就いて、それが簡單であるか、また複雑であるか、或は神聖であるかに就いては、吾人何事も知る事が出來ない。それは、蓋し了解の境域を越え、知識の領界を超越して居る。それは實際無限の複雑であり、また無限の可能性であるかも知れない。然し乍ら、新宗教はその生命とする神がかの存在である



と外觀を装つたりするのではない。また新宗教の神なるものがかの存在を支配し、或はそれと交渉するが如きある特種の關係を有して居ると誇るわけでもない。新宗教はその神が彼の絶對の存在に就いて吾々の知つて居るだけしか知つてゐないか、或はそれ以上に多くを知つてゐるか云ふ事に就いてさへも、敢て決定しようとするしない。吾人に取つての生命は、即ちこの時間及び空間に於ける人格問題である。

——哲學と科學とを以て、その覆衣をした存在を分析的に研究する事は、神に關して何ものをも啓示しない。それは唯だ意識の必要的形式として、空間と時間とをアトムの踊りと、エーテルの舞との瞥見に過ぎないものとして表示するばかりである。いつの時代にか、無限の未來に於て、其の關係を知り、また了解する日が来るかも知れない。それらの黒い覆衣の中に突進して行く力と勇氣とが出来る時代が来るかも知れない。その時、それが吾人の神、人の神、人類の主將であつて、吾人を受け入れるものであるかも知れない。今はそれも唯

だ單なる臆測たるに過ぎないのである。知れざる覆衣は星と共に置かれて居る。その外部の織目はエーテルとアトムの結晶である。その覆衣せる存在、謎の如き、解せられざる存在、夫れは多忙なる生命の影が活躍してゐるその鏡の上を覆ふのである。それは恰も偉大なる静寂の中に埋伏せるかのやうである。然し乍ら吾人の生命は之れを處置しない。またそれを處置する事は出来ない。人類は永久にそれをどうする事も出来ないかも知れない。造物者が善であるか、惡であるか、明白に確かめる事は出来ない。それは善であるとも、惡であるとも考へられる。假令それが生命のあらゆる苦痛と争闘とを與へるものとしても、それはまた日光の歡喜や青春の法悦や、希望や、快樂を與へて呉れる。たとへ夫れが數百千種の疾病を發生せしめたとしても、それはまた男女の美しい手足を形造つた。それはまた蛞蝓と花とを形造つたのである。吾人は死と云ふ最後の没落に對して戦ひつつ、すべての動物の生ける如く、喜び、怒り、悲み、恨み、疲れ、忘れ、貪り、幸らしく、興奮したり、困つたり、苦しんだり、或は



機嫌よく、然り常に死を恐れつつ、吾々の内部に關しては何等の確信も何等の交渉もなく、最後に神を見出すまでは、實にかくの如く生きて行くのである。而して神は外なる星の世界から來るのでなければ、又生命の傲慢から來るのではない。けれ共神は内部の靜かな小やかな聲として來るのである。

——新宗教は唯神の觀念を基督教的神學の絶對や、無限や、神秘から區別したのに過ぎない。神話的處女降誕や、過ぎ去つた時代の宇宙觀や、知的虚偽とから區別したのみである。新宗教は默示や、教權的教訓や、神秘などに訴へない。新宗教の行ふところの叙述は宣言である。即ち單に吾人のすべてが認識し經驗したる所の陳述であるに過ぎない。吾人はすべて人生の嵐の中に生活する。吾人はすべて彼の覆衣ベイルの存在に依つて制限せられた範圍で、吾人の理解を發見する。若しも吾人が救ひを求め、内に神を探るならば、直ちに吾人は彼を見出すのである。すべて之れは事物の本性の中にある。假令夫れを認め陳述するあらゆる人々が悉く殺されても、直に他の人々が同一の結論に到達するのである。

彼等は過りもなく其の行くべき正道を發見するであらう。それは再三、再四、幾度繰返して見ても、同じ事であらねばならぬ。あらゆる眞の宗教はその讀まれる觀念の外殻を脱ぎ捨てて、結局其處に來なければならぬのである。

——今や多くの宗教はそこに來りつつあるのだ。新宗教は神の智識と神の價値とを全然經驗の基礎の上に置いてゐる。それは神に會つたのである。それは神に關して論じない。たゞ物語る。尤も詐欺師にそんな必要があるかも知れない。畏敬や尊敬の如き、さう云ふ何等の覆ひ物もなく、唯だ物語るばかりだ。それは人が友人や彼の援助者に就いて語るが如く、また幸福なる珍事を語るが如く、路傍にて美しい物を發見し、それを拾ひ上げたことを語るが如く物語るのである。

——新しき宗教の神は魔法ではない。從來は神を人間の目的に資すべき魔法の一種として考へて居つた。吾人は初めから吾人の魂を神に與へると云ふやうな意味を充分に理解する事が出来なかつた。宣教師や牧師は稍もすれば、彼等



の策略の爲めに神を呼び賣りにする傾向があり過ぎる。彼等は、民衆が黙つて従いて來るくだらない服従性の勝利に飢えて居る。彼等は自らの爲めに神を使役せんと努めて居る。眞實神は彼等にとつて必要でない事はない。然り神は効能ある剝製であると云ふ事を聞かされて居る。

——彼等の未熟なる魂は神を利用すると云ふ事を考へて居る。彼等は神の名を呼び掛ける。彼等は特に反響があると想像せらるる所の何事かをする。即ち祈りを繰返したり、愚なる讚美をしたり、ユダヤと初代の基督教文學の怪しげなる雜録である聖書を勤勉なる方法で盲目的に讀んだり、さう云ふ風の精神的難行苦行をやつたり、或は安息日を沈鬱な不愉快なるものにしたたりして居る。これからの科物的贖ひに對する返報として、神は彼等の好意に對して、當然因果應報の態度を採るべきものときめこんで居る。斯くて神は天國の丸太運搬人のやうなものになつてしまふ。彼は不祥なる珍事を救助する。憐れむべき疾病を治癒する。豫期しない藥の賜物を工風してくれる。金どか、さう云つた類の

ものを籌策する。彼は破産を防止してくれる。而して彼の信仰深い人々の小さな同類の爲めに、さう云つた千百の奉仕をなすのである。敬虔なる人は、絶えずこれ等の小さな驚き、神から與へられるこれ等の花束とチョコレートの箱とに依つて、喜んでゐるものとして代表される。或は之れに反して神は、彼等の宗教的注意を怠つた者に對して嘲罵的詭計の工風をこらすのである。彼は安息日を破る子供達を殺すのである。或はまた神らしくない注意深き仕事の經營をも破壊する。それはヘブライの神の性質の殘骸を基督教にとり入れたる觀念である。

——新しき宗教の神は攝理ではない。基督教の信徒は、神が絶えず、測知し難き程事件の秩序を吾々個人の利益の爲めに操つて居ると宣言する。新しき宗教の神は罰しない。人間は社交動物である。人間の内には道德的憤怒心の偉大なる能力がある。最初に於ける神々は多く恐るべき神であつた。斯くの如き神はセミチツクの神の性質であつた。その神はヘブライのエホバとして異様な發



育をなした。而して、恐らくアレキサンドリアのセラピウムの影響をも受けたのであらう。而して夫れがキリスト教の三位一體論にも及び、またマホメット教の神ともなつて來たらしい。

——新しき宗教の神は性慾ではない。過去二、三世紀の間に於て、性的思想と感情との複雑から、神の觀念に極めて注意すべき解釋が加へられて來た。宗教の幼年期に於てはこの二つのものは離れないで、一緒に結ばれて居つた。彼のヘブライの豫言者の激怒は、絶えず、かれこれと些細な不潔や、不規則や、或は割禮のこと等に對して、彼等の神の甚だしき怒りを宣言して居つた。割禮の儀式は後世三位一體に變化したが、夫れはもとセミチツクの神の本性であつたのだ。今日に於ても猶、基督教會は神祕的な聖典で結婚式を行つてゐる。羅馬教會はその僧侶から不娶の犠牲を強いてゐる。彼等は私生兒の上に、出来る限り多大なる不徳と不正の罪とを蒙らしてゐる。彼等は私生兒を不幸の子供として取扱はないで、罪惡の癒し難き腐敗の子供として取扱ふ。蓋しこれは正統

派の宗教的權威で、斯くの如き性的問題に對して惹き起されたる宗教的熱情の侮辱や迫害は、則ち野蠻的な遺傳であると宣言する。

——新しき宗教の神は勇氣である、人格である。彼は吾人の如き性質を持つてゐる人格である。彼は吾人と同様に不可知と無限と死の力と闘つてゐる存在者である。彼は、我々の價值ありとするものに價値を與へ、吾人の反抗せんとするものに反抗する。彼は吾人の王であり、其の王に對して吾人は忠實であらねばならぬ。彼は吾人の指揮者である。彼は吾人を感じ、また吾人を知つてゐる。吾人は彼に依つて助けられ、彼は吾人によつてまた悦ばされるのである。彼は冀望しまた計畫する。神は抽象でもなければ、また無限でもない。彼は銃劍で突くが如く、また抱擁するが如く實在してゐるのだ。

——新しき宗教の神は青年である。彼は永久に未來を眺めてゐる。從來の神は多く白髪白鬚の老人の父として代表し、或は表徴して居つた。其處には白い髪と白い鬚と、皺と云ふやうな高齢と老衰の徴候があつたのだ。神の肖像に於



ける斯くの如き高齡の印章は、唯だ傳説とか、習慣とか時間と云ふ衣を着た不  
 死の奥妙に對して、吾人の眼を暗まし來つたと云ふ丈で、吾々近代人の心は  
 最早や斯くの如きものに依つて驚かされないものである。ジョブもウワタンの神  
 も、彼等の氣力の青春を遙かに過ぎ去つた姿である。これ等は人間の心の太古  
 の習慣から來た神々である。新時代の神は吾人の過ちを省りみない。吾人は未  
 來を眺めて居ると云ふ事に、深き意味を持たねばならぬ。若し肖像が神を代表  
 するものならば、それは常に勇敢で、賢明で、その力の盡きる事のなき青年の  
 姿であらねばならぬ。朝の時刻に、彼の足で輕快に前進せんとあこがれつつ出  
 立すべきである。假令彼が今日初めて起つたばかりで、そこに唯だ前途の希望  
 あるのみにしても、夫れは構はないのだ。彼は研えた劍を帶び、輝ける槍を携  
 ふべきである。彼の瞳はその劍の如く輝き、彼の唇は其の前に横はる偉大なる  
 冒險に對する渴望の爲め引きしまつてゐるのである。彼は昇る朝日に反射して  
 極めて鮮かな黄金の如くきらめく鎧を着てゐるべきである。死も彼の周圍に於

ては、廣大なる眺望の谷間に靜かにかゝつて居る霧か雲の堤か影の如くである  
 べきである。陽炎の糸の上と、彼の足もとの芝生の青草の上とに、露がきらめ  
 くべきである。——

以上は、有名なる『歴史大系』の著者ウエルスの、新しき宗教及び新しき神  
 に對する觀念の概要である。無論其の所説には、吾人と相容れざるところもあ  
 るが、しかも夫れは餘程吾人に類似せる宗教觀である。これなれば、科學者の  
 宗教と餘り隔離しないのである。



### 第三章 結 論

#### 一、常に新しき神への同化

吾人の目的は、何れの點に於ても完全の域に達せんとするにある。換言すれば、即ち超人となり、神人となることである。然り神と同化する事である。神も古代の神ではない、現代の神であらねばならぬ。否な、常に新しき神であらねばならぬ。吾人の最も新しき神と同化する事は困難なことである。蓋し最も新しき思想を有する神の發見が困難であるからだ。神は時代の理想である。時代の理想は則ち吾人の神である。理想は時代と共に進歩する。故に神の觀念もまた時代と共に進化する。吾人の良心も道德もまた時代と共に進化してその止まる所を知らない。此の意味に於て昔時の英雄は其の時代の神であり、超人

であつたのだ。されど彼等は最早や今日の神や超人ではない。今日の英雄もまた神であるが、其價值は蓋棺の後でなければ解らない。然り、吾人の人格はやがて神の人格と同化することになる。之れが汎神的宇宙教である。彼のユニテリアンの如きは則ち之れに近いものである。

吾人の宗教は基督教の如き偏狹の宗教ではない。況んや敵本主義の教義を有するものではない。宗教なるものは村雀の如く啼々すべきものでない。また樂隊付で傳道するやうな性質のものでもない。個人と神と同化しようが、其神の經驗を得ようが、そんな事は社會に何の利益もない。蓋し宗教の目的は個人を神性に接近せしむれば足れりとするものである。無論之れは自己本意の人間性に支配せられて居る。故に社會道德とは何等の交渉を有せざるものである。宗教は個人的であるが故に仙人にも隱遁者にも宗教はある。されど道德は社會的であるが爲めに、仙人や隱遁者には道德はない。故に無神論者も無宗教者も社會に對しては何等の關係を有せざるものである。されど不道德なる者の行爲は